

合気道の思想と技

開祖も合気道には形がないといわれていたが、合気道が分かるのは技を通してだけであり、技ができる程度にしか理解できないと思われるので、技の探求は大切である。また、技には哲学、思想が含まれていなければならないと考えるゆえ、合気道の思想と技の関連を追及していく。

<タイトル一覧>

- 第201回 生産霊、足産霊、玉留産霊
- 第202回 技と業
- 第203回 相手を見ない
- 第204回 比礼振り（ひれぶり）
- 第205回 技とは
- 第206回 丸い息遣い
- 第207回 祈り
- 第208回 技は「天之浮橋」で結んで掛ける
- 第209回 大なる愛の攻撃精神
- 第210回 一霊四魂三元八力
- 第211回 三元と合気道の実行
- 第212回 顕界の稽古、幽界の稽古
- 第213回 幽界の稽古
- 第214回 十字道
- 第215回 魂が魄の上に
- 第216回 天地の呼吸
- 第217回 光明
- 第218回 宇宙の真理に従う
- 第219回 一体化
- 第220回 「宇宙生成化育」と「一隅を照らす」
- 第221回 宇宙一家の一貫性

- 第222回 真空と真空の気
- 第223回 技とは
- 第224回 変わろうとしている世界
- 第225回 言葉と技
- 第226回 魂が魄の上
- 第227回 技との対話
- 第228回 技と道と神
- 第229回 人は小宇宙
- 第230回 合気道は武道
- 第231回 殺して活かす
- 第232回 円と円の内外
- 第233回 矛盾と相反
- 第234回 円転の理
- 第235回 極意と道歌
- 第236回 宇宙と一体化するために
- 第237回 山彦（やまびこ）の道
- 第238回 霊体の統一
- 第239回 宇宙と合気道
- 第240回 技と宇宙
- 第241回 技と人格
- 第242回 円と合気技
- 第243回 技の技
- 第244回 神業を生ずる
- 第245回 合気道と絶対
- 第246回 武産合気（たけむすあいき）
- 第247回 空の気・真空の気の考察
- 第248回 大先生のお言葉
- 第249回 天の村雲九鬼さむはら竜王
- 第250回 宇宙の中心を貫く
- 第251回 宇宙の法則
- 第252回 ひびき
- 第253回 宇宙を腹中に胎蔵する

- 第254回 魂が魄のうえに
- 第255回 合気之道
- 第256回 精神と肉体が一つになる
- 第257回 自分の動きの中に相手を巻き込む
- 第258回 円のめぐり合わせ
- 第259回 体（からだ）
- 第260回 日月の呼吸と潮の干満の呼吸
- 第261回 合気道の褌（みそぎ）
- 第262回 天地の力、宇宙の力、神の力
- 第263回 天の呼吸と技
- 第264回 赤玉白玉と技
- 第265回 合気は万有万真の定理を明らかにする
- 第266回 真空の空のむすび
- 第267回 念彼観音力
- 第268回 宇宙の法則「真理」
- 第269回 宇宙の法則 螺旋
- 第270回 宇宙は自己の内にあるとは
- 第271回 宇宙の法則 「陰陽」
- 第272回 二重螺旋と技のずれ
- 第273回 技の法則
- 第274回 見えないものを見る
- 第275回 合気道の修行
- 第276回 息
- 第277回 天之浮橋に立つ
- 第278回 正勝、吾勝、勝速日
- 第279回 直観力と想像力
- 第280回 螺旋で舞い上がる
- 第281回 過去、現在、未来を胎蔵
- 第282回 入身（いりみ）、転換
- 第283回 精神と物質と一如
- 第284回 道 歌
- 第285回 技を出す

- 第286回 合気十（あいきどう）（道歌1）
 - 第287回 合 気（道歌2）
 - 第288回 宇宙の法則
 - 第289回 気（道歌3）
 - 第290回 天之浮橋（道歌4）
 - 第291回 山彦（道歌5）
 - 第292回 極意の稽古は表（道歌6）
 - 第293回 陰陽のめぐりあい（道歌7）
 - 第294回 宇宙との一体化、万(よろず)和合（道歌8）
 - 第295回 「一を以って万に当たる」の道（道歌9）
 - 第296回 天地は主のつくりし一家（道歌10）
 - 第297回 合気道の公案
 - 第298回 空の気と真空の気の結び（道歌11）
 - 第299回 飽くなき探求と宇宙の営み
 - 第300回 一霊の元の御親（道歌12）
-

【第201回】 生産霊（いくむすび）、足産霊（たるむすび）、玉留産霊（たまつめむすび）

開祖は合気道を説明されるにあたって、よく古事記や神道の言葉を使われたので、その筋の専門家や宗教関係者は理解できたかも知れないが、一般の稽古人にはなかなか理解出来なかったと思われる。開祖が当時話されていた言葉が「武産合気」や「合気真髓」にまとめられているのは有難いが、これも文字で見てもなかなか理解出来ないものである。

しかし、合気道を会得するには、それを会得した開祖の言葉を少しでも理解するようにしなければならないと考える。理解するといっても、合気道修練者として技に活かすために理解するということであるから、その筋の専門家のもとは違うかもしれないが、開祖の言葉を、神道用語の解説を調べたり、自分の体で実感したことで解釈してみたいと思う。

今回は、「生産霊、足産霊、玉留産霊」を考察してみたい。

合気道は生産霊、足産霊、玉留産霊によって出来ているといわれる。まず、「産霊（むすび）」とは、神道における観念では「天地・万物を生成・発展・完成させる

靈的な働き」とか「天地万物を産（む）し成す靈妙な神靈」（『広辞苑』）とか「人間の身につくと物を発生・生産する力をもつ」（折口信夫）といわれている。「ムス」は自然に発生する意、「ヒ」は靈的・神秘的な働きのことであるという。

開祖は「生産靈、足産靈、玉留産靈」を△○□（さんかくまるしかく）や松竹梅であるといわれており、「生産靈、足産靈、玉留産靈」を△○□や松竹梅で説明されている。

生産靈は、開祖によれば、まず「乾（いぬい）」であるといわれる。乾とは「物と心のはじまり」を言うという。次に「天の浮橋」であるといわれる。

開祖が常々、まずは天の浮橋に立たなければ合気は出来ないといわれていたところの「天の浮橋」である。物事をはじめめるにあたっての心と体（魂魄）が整った状態のことである。

また「三角（梅）」であり、三角は気にして力を生じる。また三角法によって武道の初めの仕組みがわかり、天地の気と気結びし、不敗の体勢を取るといわれている。

生産靈を神道では、活動して止まざることを掌り給う神（働き）で、生々発展を意味する働きのものとされる。

合気道の「わぎ」を始めるにあたって、宇宙の初めに何もなかったように、相手もないし、「わぎ」（技と業）もないところから、「天の浮橋」に立ち、念と体と息で、三角に動きはじめ、そして止まることなく、生々発展する「わぎ」をつくっていく、ということに当たるのではないだろうか。

なお、息遣いに「イクムスビ」という太古からの教え（イと吐いて、クと吸って、ムと吐いて、スと吸い、それで全部、自分の仕事をする）があるが、生産靈を働かせる重要な役割を果たすものとする。生産靈では、とりわけ最初の「イと吐く」が重要であるとする。これによって三角で進んで行けるし、対象（相手）と結ぶことが出来るからである。

対象と「イ」で結んだら、「クー」と吸う。開祖は「円く吸う」と言われる。「円く吸う」ということは、欠けたものがないように、前後左右上下すべてを吸収することであろう。つまり、無限である宇宙を吸い込むことになる。これが開祖が言われている⊕や⊗であり、「宇宙の中心に立つ」ということではないだろうか。

開祖は、これが「気の修行であり、スサノオの神さまになり、力の大王に、武の大王になることである」といわれている。これを「足産靈」（たるむすび）というとする。 「足産靈」の「タル」とは、その働きが満ち溢れて（充足している）状態をいうという。

合気道で技を掛ける場合は、息と念（魂）と対象を吸気で取り入れなければならない。この「足産霊」が技の効き具合に大きく作用する。「息を吸い込む折には只引くのではなく、全部己れの腹中に吸収しなければならない」（『武産合気』）。吸気に当たって重要なことは、上ではなく下の横隔膜（骨盤底黄隔膜）を遣うことである。

息を全部己れの腹中に吸収したら、四角に吐くことで己と地、そして天とを結ぶことができるようになる。体と地が結び、妙精は身中に残り、そして地に降ろした息が舞い上がり天と結ぶのである。

円く吸った息と妙精を身中に留めるのが玉留産霊（たまつめむすび又はたまめむすび）である。ただし吐く折にも、下の骨盤底黄隔膜を遣わなければ、天地と繋がらないだけでなく、宇宙の妙精（力や熱）が身中に胎蔵しない。

これらの「生産霊、足産霊、玉留産霊」の感覚は、技を遣う折に実感できるようだし、四股を踏む時も感じられるようである。

【第202回】 技と業

合気道は技を練磨して精進するものである。しかし、合気道の最終目標は技を覚えることではない。それでは、技を修練して何を会得しようとしているのかが問題になる。それは一つではないだろうが、その一つに「業」の会得があるはずである。

「技」とは目的を達成する技術、技巧ということが出来るだろう。合気道には四方投げとか小手返し等の技があるし、空手や柔道や剣道にもいろいろな技があるだろう。人間くさく、人間の性（さが）であるといえよう。

これに対して「業」は、目的や分野に関係なく、時間や場所や対象を超越した働き、動き、行為と言えるだろう。これは、人間を超越したものということになる。自然で、美しく、誰をも説得する、そして時として強烈で、すべてのものを破壊する働きをする。

神様のお働きを、人は「神業」という。神様が小賢しく「技」など遣うはずはないからであろう。「神技」という場合は、人間が神様のような働きや動きをしたことをいうのであって、神様のことではないだろう。

合気道は一教や二教という「技」を繰り返し練習して上達していくが、一教や二教の技をただ繰り返し稽古しても、上達はある時点で止まってしまうはずである。な

ぜならば、「技」を「技の形」と混同しているからである。つまり、「技の形」を覚えることが稽古とってしまうので、繰り返し稽古をすることによって上達すると思ってしまうのである。

「技の練磨」を、私は「技要因の練磨」と考えている。この「技要因の練磨」というのは、「技」を構成する要因（ファクター）を見つけ、自分の技に取り入れていくことである。このファクターは人工的な技を超越した、自然の営みと合致するものでなければならない。

合気道の「技」には、このファクターが無限にあるようなので、人間が一生かかっても全ては会得できないはずである。この意味からも、合気の修行に終わりがないのである。

「技要因」が非人工的で自然であるということは、「業」ということになるだろう。つまり、合気道で技の練磨をするということは、「業」を会得するということになる。自然で、宇宙の営みの「業」を身につけていくことである。従って、「業」を「神業」とも言えるので、「神業」の鍛錬ということができよう。

「技」には形があるが、「業」には形はないはずである。開祖は、「合気道は形はない。」とよく言われていたが、形がある「技」の会得が合気道の目標ではないぞ、と言われていたのではないかと考える。

しかし、物事には順序がある。形のない「業」を会得するためには、形のある「技」を練磨しなければならないはずである。「技」の形がしっかり出来ずに「業」は会得できないし、宇宙の道に結び付かないはずである。

「技」を練磨し、「業」を会得する、そうすれば宇宙と繋がり、宇宙の力が加わることが出来るのではないだろうか。開祖は、「この（合気）道は宇宙の道で、合気道の鍛錬は神業の鍛錬である。これを実践してはじめて宇宙の力が加わり、宇宙そのものに一致するのである。」と言われている。

【第203回】 相手を見ない

合気道は技の形稽古で精進していくので、より正しく、美しい形を追及することにもなる。形稽古とは、形に自分をはめ込んでいくことで、余分なものをそぎ落とし、不足分を補っていくことと言えよう。

入門早々の頃は、指導者や先輩がよく見ていてくれて、手を取り足を取って、余計

な動きを取り去り、また欠けた動きを加えたりして、形を直してくれるので、指導者や先輩の言うことに従えばよかった。

しかし、だんだん指導者や先輩からの注意がなくなってくるものだ。ある程度の形ができるようになったのだから、後は自分で研究しろということだろうが、実際ある処からは教えることが難しくなるからであろう。「こうやらなければならない」と教えようとしても、それが出来るための下地や体が出来ていなければ出来ないし、本人がその重要性に気が付き、やろうという意欲がなければ出来ないからである。結局は、自分自身で自分の形を直していかなければならず、自分主体の稽古になることになってしまう。

自分主体の稽古になると、形がこれでいいのかどうかを判断しようとして、どうしても相手との接点を見たり、相手を見てしまいがちである。自分の手がどう動くのか、相手はどう反応しているか見るためと、相手に対する恐怖心から見てしまうのだろう。

ある程度まで接点を見たり、相手を見るのは仕方ないだろうが、それを見ることによって形はよくなるものではなく、見てしまうことによって、かえって形を崩すことになるものだ。開祖も、「相手を見てはいけない。相手を見る必要はありません。姿を見る必要はありません。ものを見る必要ありません。」とよく言われていたものだ。

見るということは、それに心が居着いてしまい、動きも止まってしまうことになる。止まることは、空間的および時間的軌跡が壊れることだから、美しくないということになる。

しかし、技が美しいかどうか判断し、改善するためには自分の形（動き、姿勢、体遣い）も見なければならないはずである。「見ない」で、見なければならないというパラドックスである。合気道には禅問答のようなパラドックスがあるから面白い。

世阿弥は能の構えに三つの大事な構えがあるが、その内のひとつに「離見（りけん）」があるという。「離見」とは、「自分を離れたところから見る」ということであると、能楽師の梅若栖彦氏は言っている。（『武道の可能性を探る』（武道2010年2月号）

能や仕舞は武士の嗜みでもあったので、構えに関しても能の構えと武道での構えには共通性があるはずである。

合気道の相対稽古で自分の形（技と姿）を見るのは、この「離見」で見るということであろう。「離見」で見れば、自分だけでなく相手も見えてくるはずである。相

手を実際に見るのは、相手との間合いに入るまでと、相手が倒れたり崩れた後である。

しかし、超能力者でもないだろうから、魂を肉体と分離して浮遊させて肉体を見ることはできないわけで、それではどうすれば「離見」で見ることができるかということになるろう。

それは目で見える視覚ではなく、相手と接している部位（名人達人になれば、接することなく）の触角、感覚で「見る」ということではないだろうか。よく「見る」ためには、感覚を研ぎ澄まさなければならない。そのためには目などあけて手や相手を見ていたのでは、その感覚は鈍ってしまうことになるので、目はあけていても、ひとつのものに居着いたり、とらわれないようにしなければならない。

目で見れば、見えるものは一点とか狭い範囲であるが、「離見」の目で見れば、自分の構え、動きの全体や、相手の動きも見えてくるようである。別の自分が、自分を見、自分にこれはいいとか駄目とか、こうやった方がいいとかを語りかけてくれるのである。「離見」とは、もう一人の自分が自分を見るということということが出来るだろう。

この「離見」の修行を進めていけば、相対稽古だけでなく、自分の周りのものがどんどん見えてくるようになり、自然や宇宙なども見えてくるのではないかと夢想する。

ちなみに、能での他の二つの重要な構えは、「目前心後」（目は前側にあるが、心は後ろ側におく）、「閑心遠目」（心を静かにして遠くを見る）という。これも相手を見ないことと関係があるだろう。

【第204回】 比礼振り（ひれぶり）

合気道では、相手を見る必要はないし、ものを見る必要もないと言われる。相手やもの（得物）を見ると、気持ちがそこに居着いてしまい、動けなくなるというのである。確かに、太刀取りや短刀取りの技を遣う時、太刀や短刀、それに相手を見たら動けなくなってしまう。しかし、一般的には、相手や得物の状況を見なければ心配だし、危険だろう。

開祖は、「相手もものも見な」を確かに実践されていたと思う。一番よい例は、四方八方から同時に剣で打ち込ませたり、杖で突かせたのを、捌いて敵の外に出てしまうものであろう。（写真）



この時、剣や杖や相手を見たら動けなくなるはずであるが、それでも相手がどこにいて、剣や杖がどのような状態になっているのかは把握していなければならないはずである。見ずに自分の周囲の状況がわかる、何かがなければならないことになる。

開祖は、「相手を見る必要はない。姿を見る必要はない。ものを見る必要もない。魂（たま）の比礼振りであるから。」（「合気真髓」）といわれているから、この「魂の比礼振り」が、見ているということではないかと考える。

魂はさて置いて、この場合の比礼振りの比礼（ひれ）は『広辞苑』によると、①薄く細長い布の総称。古代に害虫・毒虫などの難をのがれる呪力があると信じられたもの②奈良時代から平安時代にかけて、盛装した夫人が肩にかけて左右に長くたらしした薄い布、という。

振る（ふる）は、⑩神や霊魂・精神をゆり動かして活発にする。また、震ると同源で、大地が揺れ動く。また、波・風が起こる、ことをいうとある。

開祖の見ないでも見る事が出来る「魂の比礼振り」は、体を覆い、害から身を守ってくれる呪力のある霊魂・精神である比礼を活発に働かせるということではないだろうか。

この比礼は仁王様（写真）や観音様も身につけておられるので、その身を守ることにも出来るし、目で見なくとも周りが見えてしまうし、一度、震れば大地を揺らし、風波を起こして払い清めることが出来るのだろう。



比礼は言ってみれば、「バリア」であり、「触覚センサー」であり、「波動砲」ということが出来るのではないだろうか。

開祖や故有川定輝師範などの名人、達人の傍にいと、威圧感を感じ、いつものいたずら心も起きず、ただ緊張するのは、この比礼のせいだったのだろう。だから、そんな凄い比礼を振られたら、たまったものではなかったわけである。比礼を身につけ、相手を見なくとも、比礼を振ることによって相手が見えるよう、相手を捌けるようにしていきたいものである。

【第205回】 技とは

合気道は技を練磨して精進する道であるといわれるように、「技」は重要である。重要であるなら、技とはどういうものなのかを一度考えてみなければならないだろう。

ただし、「技」という言葉はいろいろな分野で使われているし、その分野によって「技」の意味するところが違っているかも知れない。例えば、武道や武術、芸能や稽古事、技術者や職人、奇術師なども「技」という言葉を使うし、「技」を大事にしている。

「技」の内容や目的には若干違いがあるだろうが、「技」に共通する何かがあるはずである。

武道としての合気道では、「技」とは攻撃してくる相手を倒したり、極めたり、捌く技術または手並み、ということが出来るだろう。

合気道の「技」には、いくつかの特徴がある。特徴には、他の分野の「技」と共通しているものもあるだろうし、あまり関係ないものもあるようだ。

- 力を制する：

通常、力を力で制するには、より強い力を要する。力ではないが、強い力を制することができる技術（手並み）が技である

- 自然で無理がなく、理に合っている：

精妙な技は、無駄がなく不足もなく美しく、強い

- 合理的で科学的である：

技の上達のひとつは、より強力なものを味方にし、遣っていくことであろう。

例えば、体の表を遣う。相手の手（諸手）より力が出る体幹、体幹より強力な地の力等など。開祖は、神様の力を遣われていたという。

- 非日常的な体の遣い方をする：

例えば、体を十字、反転々に遣って、技を掛ける。末端からではなく体の中心から先に動かす。

これによって日常的な攻撃を制することができることになる

- 空間（宇）と時間（宙）からなるパターン（形）：

技は、時間と空間軌跡からできており、宇宙の精妙な営みと合致することを目指すものである。

言うなれば、「宇宙の法則から抽出され、凝縮された形」が技であると言えよう。

開祖は、技について次のように言われている。「技はその造化機関（人とタカアマ

ハラ)を通して科学化されて湧出してくるものである。」

「技」は、開祖や先人たちが宇宙の精妙な営みを科学化して抽出した技術であり、形ということが出来るだろう。人間が頭で考えて作った人工物ではないのである。人を目くらましする奇術などの技とは違う。それ故、真善美を備え、超人的な威力を発揮し、国や地域に関係なく人を納得させることができるのだろう。もしも火星人のような異星人が宇宙のどこかにいたとしても、宇宙の営みに合致した技を遣えば、彼らも納得してくれるのではないかと思うし、また彼らを納得させられるようなものでなければならぬだろう。

従って、宇宙の営みに反するような、不自然な技術や形（時間と空間）は、われわれが求める技ではないことになる。それは自己流とか邪道の技ということになり、人にも異星人にも通用しない。

【第206回】 丸い息遣い

かつて開祖は、息は丸く遣わなければならないと言われていた。当時、それを聞いていた稽古人達は、自分なりに勝手に解釈して自分を納得させていたようだが、実際には何のことか分からなかったのではないだろうか。

私は当時まだ理屈っぽい学生だったが、この「丸い息」とは自分なりに、尖がらない、攻撃的でも威圧的でもない、マイルドな息か、あるいは吐く息が丸く削られた柱のような息なのか等と考えていたようだ。しかし、一本の柱のような息は出来るとしても、大工でもあるまいし、その柱の角を削って丸くすることなど出来ないだろうなどと思い、丸い息遣いの解明は断念した。

開祖は、合気道を十字道とも言われているが、この場合も十字がキーワードとして重要であるようだ。技は十字で掛かるように出来ているし、体の遣い方も基本的には十字でなければならないといえる。（写真）

以前、何回目かに書いたように、十字は円になり、丸になる。天地の|と左右の一がしっかりしていて交互に動けば丸（円）くなるのである。つまり、丸くなるためには、|（縦）と一（横）に十字に動かなければならないことになる。



相手と十字になるよう体を遣っている入り身投げ

そうすると、息が丸くなるためには、縦に働く息と横に働く息を遣えばよいことに

なる。縦方向に働く息は、自分の腹から頭を通して天の方向と、腹から足下を通して地の方向へ向かう息である。これは主に腹式呼吸の息遣いと考える。

横方向に働く息は、胸から肩甲骨、肩、そして伸ばした腕、手の先の方向に向かうものであり、これは胸式呼吸の息遣いと考える。

技は無論のこと、手を真上に振り上げる際にも、縦方向だけの単純な動きはない。ひとつの動きには、必ず縦と横方向の動きが連動している螺旋の働きがある。

縦に動く時、つまり縦方向に手足を遣う場合は主に腹式呼吸、横に遣う場合は胸式呼吸を遣うことになる。例えば、手をまず腹式呼吸で縦に遣い、今度は胸式呼吸で横に遣い、また縦に遣うようにすればと、息は胸のところで縦方向と横方向の十字になり、縦横が交互に動けば、丸く働くことになるだろう。

腹式呼吸と胸式呼吸で息を十字に流し、縦横に遣うことによって、息が丸く働くことが、息を丸く遣う、丸い息遣いということではないだろうか考える。

【第207回】 祈り

合気道は宗教ではないが、大きな意味では宗教ということも出来るだろう。しかも、これまでにない質と規模の大宗教である。地域も時間も超越したものである。国や地域や時代が違っても信じることができるし、また信じなくてもよいというところも、全く新しいものであると思う。異なる宗教を信じているもの同士が仲良く稽古をしているのだから、宗教戦争もないだろうし、すでに世界的な宗教や新興宗教に出会っている人達も信じることができるものである。言うなれば「宇宙教」とでも言えるかもしれない。

開祖は、よくお祈りをされていた。大祭や例祭はもちろんのこと、来客があった折には演武の前に道場でお祈りされ、我々稽古人を前にしてもお祈りをしてから神様のことを話して下さることもあった。

開祖は『武産合気』でも「祈りほど結構なものはない。気分のすぐれぬ時も体の具合の悪い時も祈ると、すっきりして体もよくなる。」と言われていて、よくお祈りをされていたことが窺える。



お祈りをされている開祖

では、祈りとは何なのだろうか。前出の開祖の言葉では、祈りは気分や体が悪いの

をすっきりさせてくれるとあるが、これは我々が一般にやっている「苦しい時の神頼み」ということで、祈りとは、我々の苦しみを救ってくれることでもあるようだ。

しかし、苦しみを救ってもらったり、望みを叶えてもらうために祈るだけが、祈りではないようである。開祖は、祈りとは「大神のご活躍を日々感謝する方法である」とも言われているのである。祈りとは感謝でもあるようだ。ということは、祈りをしないということは、感謝していないということになるわけである。

世の中、祈りも感謝も無くなってきているように思えるが、世の中がますますギスギスしてきているのはその為かもしれない。社会、家族、仲間、そして自分自身に対する感謝が少なくなっているのだろう。

自分が元気に目覚めることや、五体が動くこと、朝が来てお日様が出ること、地震も災害もなく過ごせたこと、食べ物があって食べることができること、合気道の稽古が出来ること等などに、感謝しているだろうか。

あまりにも当然と思って、感謝の念を忘れていたのではないだろうか。宇宙を生成化育するもの（神）や、身体を司るもの（神）が存在するとすれば、自分たちの働きに対して感謝がないのは、いくらできた神様でも時として腹が立つはずである。私がそのような神のひとつだったら、絶対に腹を立てて、目覚めさせるためにも何か災いを授けるだろう。

祈りは人類誕生から今日まで営々と続けられてきたが、祈りとは何か、祈りは必要なのか、祈りの効用はあるのか等など、人類としてはまだまだ分かっておらず、模索中ということができるだろう。しかし、宗派や個人としては、個々にだがいろいろと分かってきているようだ。私の経験による祈りの効用を少し話してみよう。

40歳頃自主的に失業したため、金を稼ぐために伊豆七島のひとつである御蔵島に行った。島に道路を建設するための三か月契約の短期労働である。道路建設に邪魔になる木を伐採したり、岩を発破で爆破したり、路肩に30キロほどの石を10段20段と積んだりするのである。

まず、ブルドーザーが入れるように木を伐採するのだが、太い樹木はチェーンソーで切り倒し、細い木は鉋（なた）で切り倒すのである。初めは稽古のつもりで、鉋を力一杯当てて切り倒そうとしたが、鉋が木に弾き返されたり、切り倒しても切り口がギザギザで、きれいに切れてなかったりした。

ある時、弾かれた鉋で怪我をしそうになったので、さすがにこれでは危ないと思い、祈ってみたのである。「申し訳ないけど、ここに道をつくらなければならない

ので切らせて下さい」と祈って、切る前に三回ほど切る木を軽くたたき儀式をした。それから切ったら、スパッと切れたのである。その後は、一本一本祈りながら切っていくと、不思議と必ず上手く切れたし、お陰で怪我もなかった。そのときから、祈りには何か力があるのではないかと思うようになった。

祈りは自分自身のためにするものもあるし、他者のためや神にするものもある。内容を大きく分ければ、願いと感謝ということができよう。いろいろな祈りがあるわけだが、それでは合気道の稽古で祈りは必要なのか、必要だとしたらどんな効用が期待できるかを考えてみたい。

まず、祈りがないとすると、合気道を稽古していても、願いも感謝もないことになるわけだ。それがなくても合気道の稽古と言えないことはないし、願いも感謝もなくても稽古は続けることは出来るだろうが、それがなくなることによっていつか壁にぶち当たったり、稽古の意欲や興味を失うことになるのではないかと思う。もし開祖が残された合気道や武産合気に精進したいなら、稽古にも願いと感謝を伴う祈りが必要ではないかと思う。

次に、なぜ祈るのがよいのか、つまり祈りの効用である。いろいろあるだろうが、そのひとつに直感があるだろう。合気道の稽古は、技の練磨である。宇宙法則に則った技を身につけて、宇宙と一体化しようとしているはずである。しかし、技はある程度以上のものになると、誰も教えてくれないし、誰も教えられないものである。自分自身で見つけていかなければならないことになる。そのために稽古に集中し、そして祈るのである。一途な祈りにより、何か（神）が感応し、返事をしてくれるようである。これを、直感というのだろう。直感は自ら湧いてくるものではない。祈りなくして、直感は得られないようである。

祈ったから直感を得られるという保証はない。直感が得られるように祈り、稽古をしなければならないだろう。そのために大事なことは、妄念を差し挟まないで稽古をすることである。そして、真剣に願うこと、感謝することだろう。

しっかり祈れたかどうかは、稽古が終ったあと、直感が湧いてきたかどうかで分かるのではないだろうか。直感が湧かず、その稽古で何も得る処がなければ、祈りがなかったか、届かなかったということになろう。

参考文献： 『ムー』2010.4月号 「宇宙を支配する『運』の秘密」

合気道の稽古は、まず相対で受けと取りを交互にやりながら、上達を図っていく。受けで技の形や手順を覚え、自分が技を掛ける取りでも、相手に受けを取ってもらって覚えていくことになる。初めのうちは、相手が受けを取ってくれると、自分の技が効き、上手くなったと思うものである。

相手が素直に受けを取ってくれているうちはいいが、相手の中には頑張ったり、逃げたりする人もいて、だんだん技が掛からなくなってくるものだ。その理由のひとつは、自分に力がついて、相手が容易に受けが取れなくなって頑張るようになることがある。自分が上達したということであり、その上達の代償ともいえよう。

しかし、相手が頑張ると、なんとか相手を倒したり、抑えて受けを取らそうと、ますます力を込めてやるようになるものだ。そして、その為にもっとパワーをつけようと木剣や鍛錬棒を振ったり、腕立てや腹筋運動で体力と筋肉をつけようとするようになる。

力がつけばその分、相手を倒したり抑えるのが容易になることは確かだが、それにも限界がある。そして、力の限界を感じたところが、合気道修行での一つの大きいターニングポイントになるようだ。

稽古を止める者の大半は、力の限界を感じ、この先どう稽古を続けて行けばよいのか分からなくなって、止めて行くのではないだろうか。また、無理に体を遣ったり鍛えることで、体を壊すことも止める大きい理由のようだ。

力に頼って技を掛ける最大の問題は、手や胸・肩などを取りにきたり、打ってきたり、突いてきた相手の手あるいは得物を、押したり引いてしまうことである。すると、争いになるので、合気道の精神に反することになる。それで、相手も無意識のうちに頑張ったり、反発してくるのだろう。稽古相手が頑張るのは、相手が悪いのではない。自分のせいなのである。

技を掛けるにあたっては、相手と接した瞬間から、相手と結ばなければならない。結ぶというのは、開祖が言われている「天之浮橋」ということであろう。相手との接点に働く力が、押し込んだり押し込まれたりせず、上下左右調和がとれた0（ゼロ）状態ということである。それに力（魄）と心（魂）のバランスもとれていなければならない。出している力（魄）に見合う心（魂）が働いていなければならないということであろう。

開祖は、「合気道は、まず天之浮橋に立たなければ
ならない」と言われている。

天之浮橋に立った状態というのは、例えば、片手取り四方投げで出した手の場合、相手の手を押したり引いたりするのではなく、体幹の一部として腰腹と繋げて長い一本の手として、腰腹で調整しながらくっつけてしまう状態である。手をくっつけることによって、手を通してお互いの体、そして心が結びつき、相手と一つになってしまうのである。相手は宙に浮いたような状態になる。



相手を手でくっつけてしまう
故有川師範

相手と一つになれば、あとは相手を自分の思うように動かすことができるようになり、技が掛かることになる。初めに結ばなければ、相手は自由に動けるので、技は掛かりにくい。敢えて技を掛けようとすると、パワーでやるしかないことになる。パワーでやるとなれば、相手は頑張るので重くなってしまう。

技は、まず「天之浮橋」で結んで掛けなければならない。

【第209回】 大なる愛の攻撃精神

合気道には試合がない。技も相手を攻撃するものではないし、攻撃することは教えない。従って、剣や杖や拳でも、打ち方や突き方などは教えない。

しかしながら、合気道には太刀取り、杖取り、短刀取り、拳の突きの返し技などが昇段試験にあるのである。剣や杖がうまく振れないのに、相手が打ってきたり、突いてくる剣や杖を捌いたり取ったりすることなどできない訳だから、よく考えてみればおかしい話である。

短刀取り、太刀取り、杖取りが試験にあるなら、これらの得物の振り方や扱いを教えてくれてもいいのではないかと、かつては思ったものだ。しかし、ここが合気道のおもしろく、奥の深いところなのだ。所謂、裏と表の陰と陽である。合気道では振り方は教えないが、振れなければならないのである。

剣や杖の振り方は教えないが、振ってはいけないとはいわない。ほとんどの合気道の道場には、木剣や杖が備えられている。教えないが、各自で素振りなどして稽古しなさいということであろう。

合気道は技の練磨をして精進するものだが、ある段階以上にいくためには剣と杖を振らなければならないはずである。合気道の技の多くは、剣や槍の動きからきているからであるし、体の遣い方にも多くのことを学ぶことができるからである。

しかし、道場では教えてもらえないわけだから、自分で工夫して稽古をしていかなければならないことになる。攻撃のための素振りの稽古である。表では教えてもらえない裏の稽古ということになる。やらなければ太刀取りも杖取りもできないし、技の上達もないはずである。また、攻撃は最大の防御といわれるように、攻撃の技と力がなければ、十分な防御はできないはずでもある。

ここで考えてみなければならないことだが、合気道の技は攻撃のための技でないし、争うものでもない、といわれるため、打つ方も受ける方も手加減するようになりがちである。また、攻撃を受けて技を掛ける方は、合気道は攻撃技ではないので、相手の攻撃を待って、それに合わせて技を掛けるものと考えてしまうようだ。

しかし、合気道は武道である。武道の中には武術という、相手の攻撃およびその心を制する技がなければならないはずである。従って、合気道の相対稽古でも、相手の攻撃を待つような受け身の稽古をしてはだめだろう。だが問題は、こちらから攻撃してはだめなのである。稽古するにあたっては、このジレンマは解決しておかなければならない重要事項であろう。

開祖は「合気道は試合は厳禁だが、その実は大なる愛の攻撃精神、和合、平和への精神である。それがために自己の愛の念力（念波観音力）をもって相手を全部からみむすぶ。愛があるから相手を淨めることができるのです。」（「武産合気」）と言われている。

つまり、受けて技をかける場合にも、攻撃精神を持たなければならないというのだ。ただし、その攻撃精神は大いなる愛の精神でなければならない。愛の精神とは、相手のため、そして宇宙樂園建設のためにやる（技を掛ける）のだという精神であろう。その愛の精神が、愛の念力となって相手を絡み取り、そして結んでしまえということだろう。この大いなる愛の精神は、相手をからみ結ぶために、相手が攻撃しようとする前に発せられ、からみ結んでしまうわけだから、大きな意味で、先制攻撃をしていることになるだろう。

合気道は攻撃の武道ではないが、受けの武道でもない。いうならば、大いなる攻撃であり、受けの武道であるといえることができるだろう。攻撃と受けが表裏一体となった、陰陽備わった武道といえよう。

【第210回】 一霊四魂三元八力

合気道の精進は、主に技を練磨する稽古をしていくものであるが、技の練磨をして目指すものの一つに「力」がある。しかし、この「力」は、肉体的パワー、いわゆる魄の力ではなく、合気道の本当の力でなければならない。

このためには、「一霊四魂三元八力」が分からなければならないと、開祖は言われている。開祖曰く、「一霊四魂三元八力や呼吸、合気の理解なくして合気道を稽古しても合気道の本当の力は出てこない」。今回は、合気道の本当の力を出すために、「一霊四魂三元八力」を考えてみたいと思う。

「一霊四魂三元八力」の一霊（いちれい）とは、直日（なおひ）ともいわれるが、開祖がよく言われている一元の神、大神である。

今ある見えるモノ、見えないモノは言うに及ばず、過去のモノも未来のモノも、すべてこの一霊に繋がっている。もちろん、自分自身も繋がっているわけである。まず合気道を修行するものは、このことを認識しなければならないだろう。

四魂（しこん）とは、一霊の4つの働きで、奇霊（くすみたま）、荒霊（あらみたま）、和霊（にぎみたま）、幸霊（さちみたま）とされている。人は一霊から、この四魂を頂いているのである。

魂とは魄に対するもので、心、精神、意識である。そこで、この四魂を合気道の稽古の心として考えれば、まず、相手をやっつけるなどと思わないで、相手を包み込むような大きな心、相手のことを思う愛の心、宇宙生成化育のお手伝いをするのだというような心をもつことであろう。この心を奇霊というと考える。これを開祖は、「天之浮橋に立つ」と言われていたのだろう。つまり、ここから稽古がはじまるわけである。

次に、技を遣うには、力とスピードとリズムが必要であるから、それを自分の極限まで導く心（意識、気持ち）を養わなければならない。これを荒霊というのだろう。荒霊は若いうちに養成しやすいだろうから、若いうちは精いっぱい、力一杯の稽古をするのがいいだろう。

和霊は、荒魂を自由にコントロールする心であろう。技を早くも激しくも遣えるが、それをゆっくりもやさしくも、自由に遣うことができる。和霊は、エネルギーの有り余っている若者にはコントロールが難しいので、荒霊を出し切るか、またはある程度年を取ってこないかと和霊を遣うのは難しいだろう。

そして最後は、奇霊、荒霊、和霊がひとつになって幸魂となる。これで合気の心、精神、意識が出来たことになり、あとはこれを更に練り上げていけばよい。

三元とは、流、柔、剛に合気道では気を加えたものをいう。三元の元は、四魂の魂に対応する魄と考える。従って、三元とはモノの状態をいうものと考え。合気道の稽古で、この三元がどういうことなのかを考えてみると、がっちりした体、剛柔な体、柔軟な体となり、またそれをつくるための稽古法である。書道でいう楷書、行書、草書である。書道の稽古とおなじように、合気道の稽古も、先ず楷書のがっちりした稽古をしてがっちりした体をつくり、そして行書、草書へと進んでいかなければならない。

この一霊四魂三元から、八力が生まれるという。つまり、一霊からの四魂と三元がしっかり働けば、八力が出るのである。従って、四つの魂（心、精神、意識）と流、柔、剛の三元の身体を鍛えなければならないということになるだろう。

八力とは「動・静・凝・解・引・弛・合・分」の力と言われるが、つまりは全方向へ出す力と引く力であり、つまり、引力であり、くっつけてしまう力である。合気道で求めている本当の力である。このひつつく力が出れば、その程度に応じた八力が出たことになるし、三元が整い、四魂が働いていることになると言えるのではないだろうか。

【第211回】 三元と合気道の実行

一霊四魂三元八力や呼吸、合気理解なくして合気道を稽古しても、合気道の本当の力は出てこないだろうと、開祖は言われている。第210回で「一霊四魂三元八力」について、一霊から八力までの流れを大雑把に書いてみたが、一霊、四魂、三元、八力の各々の説明と合気道の稽古との関係の説明が必要だと思われるので、今回はこの内の「三元」を解釈してみたいと思う。

三元とは、一般的に流、柔、剛と言われるが、合気道ではこれに気を加える。三元とは物質（魄）であり、その働きであるようだ。魄の三元に対するのは四魂の魂で、霊である。

開祖が言われるには、流とは流体素であり動物の本性であり、柔とは柔体素で、植物の本性又肉体のように柔らかいものである。剛とは剛体素で、大地や岩石のような固いもの、鉋物の本性である。気はこれらの上であって、三元は気によって活動しているという。

「気にも剛柔流の働きがあり、そして動いている」と言われているから、流にも柔にも剛にも、剛柔流の働きがあることになる。確かに流体の水も、湯気になって飛

んでいったり、液体になって流れたり、固体になって固まったりするし、鉄のような鉱物でも、熱く熱せられれば液体にもなるし、気体にもなる。

剛柔流の働きには又三つの働きがあり、それを生結（イクムスビ）、（足結タルムスビ）、玉留結（タマツメムスビ）の働きといい、これは△、○、□であるという。

流の水をこれにあてはめてめると、湯気は△で生結（イクムスビ）、流れている水は○で足結（タルムスビ）、氷りは□で玉留結（タマツメムスビ）ということになるのではないだろうか。

我々人間は、血液や動物の本性である流素体の流も、柔らかい肉体の柔も、そして骨のような剛も有している。人間の体は剛柔流で出来ていることになる。技の練磨で技が上手く遣えるためには、自分の体が各々の剛柔流の役割を果たすよう働いてもらうことだろう。

そして又、剛柔流の各々の部位をさらに剛柔流で機能するようにすることだろう。剛の骨や柔の筋肉などはより強固に、そして柔軟になるよう鍛えることである。

そして、これらがより活動するために、気（心）も鍛えられなければならない。体を剛柔流で自由自在に操る心であり、また、逃げない負けない心、やさしい心、相手を思いやる愛の心である。

この三元の体と心の流（△）、柔（○）、剛（□）を、先ずは△は△で練り、○は○くなるように、そして□は□になるように練らなければならない。三角法で進める柔軟で強靱な体をつくり（△）、自分が宇宙の中心になるよう（○）、そして盤石（□）に技を収めることができるように鍛えるのである。

次に、この△○□を一つにしてしまうのである。早くでもゆっくりでも、強烈にもやさしくも、自由自在に出来るような体にするのである。これを開祖は、といわれている。

そしてをと丸く円になることが合気道の実行といわれている。これを練ることを鍛錬というのだろう。

すべてを練りこんで円くするのである。ここに合気ができることになるという。何故ならば、「△○□の気の熟したるを合気」と、開祖が言われているからである。合気が出るようになれば八力が働くようになるわけである。

人間は見た目が、みんな違う。男女、大小、太瘦などなど、ひとりとして同じ人はいない。また、その人の境遇もみんな違う。生まれた国や地域、金持ちとか貧乏とか、子宝に恵まれているとか恵まれない等等など違っている。

ひとりひとり外見やしていることは違っているが、それでもなにか同一のものを求めているように思える。例えば、今もそうだし、過去もそうであったと思うが、富、権力、名誉である。これは、どの国、いつの時代にも、人が求め続けてきたものであろう。このために人は争い、競い合ってきたといえるだろう。これは歴史が証明している。

合気道は、争いをなくす世の中をつくるべく、植芝翁がつくられた武道であり、哲学であり、宗教である。合気道の目標は、争わない世の中をつくることにある。それ故、合気道の稽古でも争いにならないようにしなければならないはずである。稽古で争っていては、争いのない世界などつくれるわけがないだろう。

では、どうすれば争わないように稽古ができるかということになるが、そう簡単ではない。合気道は武道であり、相手の戈（ほこ）を止める技であるわけだから、相手に倒されてしまっただけでは武道にならない。争わないで、相手に倒れてもらわなければならないのである。

美しい旭日や夕日を見れば、どの国どんな時代の人でも美しいと思うだろう。また妙なる調べの音楽を聞いたり、小鳥や虫の鳴き声を聞いても、誰でも心地がいいだろう。モナリザの絵を見ても、幼い子供たちの笑顔を見ても心が和むだろう。

人は誰でも、共通して共感するものを持ち合わせているし、そして、それに共感したいと思っている。それは、普段の意識する世界ではなく、無意識の世界のものであるようだ。合気道では、この世界を「幽界」といっていると考えよう。

顕界はこの世に現れた世界、という。ふだん顕界に生きている人は、目に見えるものだけを信じ、目に見えるものに対応しようとする。合気道の相対稽古でも、相手が大きいとか力がありそうだとか、弱そうだとか意識して、緊張したり、張りきったりして稽古をしているだろう。これは見えるものにそれぞれ対応する顕界の稽古といえるだろう。

もちろん、この顕界の稽古も大切であり、誰もがこの稽古を十分経験しなければならないと思うが、顕界の稽古に止まっているだけでは駄目だろう。顕界の稽古に止まれば、忙しくてきりが無い。稽古相手はひとりひとり違うし、幾らでもいるからである。そのひとりひとりにその都度対応しなければならないわけである。時には、体力のある、力自慢とやるかもしれないし、ひ弱な女性の初心者にあたるかも知れない。力負けして自信を失ったり、または相手に怪我をさせたりして

しまうかもしれない。

それよりも、すべての人の共通項を見つけ出し、その共通項を増やし、そしてそれらをどんどん深めていく方がいいはずである。共通項とは、性別も体格も国籍も上級者初心者など一切関係なく、すべての人に共通するものである。それが技であり、術といえるのだろう。その技（術）を遣えば、誰でも同じような反応をし、倒れてくれるようなものである。

逆の言い方をすれば、もしその技が誰にでも有効で、誰でも喜んで自ら倒れてくれるとしたら、その技は人の共通項を捉えたものであるといえるだろう。ある人には効くが、他の人には効かないというものは、共通項ではなく、まだ顕界の稽古に止まっているといえるだろう。

それでは顕界の稽古と幽界の稽古の違いはなんだろうか。言うならば、顕界の稽古は見える世界の稽古であり、そして、幽界の稽古は見えない世界の稽古と言えるのではないだろうか。また、顕界の稽古は魄の稽古で、幽界の稽古は魂の稽古といえるのではないだろうか。

魄とは肉体的なパワーであり、魂とは心、精神ということになるだろう。幽界の稽古とは、パワーに頼らずに、魂（精神、心）で相手の魂（潜在意識）に働きかけて相手を倒す稽古ではないだろうか。

今回はこの続きとして、「幽界の稽古」と題し、魂の稽古について書いてみるつもりである。

【第213回】 幽界の稽古

開祖の合気道はすばらしかった。当時もそう思ったが、今、写真やビデオを見ても、体勢が崩れたり、無理な動きなど一切ない。どれを見ても、自然で美しいと感動する。これは私一人だけではないだろうし、合気道以外の分野の方々もすばらしいと思われているはずである。その証拠に、開祖のもとには、他の武道家、軍人、華族、花柳界の綺麗どころ、宗教家、哲学者などの学者など、各界で一流の方々までが集まって教を乞うていた。

これら異分野の一流の方々を魅了したということは、ただ強いからとか技が効くからなどということだけではないはずであり、人が求めている重要で共通の何かを示されたからだと思う。

それはすべての人に感銘を与える、人が求めたいと模索している共通項であり、また無意識の世界にあって、普段は見えない世界のものであろう。開祖はその世界を幽界と言われていたと考える。

つまり、開祖の合気道は、我々がいる顕界の次元ではなく、幽界の世界で修行をされ、我々に技を示されていたといえよう。開祖は、合気道には形はないとよく言われていたが、形は顕界の稽古であって、形のない幽界で稽古をするようにならないといけないということではないだろうか。

しかし、幽界の稽古とはどんな稽古になるのだろうか。それよりも、幽界とはどういうことなのかが分からなければならないので、試行錯誤しながら考えてみることにする。

人を本当に感動させたり、納得させるものは、見える世界の顕界（頭や手先）でつくられたり、行われたものではなく、見えない、魂（心、精神）でつくられた世界のものではないだろうか。人に感動を与えるものをつくったり、演じる人は意識の深い底（無意識）の幽界で仕事をしているので、人の無意識に働きかけることになり、人を無意識のうちに共感させ、感動させるのだと考える。

無意識の世界でつくられた素晴らしいものを、通常の顕界の目で見ても素晴らしいと感じるが、観る側も幽界の目（心）で観れば、さらにその素晴らしさが観えるはずである。

例えば、能面である。専門家でなければ、若いうちに能面を見ても、なんとなくすごいものだとは思うだろうが、その本当のすばらしさは分からないだろう。我々にはお多福で不美人に見えたり、気味悪く見えたりするものが、見る人が見れば国宝級や重要文化財などに見えるのである。

開祖はすべてのものを、我々とは違った目で見ておられたはずである。ある時、お日様を見ても眩しくないといわれていたが、その目であろう。

危険を覚悟で、お日様が眩しくなくなるように見てきた。なんとかお日様は眩しくなくなり、輪郭がはっきりした赤い球に見えるようになった。大事なことは、お日様に対抗しようなどと考えないことである。お日様に対抗しようなどして見れば、目を痛める。お日様と仲良くなり、感謝して見なければならない。キザに言えば、目で見ないで心で見るということだろう。

最近、展覧会で能面を見た。この目でお面をじっと見てみると、以前の形とか、色など表面的に見ていたときと違い、輪郭や凹凸の形が消えて、違った姿が見えてくるのである。形が消えて、お面の心が見えてくるということだろう。純粹な美しさ、悲しさ、怒りが見えてくる。これが幽玄の美ということだろう。幽玄の世界では、面の心（魂）を観ると、面が心に働きかけてくるのだろう。



小面

また、上手い役者は、役にはまり込み、その役になりきって演じ、今ある顛界、現実とは違う別世界をつくりだす。観客はこの別世界、別次元に遊ぶために観に行くのだろう。

上手な歌手も、観客にお辞儀をして頭を上げた時には、もう別次元に入り込んでいて、現実の世界から離れた別世界にいる。その点、素人は現実世界からパッと離れられず、現実を引きずって歌ってしまう。これがプロとアマの大きな違いだろう。

よい絵画も、たとえ現実のものを描いても、別次元で描いているはずである。描いた画家は、貧乏であるとか、家庭問題があるとか、幸せとかという現実とは離れた別次元で描いているはずである。金儲けの為に描くというのは、顛界で描くことになるので、いいものが描けないことになる。

画家は時には、アルコールを飲んだり、幻覚剤などの薬を遣ったりしてしまうこともあるようだが、現実の顛界から別次元の幽界に入れず悩むのであろう。ロートレック、モジリアーニなどはその典型であらう。

いい絵を観る場合も、画家の次元に入って観ないと、本当のすばらしさは観えてこないようである。別次元に容易に入れる一つの方法は、アルコールかもしれない。個展オープニングの会場でアルコールが入った後に絵を再度観ると、少し前にしらふで観たのとは違い、深みが出たり、画家の心が見えてくるようだった。もし自分の部屋によい絵でもあるとしたら、心静かにアルコールをチビチビやりながら鑑賞すれば、現実を忘れ、別世界の幽界に入り易く、その良さがもっと観えてくるかもしれない。

しかし、彼らも初めからすぐに別世界に入れたわけではないだろうから、練習して出来るようになったはずである。幽界でつくられた合気道も、顛界ではなく、幽界での稽古でなければならぬはずだから、道場に入ったならば、日常の顛界のことは忘れ、別世界の幽界に入り込むよう心掛けなければならないだろう。

顛界の稽古は、見えるものに働きかけるが、幽界の合気道は心に働きかける稽古をすることであらう。持たれた手や打ってくる手を弾いたり、払いのけたり、また力

で制するのではなく、相手の心と結び、心を導くようにしなければならない。その心も浅いところのものではなく、少しでも深いところのものでなければならない。深層にある意識である。すべての人が共通にもっている無意識の領域である。もっと深いところには、人だけではない、動物や植物とも共通する無意識の領域があるといわれている。

合気道で幽界に入るなら、現実を忘れ、深い意識の底の別世界に入る訓練をしなければならない。中国武術で有名な酔拳ではないのだから、アルコールを飲んで幽界に入るわけにはいかないの、訓練しなければならない。また、意識の底の幽界に入っていくためには、禊や祈りも必要になるだろう。道場の出入りや床の間への礼などの、儀式も重要である。

【第214回】 十字道

開祖は「十字つまり合気である」とし、合気道を十字道とも言われている。そのことは、「天地の精魂凝りて十字道 世界和楽のむすぶ浮橋」などの道歌にも歌われている。

天地と水火の十字の交流に生み出される言霊の響きによって、宇宙万物が生成されたとし、それに習うことが合気道であると言われるのである。

宇宙万物は十字から生み出されたのだから、宇宙で生成されたものは十字でできているし、また、十字に機能するようにできているはずである。

宇宙万物で生成されたものに人間があるが、確かに基本的には十字に出来ているし、十字に機能するようにできていると思われる。

胴体を中心に、上肢は両肩を結ぶ横の線であり、足の向きは前を向き両肩の線と十字（直角）になっている。

また、手のつくりと機能を見てみると、手の平は左右（水平とする）に動きやすく、次の小はその動きに対して十字の垂直の上下、次の二の腕は、また小の動きに十字となる左右水平と機能するように出来ている。

また、この二の腕、小手、手の平を一本として横に伸ばしたところから、手を上に上げるには、真横に伸ばしたところからは上がらないので、90度内側（胸前）に水平に回し、そこから今度は垂直に上げる。更にその手を上に上げる場合は、脇を横に開いて、そして垂直に上げる。つまり、手は十字々々で生成されており、そして十字々々で遣うようにつくられているようである。

合気道は宇宙の営みを技にしたものであるといわれるから、技は十字でできているはずだし、十字に遣わなければ技にならないようにできているはずである。

確かに技を掛けて効く効かないは、十字になっているかどうかのポイントの一つといえる。特に、技をかけるはじめと技をきめる最後のところは十字になっている必要がある。掴ませた手は掴んだ相手の手と十字（直角）になるとか、正面打ちや横面打ちで打ってくる相手の手とこちらの手は接点で十字になるとか、また、二教や小手返して相手の手首は十字（直角）に返さなければ効かない。また、腰投げでも入るにも投げるときも十字でないと技にならない。

十字というのは、動きにすると円や螺旋ということになる。手首でも縦と横に動かせば円になる。ここにも十字の重要性がある。

足も撞木（十字の変形）で進み、腹をその足先の方に向けるように進んで行けば、体は円を描くことになる。それに、足で上下の動きを加えれば螺旋になる。また、その動きに腹と結んだ手を遣えば、手の軌跡は螺旋になるはずである。

手の十字がしっかり遣えるようになると、相手がくっついてしまい、相手と一体化できるようになる。合気道は引力の養成であり、敵をつくらないことだから、相手と一体化するのが正しいことになるだろう。相手が自分の一部になると、自分を敵として争う必要はなくなる。

手の十字が遣えれば、相手が掴んでいる手が強くても軽くても、その手に対してこちらの手を十字にちょっと動かすだけで、相手がくっついてきてしまうようになる。

触るか触らないかで十字を遣うわけだから、相手は力で引っ張り込まれたわけではない。相手の心がこの十字に働いたということになろう。人の心は宇宙が生成したものには素直に反応するはずだし、十字は宇宙が生成しているものだからであろう。

十字の技を身につけていけば、宇宙が少しずつわかるのではないだろうか。これが合気道の、十字道というのだろう。

【第215回】 魂が魄の上に

合気道は体力や腕力などの力が要らないとか、中には触れずに相手を倒すことができるものと思っている人もいようだが、半分は正しいだろうが、半分は間違っているといえよう。開祖のように体を徹底的に練って体力や気力をつけた人なら、触れずに人を倒すことができるかもしれないが、体ができていないし、気力や呼吸力がないのに、触れずに倒すことなどできるはずがない。

稽古事はすべてそうであろうが、合気道もまずは体を鍛えなければならない。体すなわち魄がなければ、精神すなわち魂が座さず、合気道も人の努めも果たすことができない。

しかし、合気道では、体だけを鍛えて、魄に頼り、魄だけを遣ったのでは、よい仕事はできないという。魄をつくり上げていかなければならないが、魄に墮せぬよう、魂を学び、魂の世界にふりかえらなければならないというのである。

これを開祖は、「合気は魄を排するのではなく土台として、魂の世界にふりかえるのである。」と言われている。つまり、魄の世界を魂の世界にふりかえるのである。魄が下になり、魂が上、表にならなければならない、というのである。魄に墮せぬように魂の霊れぶりが大事である。これが合気の練磨方法である、という。

「魄が下になり、魂が上、表になる」が合気の練磨方法というのだから、これがどんな方法なのか考えなければならない。

相対稽古で注意深く観察してみると、まず気持ち（こころ）が起き、それに従って体は動く。そして、技を掛けるるとき、相手にはこちらの力が伝わる前に、こちらのそうしたいという気持ち（こころ）が相手に伝わっているはずである。つまり、魄（手）より魂（こころ）が先行していることになる。

正面打ちに対し、入り身で入るためには、先ず、こころのビームを発し、それに体に従うようにしないと、入れないだろう。先ず、強力なビームが発せられているから、体は一見緩慢に動いているようでも、相手に打たれずに死角に入れるのである。相手に入り身で入れないのは、魂が働かずビームが発せられないか、弱すぎる状態で、体（魄）を動かそうとするからであろう。

まだ技の形もよく分からず、技の手順の分からない初心者は、こころ（魂）がとまって力（魄）だけでやる場合が多いが、意識して稽古し、慣れてくればこころが先行するようになるはずである。

開祖の技を、DVDやビデオフィルムで見ると、こころが先ずレーザー光線のように発せられ、それに体の動きと相手の動きがついてくるので、魂が魄に先行し、魂に魄が導かれているのがよく分かる。これによって、相手が打ってきても、相手はレーザー光線の残像を打っているので打てないことになる。また、達人に睨まれると動けなくなったりするのも、この魂のレーザー光線のせいであろう。合気道の稽古は、身体が整ったら、今度は、魂の生成化育を図るようにしなければならないだろう。



開祖の太刀捌き

この魂が魄に先行することが稽古で意識できたら、今度は更に強く意識してこころ（魂）を集中し、魂（意識、こころ）を練磨していけばいい。その時、手足を無暗に動かして力（魄）でやるのではなく、こころに従って動くようにすればいい。そのためには、相手を押しついたり、弾き飛ばすような力を出すのではなく、魂と魄が相手とくっついていることがポイントである。くっついているから、つまり相手と一体化しているから、こちらのこころ（気持ち）と一緒に動けることになるのである。

これを天之浮橋に立つ、魂魄が正しく整った姿、というのだろう。魂の世界と実在の世界の両世界がひとつになるのである。十字ともいう。これが十字道であり、合気道ということになるだろう。ここから形のない、本格的な合気道の練磨に入れることになるのだろう。

合気道は、究極的にはすべて魂の学びといわれ、形はないといわれるが、このためには、「魄が下になり、魂が上、表になる」の合気の練磨方法をしていかなければならないことになる。

【第216回】 天地の呼吸

合気道は摩訶不思議でなければならぬと、開祖は言われていた。この摩訶不思議ということにはいろいろな意味があるだろうが、そのひとつに、人間の力だけでは到底出来そうもないという意味があるだろう。

ただ手足をバタバタ動かして、体力や腕力だけで技を掛けても、強いかもしれないが摩訶不思議ではない。

摩訶不思議の技を遣うには、天地や宇宙や神などの力を借りなければならないだろう。それにはいろいろな力があるだろうが、今回は天地の力である天の呼吸と地の呼吸に焦点を当ててみたいと思う。

武道の歩法はナンバであるから、着地した足側の肩は降り、反対側の足と肩は上がる。そして着地した足側の手は地に向かい、反対側の手は天に向かって動く。この動きが分かりやすい技は「天地投げ」である。素直にこのナンバの歩法での肩や手を遣えば上手くいくはずだが、間違っただけで遣ってしまうと上手くいかない。例えば、着地している足側で、掴まれている手を、最初に上げようとするのである。相手が体重をかけて抑えているのだから、手は上がらないはずである。上がることは、相手が親切に受けを取ってくれるからである。先ずは、地の足を入り身で進めると共に、地の足側の手を地に落とせばいい。こちらの体重をかけるのだから、手を掴んでいる相手には相当な力がかかる。そうすると相手が抑えている反対側の手に弛みができるので、容易に上げることができるはずである。そして、その上がった手を下ろせば、相手は倒れることになるのである。しかしこれだけでは人間の力での技であり、摩訶不思議でも何でもない。この「天地投げ」で摩訶不思議の技を遣うには、天と地の力を借りることである。

入り身しながら着地する足と共に、手と意識を地に食い込むように十分落とすと、体重は地に吸収され、地の呼吸と一緒にになる。そうするとその抗力が地から戻ってきて、反対側の天の手に流れ、手が自然に天に向かって上がっていく。手を抑えている相手は、自分の意思とは反対に、力が抜け、体は伸び、こちらと一体化してしまう。後は、投げるのも抑えるのもこちらの自由自在である。相手はどうしてそうなるのか分からず、言わば摩訶不思議になるようである。これが、開祖が言われている、「地の呼吸と天の呼吸とを頂いてこのイキによって（略）技を生み出してゆく」ということではないだろうか。

合気道の技は、この天の呼吸と地の呼吸に体と息を合わせていかなければならないはずである。天地投げだけではなく、四方投げでも入り身投げでも二教でもすべて、天と地の力をお借りしてやらなければ満足な技も摩訶不思議な技も遣えないだろう。

人は宇宙の精妙をことごとく受け止めている引力の持ち主であるから、大地の呼吸とともに天の呼吸を受け、その息をことごとく自己の息にして同化し、魂魄を正しく整えていかなければならないという。摩訶不思議な技が遣えるためにも、天の呼吸と地の呼吸を頂いた稽古をしていきたいものである。

【第217回】 光明

人は誰ひとり、ひとりで生きて行くことはできない。人はそれぞれの役割や使命を果たし合うことによって、お互いに生きていける。また、人間は人間だけで生きて

行くこともできない。地球上の動植物、鉱物、などのお陰で生きることができるのだ。お日様の光や空気や水がなければ、どんなに金持ちでも、体力に自信があっても、生きて行くことはできない。自分ひとりだけでは何もできないのである。他人や自然や宇宙に助けられていることになる。

合気道の技は摩訶不思議と思われるようでなければ、相手もそして自分自身も心から納得させることはできないだろう。人間の物理的な力による技遣いでは、納得できないはずである。なぜならば、合気道を志す人達は、人間を超越したものがあるはずだと信じているはずだし、それを求めて稽古をしているはずであるからである。

開祖がいわれている「光明」を求めているともいえるだろう。光明とは、辞書によれば、仏の身から出る徳の光、くらやみを照らし出す明るい光である。合気道はこの「光明」に神習っていかなければならないという。

開祖によれば、光明というのは天国及び天人そのものであって、この「光明」は天から与えられるものであるといわれる。しかし、「光明」が天から与えられるためには、世界が日月の気と、天の呼吸と地の呼吸、潮の干満、そして澄み切った玉で浄化され、そして和合しているということがわからなければならない。それが分かれば、天から与えられる「光明」を感得できるはずだと、開祖はいわれているのである。つまり、自分や人間だけに頼らずに、自然や宇宙の力を信じ、それを遣わせてもらいなさいということだろう。

合気道は武であり、武は悪を改心させるものでもあるが、この「光明」で「ああ、なんて素晴らしいもの、有難いもの」と悪を改心させるということであるという。これが摩訶不思議ということにもなるだろう。

合気道の技の稽古から「光明」を授かるためには、自分の小さな力だけに頼らずに、太陽と月の気、天の呼吸と地の呼吸（「第216回天と地の呼吸」参照）、潮の干満、澄み切った玉（空の気と真空の気）の力をお借りして、技を遣わなければならないということになるだろう。

参考文献 『合気真髓』

【第218回】 宇宙の真理に従う

合気道の修行は、真善美の探求ということもできるだろう。真善美の備わる技を身につけていくのである。しかし、どんな真善美をつけていかなければならないの

か。どうすれば真善美を身につけることができるのか。何を基準にして、真善美を
探求していけばよいのだろうか。

稽古で身につく真善美は、真、善、美とバラバラなものではなく、私のイメージと
しては、団子のように一つに固まっているもの考える。なぜならば、真の真や善
は美しいし、また真に美しいものは真であり善であるように、いわばひとつのものを
別な角度から見ただけの違いだと思うからである。

稽古していて、自分や相手がやる技が、どれだけ真や善であるかを認識するのは難
しいだろうが、美で評価することは少しは容易であると思う。それ故、美を見れば
美の程度によって、団子になっている真と善の程度がわかるのではないだろうか。
従って、ここでは「美」に焦点を合わせてみたいと思う。

人類は何か絶対的なものを求めて生存しているように思える。そのひとつに、飽く
なき美の追求がある。美しいものは、時代が変わっても、民族や地域が変わって
も、美しいと評価をうけるし、人は常にそのような美を探求しているようだ。

人類が追及している美には、何か法則があるようだ。
例えば、黄金率である。黄金率は古代より「最も美しい」とされる比率である。その比率は「 $1.618033\dots:1$ 」で、この「 $1.618033\dots$ 」を
黄金数という。この記号を ϕ （ファイ）であらわす。



パルテノン神殿

この黄金数で美しいといわれている建造物として、ギリシャのパルテノン神殿（写真）が有名であるが、その他にもこの黄金数は、自然界の植物の葉の並び方やヒマワリの中にもあらわれるという。（『Newton』2010.6月号）

また、葉が最も高密度にばらつく角度は、約 137.5 度の黄金角というものがあるし、植物の茎につく葉の数やイチゴや松ぼっくりやパイナップルの集合果の螺旋の列の数は、フィボナッチ数（注： $1, 1$ ではじまり、「前の2項を足すと次の項になる」という数列）の法則に則っているという。フィボナッチ数のとなりあう数の比は、数が大きくなるにつれて黄金数に限りなく近づくという。（同上）

自然、つまり宇宙には、何か絶対的なもの、真理があるはずである。そして、科学も芸術もその真理を求めているのであろう。合気道においても宇宙の真理を探究し、技に還元していかなければならない。

開祖は、合気道は「宇宙の美しき御振る舞いの貴い営みの御姿を明示する律法である。合気道を修行する者は、また万有万神の条理を、武道に還元することが大切なこととなってくるのである。それは万有万神の条理から来る真象を眺めることであ

る。」といわれているのである。

参考文献 『Newton』 2010.6月号

【第219回】 一体化

合気道の修行は、技の練磨を通して行われる。そして、技の練磨は相対稽古の相手を通して行われるのが一般的である。相対する相手に少しでも上手く技が掛ければ、技が少し上達したことになるし、合気道が進歩したことになるのだろう。

技がうまく掛かるためには、いろいろな条件が必要であるが、その内のひとつの必要条件是「一体化」であろう。各々ばらばらに動いているものを一つにしてしまい、一緒に動くことである。

まず、相手との一体化である。攻撃してくる相手は、打ったり、押したり、引いたり、逃げたりとこちらの思う通りには動いてくれないものである。このような相手に技を掛ければ争いになってしまう。相手（1）と自分（1）とで2になるわけである。

一体化とは、この通常の $1 + 1 = 2$ になるのを、 $1 + 1 = 1$ にすることである。相手と自分を一体化することである。相手を自分の一部にすることである。まずは最初に相手と触れた瞬間に相手と結んでしまい、そして結んだまま技を掛けていくのである。

次に、一体化した相手と自分、（自分達）が、天と地と一つになることである。開祖が言われているように、「天地の気と気結びすること」「天の呼吸、地の呼吸（潮の干満）を腹中に胎蔵する」「天地（あめつち）に気むすびなして中に立ち心がまえは山彦の道」ということであろう。

相手と自分が一体化しただけでは、まだ相手の重力は残っているが、天地の呼吸と自分達が一体化すると、相手の重力は0（ゼロ）となるようである。逆に言うと、相手の重力が0（ゼロ）となれば、天地の呼吸と一体化したといえるだろう。

天地の呼吸と一体化するためには、心と呼吸と拍子なども大事であるが、最も大事と思われることは、体を十字に遣うことである。下肢（足）は撞木・撞木・・・と十字に遣うが、水平方向（横）と垂直方向（縦）の両方の十字が必要である。つまり、撞木で横（水平方向）に振った力（遠心力）を、次には縦方向の地にしっかりと落とすことである。横に振って、また横に振り返すだけでは、体はふらついてし

まうし、地からの抗力が来ないので、自分の力に頼るしかなくなる。そのため天地の力を借りることができないので、相手の重力を0（ゼロ）にすることができないことになる。

まずは相手との一体化、そして体を十字に遣い、天地と一体化する稽古をすることである。

【第220回】 「宇宙生成化育」と「一隅を照らす」

合気道の教えでは、人は宇宙生成化育のお手伝いをするために誕生し、生きているという。それゆえ、人はみな宇宙生成化育のための役割をもっていることになる。その役割を使命という。従って、自分の使命に気付かなかつたり、その使命を果たさないことは、宇宙（天又は神ともいう）に対する大罪であるという。

そうだとすると、多くの人は大罪を犯していることになるのかもしれない。なぜなら、ほとんどの人は自分に使命があるなどと考えもしないだろうし、あるとしても、自分の使命が何なのかもわからないだろう。

開祖は、合気道は各自の使命を導く羅針盤であるといわれている。合気道を修行することによって、それが分かるというのである。

かつて開祖のもとには多くの著名人が、開祖の教えを乞いに集まった。（写真）



昭和6年「皇武館」道場懇親会
（開祖、竹下勇大将、榎本春之助、
二木謙三博士、下條小三郎等）

軍人、学者、芸能人、皇族、宗教家、芸術家、相撲

家・・・などなど武道以外の分野からも多くの人達が集まった。彼らは武道の稽古で技を磨いて強くなりたくて稽古をしていただけではないはずである。強くなりたい、体を鍛えたいということもあっただろうが、それはむしろ二次的なもので、彼らにとって開祖のところにくる最大の理由、つまり最大の喜びと感動は、自分の使命を確認し、その使命を果たしていかなければならないと再確認することではなかったと考える。これが、「合気道は、天命を完成させてあげる羅針盤（『武産合気』）」ということであろう。

著名な人達だけが、宇宙（天や神）から使命をもらっているわけではないはずだ。宇宙はそんな無駄なことはしないだろう。それより人すべてに使命を与えた方が、宇宙生成化育にはベターであろう。

それに実際、人は各自それぞれの使命を持っているように思える。世の中は、すべてが隙間なく連携している。そこでは、各自の使命が積み木細工のように連なり合

っているように見える。そこに隙間が出来れば、またはあれば、人はそこを新たな使命の積み木細工で補おうとする。これは宇宙がつくった人の性、習性だろう。ビジネスでも、研究テーマでも、論文でも、またノーベル賞や何とか賞なるものは、その隙間を補ったものであり、そしてそれが評価されて、利益や名誉が与えられるのである。

使命の積み木細工が隙間なく連なって地球楽園をつくり、宇宙を生成化育するには、一人でも多くの人に参加しなくてはならないはずである。著名人や優秀な人達だけでなく、普通の我々一般人も参加協力しなければならないわけだが、実際には、ほとんどすべての人達がその使命をはたすべく一生懸命生きているといえるのではないだろうか。

まず、世の中に一生懸命生きていない人などいるだろうか。一見ぶらぶらしたり、仕事に行かなかったり、昼間から酒を飲んでふらふらしている人もいるが、彼らはそれなりに出来るだけのことをしているし、なんとかしなければならないと、あがき、一生懸命やっているはずである。

「高齢者のための合気道 第219回 『一隅を照らす』」にも書いたが、叡山を開いた最澄の言葉に、「一隅ヲ照ラス、コレ国宝」がある。目立たないが、世間の一隅にあって不断の灯火を絶やさずにいるひとびとは素晴らしく、国の宝であるといっている。仕事をする人も、子供を育てる人も、修行に励む人も、国の宝なのである。普通一般の人々はまさしくこの国宝であるし、また国宝を目指しているといえるのではないだろうか。

この一隅を照らすということは、自分の使命を一隅に見つけ、その一隅の使命を少しでもよく果たすべく生きていることであり、自分、つまり人間の可能性を少しでも広げようとしていることになるだろう。

そして、この人が一隅の使命を果たしていくことこそ、宇宙生成化育のお手伝いをするということになるのではないかと考える。つまり、一隅を照らす人達も、宇宙生成化育の大事なお手伝いをしているということである。

一隅でよい。使命を見つけ、それを信じ、宇宙生成化育のお手伝いをしていきたいものである。

【第221回】 宇宙一家の一貫性

世の中、つまり地球も宇宙もだが、あるものに向かって進んでいるようだ。地球楽園、宇宙完成を目指し、生成化育しているのだ。そして、この世に出現したありと

あらゆる万有万象は、生物であるなしに関係なく、そのお手伝いをするための役割を担い、分身分業をする一家であるといわれる。それを開祖は、「うるわしきこの天地のみ姿は 主のつくりし一家なりけり」と詠われている。従って、虫一匹殺しても、天の星が一つ落ちても駄目であると言われている。

ノーベル平和賞候補にあがった未来学者、システム哲学者であるアーヴィン・ラズロ博士は、合気道で言う宇宙一家を、「宇宙は、そのなかに存在するすべてのものと共に、生物にも似た一貫性を持つ一つの総体をなして、宇宙に存在するすべてのものは互いに結びついている。わたしたちは、お互いの、そして自然の、一部である。わたしたちは、一貫性をそなえた世界の、一貫性をそなえた一部である。その点に関しても人間も、一個の素粒子、恒星、銀河とまったく同じだ。それらとわたしたちとの違いはただ一つ、わたしたちは、世界の中の意識をもった一部、これを通して宇宙を自らを知るようになる一部であるという点だ。」と言っている。
(『生ける宇宙 — 科学による万物の一貫性の発見』アーヴィン・ラズロ著)

ラズロ博士がいう一貫性とは、開祖が言われる「一元の本」「一元の大御親」と繋がっているということであろう。開祖は、すべてのものはこの「一元の本（大御神）」に繋がっていなければならないのだから、「一元の本（大御神）」を忘れてはならない」とよく言われていた。

また上記のラズロー博士の著書のなかで、「イギリスの物理学者クリス・クラークは、『宇宙全体は、絡み合った一つの量子系である。これまでもずっとそのような状態にあったし、今後も常にそうであり、完全に一貫性を保ち続けるだろう』と断言した。」と述べている。

さらに、博士は、「最先端の生物学者や生物物理学者たちが、生命体は、およそすべての分子、細胞、器官が、ほぼ瞬時に成り立つ結びつきによってつながった、驚異的な一貫性をもつものだという事を見出している」とも書いている。

開祖もラズロ博士も言っているように、宇宙に存在するものはすべて一貫性のある宇宙一家であると考えれば、その一貫性と統一を乱すことは、宇宙生成化育を乱すことであり、開祖が言われるように大罪ということになる。人間同士の争い、他の動物の虐待、地球破壊、大気汚染等などは、宇宙的規模の罪ということになる。

合気道の技を練磨するに当たっては、この宇宙の一貫性を乱さないことが重要になるだろう。相手と争ったり、怪我をさせるのは、もちろん罪になるが、宇宙生成化育に反することをやれば罪になる。合気道の技は、宇宙の法則に則ってつくられているものなので、宇宙の法則との一貫性をもつように、技を遣ったり、体を遣う稽古をしていかなければならないことになるだろう。

掛けている自分の技が、宇宙の法則に則っているかどうかを判断するのは、難しい

かもしれない。よほどの名人・達人が見てくれないと難しいだろうが、その名人・達人がいつも身近にいて判断してくれることもないだろうから、自分自身で判断するしかないことになる。

ありがたいことに、前述のように、宇宙に存在するものはすべて一貫性をもって結び合っており、自分と地球や宇宙も繋がっているという。だから、自分が技を掛けて気持ちよく感じたことは、宇宙も心地よいはずだし、自分で十分満足できなければ、宇宙もそのはずだから、自分が満足できるように稽古をしていけばよいことになるだろう。これが開祖が言われている、「宇宙の中心に立たなければならない」ということなのかも知れない。

技を掛けるのも、宇宙のあらゆるものと瞬時に一貫性を持つわけだから、宇宙生成化育を乱すという罪を犯さず、宇宙生成化育に少しでも役立つようなものにしていきたいものである。

【第222回】 真空と真空の気

時が経つにつれて、人類は今まで分からなかったことが少しずつ分かってくる。宇宙のことも、まだまだほとんどのことが分かっていないと言えるが、それでも少しずつ解明されてきているようだ。

新たに分かってきたことのひとつが「真空」である。これまで宇宙は真空であり、空虚な空間であると思われていたが、最近では、真空は、空虚な空間とはまったく異なり、エネルギーで満ちており、その中の星や太陽と相互作用を及ぼしているという。例えば、地球が太陽の周りをエネルギーを放出しながらも軌道を乱さずに回り続けているのも、地球が真空からエネルギーを吸収しているためだという。もし真空にエネルギーがなければ、地球はエネルギーを消耗するだけで、太陽にだんだん近づいてしまうことになるはずだという。

ミクロの宇宙での原子の世界でも、原子核を周回する電子の軌道の安定性も、地球と太陽と同じように真空との相互作用によって維持されていると言われる。

また、「真空」は宇宙の基本要素である粒子を生み、そして最終的にそこへ還っていく子宮であり墓場であるという。（『生ける宇宙』アーヴァン・ラズロ著）

これを、開祖はすでに、「真空の気は宇宙に充満しています。これは宇宙の万物を生み出す根源であります。」（『合気道新聞3号』）と言われていたのであるから、改めて恐れ入るだけである。

合気道では、この「真空」がわからなければならないという。つまり、「真空と空のむすびのなかりせば合気の道は知るよしもなし」と道歌にあるからである。また、「身の軽さ、早業は真空の気をもってせねばならない。」とも言われる。それ故「真空」「真空の気」を解明し、それを技にどう結び付けるのかを考えなければならない。

「真空」「真空の気」を考える場合、それと対照となるのは「空の気」であるが、「空の気」は重い力を持ち、引力を与える縄であると言われている。私はまず、「空の気」を、モノとモノが引き合う引力と考える。また、「真空の気」を「真空」にあるエネルギー（粒子、ダークマター、ダークエネルギー）と考えたい。

しかし、これを技にどう生かさなければならないかということである。技を遣う場合、まず、技を掛けるという意思がはたらかなければならない。次に、相手と結ばなければならない。相手と結んで一つになることである。相手とは万有引力が働くはずであるから、重い力の空の気が働くはずである。しかし、いつまでもくっついては、団子状態で技にならない。技になるためには、この重い空の気を解脱して自由になるべく、真空の気と結ばなければならないことになる。

開祖はこれを「本体は物の気で働く。空の気は引力を与える縄。自由はこの重い空の気を解脱せねばならない。これを解脱して真空の気に結べば技がでる。」といわれている。

例えば、相手が剣や手刀で打ち込んでくるとした場合、まず、逃げたりせず、心を相手と結ばなければならない。そして、相手に打たせて、相手の剣や手刀と自分の空間的密度が十分に濃縮された瞬間に、その結んだ線を外し、真空の気と結び、相手の引力（空の気）を完全に断ち切り、相手の死角に入ってしまうようなことであろう。

しかし、この重い空の気からの解脱は容易ではない。気持ちの相手の重い空の気に残ってしまうからである。解脱できないと、相手の剣や手刀で切られてしまうことになる。

解脱するには心の持ちようと息遣いが大事であるだろう。相手にとらわれない、強く自由な心を持たなければならない。そして、「真空の気」を一杯に吸い込んで五体を満たさなければならない。そうすれば、五体はその働きを活発にし、千変万化神変の働きをすることが出来るようになり、宇宙と一体となりやすくなるということであろう。

引力となる「空の気」と真空のエネルギーの「真空の気」を取り入れた稽古をしていかなければならないだろう。

【第223回】 技とは

合気道は合気道の技を稽古して精進する。誰でも稽古を初めた頃は、先生が模範で示す技が何なのか分からず、先輩に教えてもらいながらやっていたことだろう。当時は先生がちょっと示した技を、先輩たちがすぐ、しかも間違いなくやるのを見て、大したものだと思ったものである。

しかし、今になると、それほど驚くことではなかったことが分かる。先生はたいてい、それほど多くはない基本技を示しているのだから、何回かやれば、その技がなんであるか分かって出来たわけである。従って先輩でも、先生がたまに応用技や変わった技をされると、自分の知っている技の分類にないので、入門早々のときのように、先生がやった技が見えなくて、おたおたしてしまったものだ。

「技」とは、一教、四方投げ、入り身投げなどに、相手の攻撃方法である"取り"と、攻撃する人数"掛け"を組み合わせたものである。従って、例えば、「片手取り四方投げ」を覚えたら、「片手取り四方投げ」という技ができることになる。そして、少しでも多くの技を身につけようと、稽古に励むのである。しかしながら、この段階で"技"と思っているのは"技の型"である。技の稽古をしているつもりでも、型を覚えようとしているのである。しかも、例えば「片手取り四方投げ」という技の形（かたち）をなぞっているにすぎない。

合気道の基本技の数はそれほど多くないので、"技の型"を覚えるのにはせいぜい2年もあればいいだろう。

しかし、合気道の稽古には終わりが無い、といわれるし、まさにその通りだと思う。実際、多くの稽古人が10年も20年も、さらに40年、50年も、続けているのである。"技の型"だけをやっていただけでは、飽きてしまうし、稽古を続けるのもつまらなくなるだろう。実際に、永遠に続けなければならない稽古を、途中でやめていくのは、"技の型"を技と考えて稽古していたことによると思う。

合気道の技は、宇宙の真理に従い、万有の条理を形したものであるといわれる。"技の型"をなぞっている人の技、例えば「片手取り四方投げ」の"かたちや姿"が、宇宙の真理に従い、万有の条理を表しているとは思えない。宇宙の真理に従い、万有の条理を明示するものは、単なる"技の型"ではなく、もっと深いものだと考える。

技が上達してくると、宇宙や万有の条理と思われる法則を取り入れていくようにな

る。例えば、陰陽、十字、螺旋、真空の気、空の気などなどである。私はこれらの宇宙や万有の条理と思われる法則を"技要因"と呼んでいる。一つの技、例えば、「片手取り四方投げ」は、恐らく無限の"技要因"で構成されているはずである。上手な技、いい技とは、この"技要因"を沢山もっているということになるだろう。

この段階での「技」とは、技要因、つまり宇宙の法則ということになろう。合気道の技の型、例えば、「片手取り四方投げ」などを通して見つけていくことだろう。合気道の技の型は、宇宙の法則を見つけやすいように出来ていると思うし、それを体得させてくれるものは他にはないだろう。改めて感心するとともに、合気道に出会ったことに感謝する。

従って、"技"とは、"無限の技要因で構成される技の型"ということが出来るのではないだろうか。とすると、合気道で技の練磨をするということは、合気道の技の型を繰り返し稽古しながら、宇宙の真理である技要因を見つけ、技に取り入れ、身につけていくことであろう。

また、この練磨を続けることによって、宇宙の真理や条理が身につき、宇宙と一体化できる道にのることができるのだろう。そしてこの道を、合気道というのではないだろうか。

【第224回】 変わろうとしている世界

街で行きかう人々の顔を見ていると、笑顔でうれしそうな顔が少ないのがさびしい。うれしそうに、楽しそうに、そして満足した顔をしているのは、親と一緒にいる幼い子供たちと若いカップルばかりのようだ。この傾向は海外の先進国でもあまり変わらないようだ。

かつては三種の神器を手に入れたり、マイホームを入手したり、マイカーを購入した人はもちろんのこと、それを自分も手に入れたいものと思う人まで、だれもが目を輝かせていたものだ。日本人は、お金もちになれば幸せになれることを信じて、一生懸命働き、生きてきた。

そして世界2，3位の経済大国になったのだが、期待していたほどの幸せ感が持てないだけでなく、貧しい時代には予想もしていなかったネガティブなことや問題が次々と起こり、社会も個人も混乱している。殺人、テロ、戦争、災害などのニュースがない日はないといってよいだろう。1日100人もの自殺者（人身事故というが）があるなど、貧しかった時代は予想もできなかったことだろう。

この自殺、殺人、テロ、戦争、災害が頻繁に起こる状況を、ある人は、世界の終末であるといっているが、これはむしろ一つの過程であり、人類のたどる宿命であると考えの方がよいように思う。いってみれば、溜まった"膿（うみ）"みたいなものではないだろうか。これを、開祖は「いよいよ完成の時が来たのです。今地上にあらわれている悪は、地上完成の過程として仕様のいいものなのです。」（『武産合気』）と言われている。

なにもない所からビッグバンで宇宙ができ、太陽や他の星と同じような火の玉の状態から、生物が生存できる地球ができて、人類が進化し、文明が開化するに至るために溜まった"膿"で、これを出し切らなければならない。しかし、人類は、この"膿"をどう出し切れればいいのか分からず、模索しているところだといえるだろう。

そのために人類は、新たに信じられるものを模索している。これまでの宗教、哲学、社会科学（資本主義や共産主義）では人類を満足させることは出来なくなっている。新たな宗教、哲学、そして新しい考えや生き方が必要になってきたのである。

小説家の司馬遼太郎は、『司馬遼太郎が考えたこと』の中で、「人類は、もう一度出直そうとしています。もはや既成の哲学が世界把握の手段だと、信じているひとはいないでしょう。また社会科学が — たとえば経済学が — 予想の能力をうしなっているらしいことは、そのことに無知な私でもうすうす気づいています。世界は、不確定な時代に入っています。拠るべき基準がないという時代です。といって、私は厭世的にこんなことを申し上げているのではなく、じつに愉快的な — 自分たち個々が裸眼でじぶんなりの世界を見ることが、あるいは見ねばならぬという — 時代になっているという、心から微笑したい気分で、このことを申しあげているのです。」（「文化と文明について」）と書いている。

ここで言おうとしていることは、世界は不確定な時代に入っており、いろいろな問題がでてくるが解決はできる、ただし、これまでの考えややり方ではだめである、自分の体を通して判断し、実行しなければならない、そうすればよい時代が必ずくるはずだ、と言っているのだと思う。これは、まさしく合気道の教えではないか。

開祖もまた、「共産主義も自然の理によって消滅します。」「釈迦やキリストや孔子にまかせてはおけない。もう預言の時代は過ぎた。今はそれを実行に移すだけです。」と言われているのである。

参考文献 『司馬遼太郎が考えたこと』（司馬遼太郎）

【第225回】 言葉と技

合気道の創始者である植芝盛平翁は、われわれ後人が合気道を精進できるようにと言葉と技を残された。言葉は、開祖の生の声も指すが、開祖の言葉を文字にした言葉も含む。もし合気道を言葉で残されていなければ、後のものは道を失い、合気道はいずれ別なものになるか、多くの武術が辿ったようにいずれ消滅したかもしれない。

有難いことに、開祖はいろいろな方々の協力のもとに、貴重な言葉を残されている。合気道には言葉があり、技がある。だから、誰でも、どこでも、いつまでも、いつの時代になっても、精進し続けることができるはずである。

合気道は、技を練磨してそれを身につけることによって精進していくが、ただ無闇に体を動かせばいいものではない。合気道の技は、宇宙の法則に則ったものでなければならないからである。しかし、この宇宙の法則とか条理というのは、我々凡人には中々分かり難いものである。それが分かる唯一の方法が、開祖の言葉を理解し、それを合気道の技で体現してみることではないだろうか。つまり、開祖の言葉に則った技遣いをし、体を遣わなければならないということになる。

それ故、まずは開祖の言葉を研究することであるが、その為には、次のような資料があるだろう：

- 『合気真髄』：合気道新聞に掲載された開祖の言葉を集め、整理したものである。更に詳しく調べたい場合は、『合気道新聞DVD版』を見るといい。
- 『武産合気』（白光会編）：白光会で開祖の講演を集めたもの。

また、開祖ご本人が残した言葉もある。

- DVDやビデオフィルムで開祖の肉声が聞ける。またY o u T u b eでも聞くことができる。

さらに、先人や先輩が開祖から直接聞かれた言葉も、書籍で紹介されている。例えば、

- 『開祖の横顔』（B A B ジャパン）
- 『植芝盛平と合気道 － 開祖を語る直弟子 I』（合気ニュース）
- 『植芝盛平と合気道 － 開祖を語る直弟子 II』（合気ニュース）

もちろん、これ以外にも多くの書籍や文献があるだろうから、それによって開祖の言葉をもう一度、熟読玩味して、少しでも理解するように努め、それを技に生かすようにしたらよいのではないか。思想のない技をやっても意味はない。

【第226回】 魂が魄の上

開祖は、魂が魄の上に来なければならない、第二の岩戸開きをしなければならない、と言われた。確かに、今はまだ物質文明で、力とモノが世の中を制しているから、これを変えていかなければならない。合気道を志す同士がそう思えば、世の中に多少の影響を与えることはできるだろう。だがその前に、合気道家としては、「魂が魄の上になる」稽古をしなければならないだろう。

名人・達人は出来るだろうが、一般の稽古人はまだまだ力、魄に頼った稽古が多いようだ。もちろん、魄の稽古も必要である。特に、若い内は理屈抜きで魄の稽古で肉体を鍛え、力をつけなければならない。合気道に力は要らないなどの迷信に惑わされずに、力をつけるべきである。

しかし、ある段階に達したら、それまでに蓄えた肉体と力のわがままを抑える稽古に変えていかなければならない。ある段階というのは、一つは上達のレベル、例えば、五段、六段であり、二つには年齢である。60、70歳になってもパワーの稽古をしているのは不自然であろう。

合気道の稽古で「魂が魄の上になる」稽古とは、どういうものかと考えてみると、こころの先導によって体を動かしたり、遣うことといえるのではないだろうか。こころは気持ちであり、精神であり、魂でもある。

こころ（魂）は自由であり、どんなに早くも遅くも動く。美しいリズムと軌跡のこころ（魂）で、自分の体を導き、そしてこころで体の動きを修正、改善するのである。こころ（魂）が体（魄）を遣うのである。

これに対して、魄が魂の上の稽古は、体が自由奔放に暴れまわってしまい、こころで制御できないような稽古である。子供たちの稽古を見ればよく分かるはずだ。こころで体を制御できないので、見ていてもハラハラする。

こころが体をうまく遣うためには、はじめはゆっくり動く稽古がよいだろう。ゆっくり動くことによって、こころが体の動き、体遣いをチェックしたり修正できるからである。

体はこころに従って動けるようにならないといけない。ここで再度、体の新たな鍛錬が必要になる。こころで体を監視していると、どこが弱いのか、機能不全なのかが見えてくるものだ。弱いところは力をつけ、動きの悪いところのカスを取って、すこしでもこころの命ずるままに動けるようにしなければならない。

体がこころのままに動けるようになれば、電光石火でも動けるようになるはずだ。こころは自由で、光よりも早い。もしこころのままに体が動くことができれば、理論的には光より早く動けることになる。しかし、現実としては、こころの働きが邪念、盲想などに邪魔されたり、体にカスが溜まったりしているので、それ相応にしか動けないことになるわけである。

こころは光よりも早いだけでなく、まわりのものとも瞬時に共鳴するようだ。イワシの大群が大きな魚の群れに襲われたときのイワシの動きは、まるで一匹が動いているように、いっせいに瞬時に方向を変えて、反転する。合気道の稽古でも、「魂が魄の上になる」稽古では、力で相手を導くのではなく、こころで共鳴し合い、こころで一体化して動くということかもしれない。

今のところ、こんなところが合気道における「魂が魄の上になる」稽古ではないだろうかと考えている。

【第227回】 技との対話

合気道では技を練磨して精進していくが、ただ稽古を続けていけば技を練磨できるわけではない。

技の練磨には、二つの意味があるだろう。一つは、身につけた技を繰り返しやり、要らないものを削り落とし、不足しているものを補い、練り磨いていくこと。もう一つは、新しい技要因を見つけ、古い技から脱皮していくことである。

そのためには、技の練磨の稽古で、自分自身を極限の状態においてやらなければならないはずである。日常生活を引きずったまま気楽な気持ちで稽古するのでは、真の練磨は難しいだろう。道場に入るまでの儀式をしっかりとやり、体調を最高の状態にし、息を整え、俗なことを忘れて精神の集中をはかり、そして技の練磨の稽古に臨まなければならない。

相對稽古では、技を掛け合って技を練磨していくが、上達はいかに集中して稽古ができるかに掛かっていると思う。合気道の技は、宇宙の条理に則った姿であると言われるので、非常に精妙である。1センチ、1度、1秒のずれがあっても上手く掛からないはずである。よほど集中して技を掛けていかなければならない。

集中するということは、技以外のこと、例えば、相手を倒そうとか、極めてやろうとか、いいところを見せようとか思わず、また恐れや焦りに煩わされることもな

く、技だけに集中することである。

技に集中すれば、技との対話が出来るはずである。技が、これはよいとか悪いとか、又、こうした方がよいとか言ってくれる。あとは、技の啓示に従っていけばよい。

合気道の技は、宇宙の営み、宇宙の条理と言われるから、技との対話とは宇宙との対話ということができるだろう。合気道の稽古をして、宇宙と対話できるのである。こんな素晴らしいことはないだろう。

【第228回】 技と道と神

合気道は、技を練磨して精進する道である。合気道の技は、宇宙の営みを形にしたものであるので、宇宙法則に則ったものである。この宇宙法則に則った技の練磨することが、道にのっているということになり、自己流などその他の技は、道の外にある外道とか邪道ということになる。

従って、道とは、真の合気の技を極めていくということになる。宇宙の法則・条理である技要因を見つけ出し、身につけていくことである。例えば、螺旋、十字、陰陽、△○□、日月と潮の干満、ひびき等などであろう。

宇宙は無限であるので、技要因は無限にあるはずであり、限りがないので、少しでも多くそれを見つけ、身につけることしか出来ない。すべてを身につけることは、人には出来ないことを知りながら求めていくのだから、悲しい宿命だが、そこにロマンがあると言えよう。

技を完全には究めることは出来ないわけだが、技を究めていくことによって普遍的なものが見えて来るようになるという。有川定輝師範によれば、「普遍的なものというのは真理ですから。真理というのは神ですね。ある意味では。」（『植芝盛平と合気道Ⅱ』（合気ニュース）ということである。

それ故、技を究めることによって神につながることでなり、技と道と神はイコールとなるわけである。そうすると神は意外と身近にいるかもしれない。とりわけ合気道では、神を見るのは難しくないかもしれない。なぜならば、神に接しようと思えば、合気の道から外れないようにしながら技を究めていけばよいからである。

【第229回】 人は小宇宙

開祖は、「合気道とは、

- 己の心を宇宙万有の活動と調和させる鍛錬
- 己の肉体そのものを宇宙万有の活動と調和させる鍛錬
- 心と肉体とを一つに結ぶ気を、宇宙万有の活動と調和させる鍛錬

であり、真の武である合気道は、宇宙のいとなみが自己のうちにあるのを観得することである」と言われている。

だから、宇宙が分からなければ、合気道は分からないということになるだろう。

また開祖は「合気道の極意とは、己を宇宙の動きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある。合気道の極意を会得した者は、宇宙がその腹中にあり『我は即ち宇宙』なのである。」と言われ、そして、「植芝の合気道には時間も空間もない、宇宙そのままがあるだけなのです。これを勝速日といいます。」と言われているのである。このように、合気道は宇宙を対象にし、己を宇宙に一致させる武道であるといわれるのである。

合気道は技の練磨で精進するものだから「宇宙の技」を練磨していかなければならないことになる。「宇宙の技」を身につけていくことによって、宇宙の動きと調和し、そして宇宙と一致し、自らも宇宙になることであるようだ。しかれば、宇宙とは何か、宇宙を理解することはできるのか、宇宙と一致できるのか、そのためにはどうすればいいのか、ということが問題になろう。

しかしまた、人は宇宙であるとも言われる。人は小宇宙であるとも云われているのである。開祖も「宇宙と己れとは同じと言うことを知らなければならない」と言われている。また、「自分の身体を眺めて頂ければ、その悟りにおいて、ことごとく神世からの歴史が、ことごとく血の中に流れているんですよ。身の内にあるんです。数百億万年の昔も未来もやな、現在その自己の身の内に、一代の内に営んでるんや。」とも言われているのである。

そうだとすれば、人が小宇宙であるとはどういう意味なのか、どうすれば大宇宙と調和できるのかを、開祖の言われることから考えてみたいと思う。

中国の漢の哲学書『淮南子』（えなんじ）』では、宇宙とは時空のことで、宇宙の宇とは空間で、宙は時間という。

何もない虚空に忽然と現れたポチ、一元が魂と魄の本の二元を生みだし、大宇宙を営み、人を創造し命を与えたという。大宇宙も人も、その一元から生み出された同胞ということになるだろう。だから、歴史と規模から見て、宇宙と人はつながっている大宇宙と小宇宙ということになるだろう。

大宇宙にも人の小宇宙にも、時間と空間がある。137億万年に創造した大宇宙に比べ、精々数百万年前に出現した小宇宙（人）は非常に若い、この小宇宙である人は137億万年からの大宇宙と繋がっており、その過去の歴史が収められているはずである。

つまり、人は137億万年のデータを保存しているわけである。これが、開祖がすべてが一元の神と繋がっているといわれていることであろう。そして、この両宇宙は、共に過去と現在を共有するだけではなく、未来の楽天を目指し生成化育を続けているのである。人は未来にも生きていることになるから、人は過去と現在と未来の「宙」を、大宇宙と同じように包含していることになるし、また自由で無限の心を持っているわけだから、大宇宙と共に上下東西南北の「宇」も有していることになる。

「人は宇宙の精妙をことごとく受け止めている引力の持ち主であり、人は大地の呼吸とともに天の呼吸を受け、その息をことごとく自己の息にして同化し、魂魄を正しく整えているのである。すなわち人は全宇宙を受け止める経綸の主体である」といわれる。（『合気真髓』）つまり、この主体こそ小宇宙の人であり、大宇宙の引力と繋がっているわけである。

また、「五体は宇宙の創造した凝体身魂であるから、宇宙の妙精を吸収し、宇宙と同化しているわけである。」（『合気真髓』）さらに、「人というのは、造化器官であることを知り、全大宇宙と己れとは同じということを知らなくてははいけない。」とも開祖は言われるのである。（『合気真髓』）人の五体は、宇宙の意志を表現する造化器官であるということだ。

このようなことから、人は、もう一つの小宇宙、ミクロコスモスと言われてもいいだろう。しかし、すべての人がはじめから完全な小宇宙ではないだろう。もしそうなら、合気道でもすべての人が名人達人になっているはずである。

人は立派な小宇宙、宇宙となるべく修練していかなければならない。自分の中に宇宙を見出し、宇宙の条理を身につけていかなければならないのだろう。そのために我々は合気道を修行しているはずである。

【第230回】 合気道は武道

合気道は今や世界中に普及しており、老若男女150万人ほどが稽古しているといわれている。結構なことであり、喜ばしいかぎりである。開祖も喜んで下さること

だろう。

しかし、もし開祖が今の我々のやっている合気道の稽古をご覧になったとしたら、いろいろご不満を持たれるだろうと想像できる。開祖が亡くなられてからほぼ半世紀が経っており、社会も人の考えも大分変っていて、かつての柔術的で、硬い、力をつける稽古は、今の人や社会に合わないことはお分かりになるはずだろう。だが、それを考慮にいれても、今の稽古にはいろいろなご不満を持たれるのではないかと思う。

そのひとつは、多くの人がますます合気道を武道として稽古しなくなっていることだろう。つまり、スポーツ感覚で稽古しているということである。そもそも、スポーツと武道の違いが分からないで稽古しているように見える。

私はスポーツが悪くて武道がよいなどとはしていない。スポーツはスポーツで立派な役割があり、人と世の中に必要であると思っている。人間の肉体的能力のレベルアップは、スポーツによるところが大きいと考える。走ったり泳ぐ速さ、跳び上がったり、遠くに跳んだりする高さや距離などなど、人間の能力限界の記録をつくり変えている。特に、オリンピックや各種の世界大会での世界記録は、ここまで出来るものなのかという、人間の能力に対する感動と、どこまで記録、つまり能力が伸びるものであるかという期待と夢を与えてくれる。しかし、合気道はスポーツではない。スポーツのように、世界記録をつくりかえたり、勝つことが目的ではない。スポーツのように、その瞬間（例えば、勝負や試合）が大事ではない。スポーツでは、そこで負ければ終わりである。武道の合気道では、相対稽古で相手に技が掛からなかったり、抑えられても全然問題はない。それを糧として、いつか出来ればよいのである。武道では、かえって失敗した方がよい場合の方が多い。

スポーツには、ルールがある。あれをやっては駄目、これをやったら違反、反則などになる。武道には、本来、それはない。基本的にはなんでもあり、である。従って、合気道も攻撃してくる相手の攻撃が、予想もつかないものであっても、いつでも避けられるよう、スキをつくらないようにしなければならない。

合気道では、受け側が攻撃する場合も、初めの一回だけと考えてはならない。相手の前に立ったり、背中を見せたら、反撃されてやられてしまうことになる。スポーツならルールがあるだろうが、人道的にもそんなことはしないだろうと相手に甘えて安心したりしてはいけない。少なくとも隙をつくったことに気付き、武道としてはそこでやられたという意識を持たなければならない。

技を掛ける取りも、常に受けに隙を与えないように、技を掛けていかなければならない。正面打ちで手を上げる場合でも、相手の水月、胸尖、壇中、喉（肢中）、下昆、人中、鳥兎、天倒の点を結ぶ線の軌跡を描いて打たなければならない。そし

て、いつでも手先でその軌跡にある急所を突けるように、指先に気持ちを集中させて打たなければならない。

また、正面打ちから一教で相手の手を抑えても、外側の手は何時でも相手の顔面を突けるように、気持ちを手先に集中しなければならない（写真）。だが、実際にやってはいけない、突きや当て身など出来ることはやらない、と教わっている。合気道と違うものになってしまうからである。しかし実際に手で突かなくとも、気持ちは突いていなければならない。出来るのにやらない、これが武道の厳しさでもある。



有川師範の受けの顔面を突いている手

武道とは本来、命のやり取りのためにつくられた技術である。相手の攻撃からいかに身を守るか、相手を如何にすれば制することができるかを、先人達が考えに考え抜いてできた技である。人間の体と体の機能、人間のころころなどを知りつくし、それを徹底的に活用した技である。生半可に鍛えた体では、武道の技は遣いこなせないはずである。原点に立ち返って、体ところころを見つめなおし、それを身につけて遣っていかなければならないだろう。

だから、武道は一生ものである。スポーツは勝てないと分かれば引退である。武道の合気道に引退はない。合気道で引退するとしたら、合気道をスポーツとしてやっていたことになる。

武道の体と武道のころころを、技の練磨を通してつくっていかなければならない。スポーツの敵は相手だが、武道で打ち負かさなければならない敵は自分自身である。この敵は生きている限り一緒だし、いつも、そしていつまでも勝負を挑んでくる。

武道は自分が死ぬまでその敵と戦うべく修練しなければならないのだから、終わりはないはずである。死ぬ時はそのライバルと一緒に。出来るうちに、仲良く勝負をしていきたいものである。

【第231回】 殺して活かす

合気道は武道である。武道とは本来、命のやり取りのための技を練磨するものであろう。そこが武道とスポーツや遊戯と根本的に違うところであると思う。命のやり取りを前提にした武道の鍛錬は、時代や社会の状況によって変わってくる。戦国時代の鍛錬は今とは大きく違うだろうし、今の我々などとても出来ない鍛錬だったと想像できる。従って、戦国時代や江戸時代や明治時代の稽古法を現代やろうとして

も、稽古についてこられる人は皆無だろう。

しかしながら武道であるからには、現代においてさえも武道として最低順守しなければならない条件があるはずである。

それは、一言でいえば「殺す」ことではないだろうか。

勿論、今の法治社会で人を殺めることはご法度であるし、殺める必要などもない。

時代とともに、この「殺す」という概念は変わらなければならない。

現代の武道で「殺す」というのは、相手を納得させるという意味と考えたい。人は言葉を遣い、話したり、文章を書いたり、また身ぶり手ぶりでいろいろな動作をするが、これは人に納得して欲しいというためだろう。

合気道で相対稽古の相手に技をかけるにも、相手に納得してほしいと思っているはずである。もし、相手を納得させて、"参った"と思わせることが出来たら、それが相手を「殺した」ということになると思う。

合気道の稽古で、相手に技を掛けて、それが本当に効けば、相手はこちらとくっついてしまい、一体化してしまうので、こちらの思う通りに動かせることになるので、相手は自由がなくなり、殺されたことになる。

しかし合気道の面白さは、殺しておいて活かすのである。

相手を殺していれば、後は相手を自由にすることができるようになるから、本当に殺すことはない。殺していれば更に投げたり、痛めたりする必要もない。後は相手の好きなようにさせればいい。そうすると大抵の場合、自ら倒れたいくなるので、こちらが無理に倒さなくともひとりで倒れてくれることになる。これが相手を自由にさせるという、武道的な活かすとうことであろう。

従って、殺さなければ活かすことは出来ない。相手に技を掛けても、殺せずに相手がまだ生きていれば、なんとか殺そうと無理にするので、本当に殺してしまうことになる、死んだり、怪我をさせてしまうのである。

相手を活かすためには、まず殺さなければならない。殺すから活かせるわけである。それが武道の厳しさである。

【第232回】 円と円の内外

合気道の動きの基本は、円であるといえるだろう。正確には、螺旋という円というのだろう。つまり、直線的ではないということである。

従って、技を掛ける時は、直線的ではなく円で掛けなければならない。円と直線の

違いは、中心があるかどうかであろう。だから、一見直線的に見えても、中心があって、その中心から遠心力・求心力が出ていれば円である。

ここで円というのは、まん丸の○ということではない。すべての技でまん丸く完全に○く動いたのでは技にならないだろう。トルコのスーフィー（旋回舞踊）になってしまう。まん丸の一部分ということである。たとえ、○の36分の1の10度の角度の円（周）であっても円と考える。

合気道の技を遣うにあたっては、この円が重要である。円には円内、円外、そして円周がある。また自分に円の中心があると同時に、相手も円の中心をもっている。円内は自分の領域であり、円外は相手の領域となる。

従って、自分の領域で技を掛けないと相手を制することは出来ないだけでなく、相手に制されてしまうことになる。

典型的な例として、片手取り四方投げで、はじめの一步目で相手にぶつかってうまくいかないことが多いようだが、自分の円外、相手の円内でやろうとするからうまくいかないのである。相手の円というのは、相手の手を掴んでいる側の肩が中心になり、その腕が半径となる円である。その中に入っていくのだから自殺行為というしかないだろう。

自分の円は自分の肩や腰が中心になり、その腕（正確には、円の中心から相手と接している接点まで）が半径となるものである。第一歩目で相手の円内に入ってしまうのは、自分の円がつくれず直線的に手足を進めて、相手の円内に入ってしまうからである。肩や腰を中心にした自分の円周上で手を遣わなければならない。

しかし、相手も円をもっているのだから、相手もこちらの円内に入るのは危険と感じ、こちらの円内には素直には入ってくれない。無理にこちらの円内に入れようとすれば、必ず抵抗してくる。

相手に抵抗させずにこちらの円内に入れるには、まずお互いの共通の円の接線上を動くことである。接線であるから、相手の円でもあるので、相手の抵抗はないし、こちらの円でもあるので、危険はない。

まずは、この接線で相手と結び一体化して動くのである。それから、自分の円内に導くのである。相手がこちらの円内に入れば、相手の円外となるから、相手を自分の分身として取りこみ、自由自在にすることができるのである。

開祖は、円内と円外について、「指一本をもって相手を動けなくすることは、誰にでもよく出来るはずである。人間の力というものは、その者を中心として五体の届

く円を描く、その円内のみが力のおよぶ範囲であり、領域である。いかに腕力が自慢の者であっても、己れのその円の範囲外には力がおよばず、無力になってしまうものである。」（『合気真髓』）」とされている。

手が自分の円の外に出てしまうのは、中心がなかったり、中心と結んでいない手を遣っているからである。手だけ動かせば、中心がないので円にならず、ちぐはぐな動きとなる。

肩や腰腹などが中心になって、腰腹と結んだ手を遣えば円の動きになり、手は自分の円外に出にくくなるはずである。手を振り回したり、手捌きは駄目と戒められる理由は、ここにもあるのだろう。

技が上手く掛からない場合、円を考えてみたらどうだろうか。

【第233回】 矛盾と相反

合気道は単調に見えるかもしれないが、一本調子ではなく、複雑なものである。矛盾であり、二律背反で、相反し合ったものともいうことができるだろう。

まず、技からして表と裏があり、表と裏でセットになっているから、表も裏も出来なければならない。技のかけ方、体の遣い方も、単純で一本調子ではうまくかからない。手足を陰陽で交互に遣っていかなければならないし、遠心力と求心力の両方を兼ね備えた力を出して遣わなければならない。力を出すだけではだめで、出すときにも引く力を兼ね備えていなければ、相手を逃がし、相手と一体となれず駄目である。

稽古の方法も、初心者と上級者（高段者）では違ってくる。初心者は稽古を一日でも多くやれば、それだけ上手くなる。この段階での上手とは、受身がとれるようになり、そして、技がなぞれるようになることである。

上級者になると、初心者のときと同じように、ただ稽古を続けるだけでは行き詰ってしまう。この段階からは技を練磨しなければならない。しかし、初心者の時とちがい、技を人は教えてくれないし、教え切れない。今までの稽古の仕方を切り替えて、自分で探求していくしかない。

上級者（高段者）の稽古法は初心者の時の稽古の延長上にあるのではなく、異質の別次元のものでなければならないはずである。稽古法でも一本調子ではなく、ある時点から稽古を方法を変えていかなければならないのである。

力についても矛盾することがいわれる。合気道は力がいらないと言われてたりするが、もちろん力はあった方がいい。力があって、それをなるべく遣わないようにするのが技であり、あっても遣わないのが合気道である。だから、技がなければ、力を遣わなければならない。技を身につけるのは容易ではないが、力をつけるのは誰でも簡単にできるのだから、簡単なものからやればよい。力をつけることである。しかし、力をつけることは大事であるが、力に頼っては駄目なのである。

合気道の稽古は、相手を倒したり、抑えたりするのが目的ではないが、技を掛けたら、相手は倒れていなければならない。倒れていなければ、技は効いていないことになるから、未熟か失敗ということになる。矛盾である。この合気道における公案の答えは、相手が自ら倒れるように導くことである。

おもしろい小説や映画、感動する歌舞伎などは、悪人がいるから面白いのである。善人だけでは、気の抜けたサイダーみたいで味がない。一面だけでは薄っぺらいものになってしまい、味も、美しさも、感動もない。

合気道の技でも、一面的で単純な技（動作）では、力も出ないし、美しくもないし、相手を納得することもできないので、技は上手く掛からないことになる。技には、陰と陽、遠心力と求心力、出す引く、強弱、上下、左右等の相反する要素が含まれていなければならない。

しかし、その相反するもの、例えば、遠心力と求心力が全く均衡していたのでは、力はゼロになってしまい、何の働きもないことになる。台風のことを考えてみるとよい。どんなに強力な遠心力と求心力が働いていても、この二つの力が均衡しているので、力がゼロとなり、青空が見え、無風状態の目になるのである。



台風の目

この台風の目を少し離れると、膨大な力（エネルギー）が働く。それも、目に近ければ近いほど強力である。

遠心力と求心力に的を絞れば、技をかける場合は、遠心力と求心力を有していなければならないが、遠心力と求心力を全く均衡状態にするのではなく、どちらか一方を少し強く遣えばよいということになるだろう。

もちろん、遠心力と求心力だけが相反する力ではない。出す力と引く力、左右への絞り、吸収力と発力、押す力と引く力、反転力と反反転力、上がる力と下がる力等等、恐らく無数にあるはずである。

大事なことは、技には相反するものが含まれていなければならないことである。

【第234回】 円転の理

合気道の技は、宇宙の営み、宇宙の法則、宇宙の条理を形にしたものであるといわれる。宇宙は時間的、空間的に無限と思われるので、その営みや法則や条理も無限近くあるはずであるが、その中の一つに「円転の理」というのがあるだろう。なぜならば、合気道の技はこの「円転の理」なくしては機能しないからである。

合気道の技は直線的ではない。円である。たとえ直線的に見えても、円の一部のはずである。何故ならば、技を掛ける部位（例えば、手や肩や胸）は腰腹などの中心と結んでいるので、必ずその部位と中心の腰腹を半径とする円の軌跡になっているからである。

合気道の技は、まず自分の円と相手の円の共通する円周を経て、自分の円に取りこんでしまうのである。しかし、技が上手くかかるためにはその円だけでは不十分で、もう一つの円が必要である。

いふなれば、前者の円を「平面の円」または「横の円」とすれば、もう一つの円を「垂直の円」または「縦の円」といえよう。ここでの「縦」「垂直」とは、手を伸ばした時の指先方向をいい、「横」「水平」とは「縦」「垂直」と十字に交わる直角方向を言っている。

「縦の円」は、指、手首、肘、肩、胸鎖関節を中心にしてできるもので、ここを中心にくるくる回すことができる。

「横の円」は、四方投げや入り身投げなどで、一般に円く腕で捌く円である。この円で捌くのも簡単ではないが、もっと難しいのは「縦の円」である。

「横の円」は、主に相手を誘導するものだが、「縦の円」は相手をくっつけたり、崩したり、相手の力を抜く働きをするといえよう。

また、「縦の円」のもう一つの特徴は、十字々々と反わる螺旋であるということである。従って、この「縦の円」が上手くできなければ、相手をくっつけたり、崩したり、相手の力を抜くことはできないことになる。

合気道の技は、この「横の円」の軌道上を、「縦の円」が十字々々と反転していく

ということではないだろうか。とすると、これはまるで太陽の周りを公転し、かつ自転している地球でもあろう。ということは、この「円転の理」は宇宙の法則に合致していることになるだろう。

【第235回】 極意と道歌

習い事をすれば、誰でもその最も深遠なところにある事柄に到達したいと思い、稽古を続けているはずである。それを、極意を会得するとか、奥義を極めるというのだろう。

極意と奥義はほぼ同じ意味であるようで、意味は「技芸などで、最も深遠で到達し難い事柄」だという。簡単にいえば、「そのあるべき姿」ということになるのだろう。

合気道にも、目指すべき極意はある。開祖は合気道の極意を、「己の邪気をはらい、己を宇宙の動きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある。合気道を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、『我はすなわち宇宙』なのである。」と言われている。

このように、開祖は合気道の極意は示されているわけだ。また、その極意を会得するための合気の技もつくられた。合気の技を練磨すれば、極意に達することができるということなのである。

しかし、現実には極意に達するのは容易ではない。開祖は、どうすれば極意に達することができるのか、どのように技の練磨をすればいいかなどのご説明は、一部の弟子に与えた口伝を除けば、具体的にはほとんど残されていないといえるだろう。

だが、極意に達するための道しるべとなるものがある。それは、開祖が残された道歌である。道歌はそのあるべき姿も表しているが、道しるべも示している。

開祖は100以上の素晴らしい道歌を残されている。独善と偏見で、極意の境地と道しるべを歌っていると思われる歌のうちの、自分の好きな歌をいくつか挙げてみると：

＜極意の境地＞

- 合気とは 解けばむつかし道なれど ありのままなる天のめぐりに
- ありがたや 伊都とみづとの合気十 ををしく進め瑞の御声に
- 天地に 気結びなして中に立ち 心構えは山彦の道

- 武産は 御親の火水（いき）に合気して その営は岐美の神業

<極意への道しるべ>

- 又しても 行詰るたびに思ふかな いづとみづとの有難き道
- 右手をば 陽にあらわし左手は 陰にかえして敵をみちびけ
- 合気とは 筆や口にはつくされず 言ふれせずに悟り行へ
- 合気とは 万和合の力なり たゆまずみがけ道の人々
- 真空と 空のむすびのなかりせば 合気の道は知るよしもなし
- 教には 打突拍子さとか聞け 極意のけいこ表なりけり

このような道歌には、合気道の極意とそこに至る道しるべがあるのではないだろうか。われわれ稽古人にしてみれば、道歌の内容を文章で残して頂いたほうが理解しやすかったような気がするが、今や遅しである。しかしながら、やはり道歌のままの方がいいのかも知れない。なぜなら、開祖は道歌でしか合気道の極意を表現できなかったのかもしれないし、またその方が微妙な表現ができるとお考えになられたのではないかと思うからである。

文章というものは、主に理性を司る左脳を使って論理的に表現したり理解するものであるが、道歌は絵や音楽などと同じように、右脳で直感的に感じるものであろう。道歌は頭で理解するというものではなく、心で感じるものであるだろうから、イメージをいくらでも大きく深く、宇宙まで広げていくことができるはずである。

合気道の極意は、宇宙と一体化するためのものであろうから、ごたごた頭でこねくり回すのではなく、素直に体で感じていくほかないだろう。だから、道歌なのだと考える。

【第236回】 宇宙と一体化するために

合気道の修行の目的は、宇宙との一体化であると開祖は言われている。大それた事であるが、開祖が言われているのだから、それを信じて精進していくしかない。開祖の言われることが信じられないのなら、合気道をやっていく意味がないだろう。

しかし、やるにしてもどうすればいいのか、皆目見当がつかないのが実情である。念仏のように「宇宙との一体化」と唱えていても、一体化できるものでもないだろうし、そうかといって稽古をただ続ければいいのかということでもないはずだ。そこには、何か宇宙との一体化への道があるはずである。

稽古事には目標があり、そのためにやるべきことがある。合気道も宇宙との一体化という目標があり、そのためにやるべきことがある。一つではないだろう。沢山あ

るはずである。それを段階的にひとつひとつ自得していかなければならないのだろう。

宇宙との一体化でやらなければならない第一段階は、技の練磨において、自分の技が理にかなっているかいないかを感じて、技を練磨していくことであると考ええる。合気道の技は宇宙の営みを形にしたものであるといわれるのだから、本当に理に適っているとしたら、自らも宇宙の営みをするようになる。自然で無駄が無い、自分にも相手にも心地よい感じがするはずである。しかしこれは、はじめは容易ではないだろう。どうしても相手を倒そうとか、技を極めようなどと思ってしまい、自分の技を感じる余裕がないからである。また、肩が貫けていなければ、手先と腰腹が結びつかず、相手の力や自分の力や微妙な体の反応を腰腹で感じられないからである。それに初心者の方は、技には理があることに気がつかないし、理合ということがまだわからないからである。

本来、人は理に適うように生きるべく、また生きたいとプログラムされているのではないだろうか。理に適えば美しいし、正しいし、強いし、自分に対しても、また、相手に対しても説得力がある。理に適わなければその逆になるわけで、人は無意識のうちに、より美しく、正しく、強く、の方向に向かっているはずである。人類を歴史的に見ても、一時的に逆と思われる方向に行ってしまったこともあるだろうが、大筋では理合で進んでいるといえるのではないだろうか。

技の練磨においても、無意識のうちにその方向に進もうとしているはずである。理に適った動きができ、技が遣えれば誰でも嬉しくなるし、どんなに派手に相手が跳んでも理に適っていなかったり、その理を感じられなければ本当の満足はないはずである。

感じるためには、まず相手との接点に意識を集中することである。ただし、接点に集中すると同時に、相手の全体を感じなければならない。そうでないと、その隙に相手に攻撃されたり、手を出されたりするかも知れない。感じて、感じないという二律背反である。

次に、接点や相手を目で見ないで感じることである。目で見てしまうと、感じが半減するか、感じられなくなってしまうものだ。これも、相手を全然見ないわけにはいかないから、見て見ないという二律背反である。

感じることは、言うならば「ひびき」を感じることである。自分の力の作用や効果、相手からの抗力、相手の動きなどを、見ないで感じるのである。これができれば、今度は相手と直接接しなくとも、相手を感じるができるようになり、そして最後には、宇宙を感じるができるようになるのではないだろうか。これを、「山彦の道」というのではないだろうか。

まずは、技の練磨を通して、自分の技が理に適っているのかいないのか、より深い理合を探求して、それを自分の体で感じていくようにすれば、相手を感じ、次に自分の周囲を感じ、そしていつの日か宇宙を感じ、宇宙と一体化できるようになるのではないだろうか。希望を持ち、自分を信じてやっていく他はない。

【第237回】 山彦（やまびこ）の道

宇宙に存在するすべてのものは「波動」をもっているという。「波動」とは、辞書を見ると、「何らかの物理量の周期的変化が空間方向に伝播する現象」をいうのだそう。

なぜ波動ができるかという、物質の最小単位である素粒子は、粒子であると同時に波動としての性質を持った超ミクロの弦でもあり、そして超ミクロの弦はいろいろに振動しており、それぞれが固有の波動を出しているからだという。従って、われわれはそれらの波動を耳で聞いたり、目で見たりして識別して生きていることになる。つまり、波動のおかげで生きていることにもなるわけである。

合気の道は「山彦の道」ともいわれる。開祖が「この山彦の道がわかれば合気は卒業であります。」といわれているからである。

開祖の道歌には、この山彦の道が詠われている。

- 。「天地に 氣むすびなして中に立ち 心がまえは 山彦の道」
- 。「日地月 合気になりし橋の上 大海原は 山彦の道」

この境地に立てれば、山彦の道が分かり、宇宙と一体化することになり、合気がわかり、そして合気を卒業ということになるということなのだろう。しかし、そう簡単ではなさそうである。山彦の道をわかる可能性はあるだろうが、それが必ずわかるという保証を開祖はされていないのである。われわれ後人は、その道を模索しながら、その道を踏み外さないよう、一步一步着実に進んでいくしかないのだろう。

山彦の道の山彦は、現代物理学においては「波動」ということだろう。また山彦であるから「共鳴」現象があるはずである。そうだとすると、はじめは身近なものから、そしてだんだんと自分から遠く離れたものとも共鳴し、最終的には宇宙との共鳴ということが、山彦の道ではないのだろうか。

合気道は技の練磨を通して山彦の道をいくわけだが、そこには幾つかの通るべき段階があるように思う。

第一の段階は、相対稽古の相手との共鳴である。相手と接して自分と相手の波動を

共鳴する。これを合気するとか結ぶというのだろう。このためには、前回の『第236回 宇宙と一体化するために』に書いたように、相手を目で見ないで、感じる事が大事になる。

第二段階は、相对稽古の相手と直接接しなくとも、空気の媒体を通して相手の波動と共鳴してしまい、危険を感じたり、相手の心を読んだりする段階であろう。気配を感じるとか、殺気を感じるなどはこの非接触での波動を感じる事だろう。

第三段階は、道場以外での山野や屋外でも、鳥獣草木などの波動を感じ、共鳴するようになる段階である。開祖が黄金体になって、武道とは愛なりと悟られたとき、鳥のささやきの意味が理解できたというのは、鳥との波動の共鳴ということができるのではないだろうか。

第四段階は、大地、太陽、月などの無生物からの波動を感じ、共鳴するようになる段階である。開祖が朝晩、祈っておられたのはこのためではなかったかと考える。

第五段階は、宇宙の波動を感じ、宇宙にあるすべてのものに共鳴できるようになる段階で、これで山彦の道がわかり、合気を卒業ということになるのではないだろうか。開祖は、宇宙がその腹中にあり、「我は即ち宇宙」といわれていたが、宇宙の波動に共鳴されていたということではないだろうか。

開祖は山彦の道を卒業されたわけであるが、開祖の摩訶不思議な話やエピソードから、そこに至るまでには、これらの段階でその波動を感じ、共鳴を経験されたのだろうと考える。

山彦の道がわかり、合気道を卒業するには、開祖が進まれたと思われる、この五段階を一つ一つ進んでいくしかないのではないかと考えている。

【第238回】 霊体の統一

合気道では技の練磨をするため、相对稽古で相手に技を掛けたり、受けを取って精進していく。相手に技を掛けて、その技がうまく極まればうれしいので、さらにうまく掛かるように稽古していくわけである。

はじめのうちは、稽古を続け、稽古の年数が増えれば技遣いが自然にうまくなると思うものであるが、30年、40年と稽古してくると、そうでもないようだと考えるようになる。確かに稽古を50年、60年と長く続けている方には技が上手で、強い方もいるが、長く稽古をされているわりに、自分を含めてそうでもない方もい

るからである。それ故、技が上手になるためには、稽古の年数という稽古量だけでなく、稽古のやり方や内容である質も大切ではないかと考える。

技をうまく極めるためには、まず体が大事であろう。どれだけ理想的な合気の体ができているか、ということになる。理想的な体とは、宇宙が宇宙生成化育のために創造したといわれる、人間として「そうあるべき」体である。

そして、またその体が、宇宙の営みや条理に則って機能するようにならなければならない。蝶やトンボや鳥が飛べるのは、「そうあるべき」体であり、そして宇宙の意志に逆らわずに自然に動いているからといえよう。

しかし、体（肉体）だけでは、技を極めることも動くこともできない。パソコンや携帯もそれを操作するソフトがなければならぬ。人の場合は、心（精神）である。それでは、どんな心ならばうまい技が掛けられるのだろうか。例えば、どんな物にも屈しないという強い心（意志）、これでいいのかどうかを自らチェックする心、探求する心（探究心）、相手を感じる心、宇宙の法則を感じる心、相手や大自然を思いやる心、などではないだろうか。

もちろん、心だけで人に技を掛けて、技を極めることはできない。心と体が一体となってはじめて偉大な力がでて、うまく技を極めることができるのである。あとは肉体と心の統一してできた偉大な力を、稽古でさらに練り磨いていけばいいのである。これが合気道の稽古であると、開祖は言われている。つまり、「霊体の統一ができて偉大な力をなおさらに練り固め磨きあげていくのが合気の稽古である。」

しかし、心と体を統一しようと霊体の稽古をしてみても、その統一はそうやさしいものではないということが分かる。はじめはどうしても体が主体となり、心はその後ろに隠れてしまうものだ。

特に、力があつたり、体力のある人は、体に頼って技を掛ける稽古をしがちで、体が主で心（霊）が従となってしまう。子供たちなどはその典型で、ほとんどを体に引きずられて体でやるといっていいだろう。もちろん子供や初心者は体を主にしてやるのが自然であろうし、それでいい。子供たちや初心者はそれによって体ができてくるし、それに子供たちが体をあまり遣わず、心主体で技を遣うなどは、不自然で不似合いであろう。

はじめは体と心（霊体）が統一して遣えなくとも、体は体で練磨できるだろうし、心も心として磨きあげていけるはずである。しかし、上手な技を遣いたいなら、ある段階からこの霊体統一の稽古をしなければならないだろう。それまで練り上げてきた体と心を、統一して遣うのである。

この異質で別モノと一緒に遣うためには、その二つを結ぶ媒体が必要である。それは、「呼吸」であると考え。この呼吸を、開祖は気合いとも声とも言われているのではない。開祖は「声と肉体と心の統一ができてはじめて技が成り立つのである」といわれているので、体と心と呼吸（声）の統一ができなければ技ができないということになろう。

呼吸によって霊体の統一をはかり、偉大な力を得、それをさらに練磨していく稽古をしていきたいものである。

【第239回】 宇宙と合気道

合気道とは、宇宙の営みや宇宙の条理を身につけ、宇宙と一体化する道であるといわれている。合気道の技は宇宙の法則に則ったものであり、その技を練磨することによって宇宙と一体化していくと教わっている。

合気道をはじめた頃は、宇宙の営みとか宇宙の条理どころか、宇宙そのものへの関心もあまりなかった。ましてや、合気道の稽古は宇宙との一体化を目指すものなどとはピンとこなくて、ぜんぜん理解できなかったものだ。

合気道の稽古を漫然とではあるが40年、50年と続けて来ると、合気道と宇宙に関係がある、というより、宇宙がわからなければ合気道の上達はないのではないだろうか考えるようになってきた。

現代の科学は相当進歩していて、いろいろな事を解明できるようになってきたが、まだまだ解明できていないものがあるようだ。いや、解明できているものはほんの僅かで、わからないことが大部分であるらしいし、そう思う。その典型的なものとして、宇宙のこと、小宇宙である人の身体のこと、何もないところからどうしてモノが創造されたのか、人類はどこからきてどこへいくのか、何のために生まれ死んでいくのか等など、肝心なこともわかっていないのである。

合気道は宇宙を知り、小宇宙の人体を知る道であるとも言えるだろう。合気道は、技の練磨を通してそれを身につけていくのである。だから、稽古はそれが身につくように練磨していかなければならないことになるだろう。

そのためには、まず合気道は宇宙との一体化を目標として修練するものであるということを、信じなければならない。一体化するとは、共鳴するということでもある。合気道ではこれを「山彦」といい、宇宙との山彦を最終的の目標にしているようで、開祖はこれを山彦の道といっている。

合気道は技の練磨を通して、宇宙との共鳴への道を進むのであるが、そこにたどり着くためには、たどるべくいくつかの段階があるのだろう。接した相対稽古人の響きを感じることに由来する共鳴、接しなくとも感じる共鳴、自然の響きを感じる共鳴、そして大自然の響きを感じる共鳴である。まずは、稽古相手の響きを感じて、相手と共鳴することから始めなければならないだろう。

また、合気道の技は宇宙の営み、宇宙の条理に則ったものとしてできているわけだから、宇宙の法則をもっていなければならない。技に宇宙の法則を取り入れ、また技の練磨から宇宙の法則を見つけ、それをさらに練り固めていくのが合気道の練磨ということになるだろう。

例えば、宇宙、または大自然は、すべて陰陽で構成されている。陰陽表裏一体になっているわけで、合気道の技もこの要素と働きがなければならないことになる。また、宇宙に創造されたものは、縦と横の十字から生まれたといわれている。「古事記」のイザナギとイザナミも、魂魄の縦横十字から円になり螺旋となりモノを生んだというし、遺伝子のDNAは2本のヒモが螺旋状に絡み合っている。合気道でも、力を生む技は十字で遣い、円であり螺旋で遣わなければならないことになるだろう。

合気道は宇宙との一体化への道である。宇宙、つまり宇宙の営み、宇宙の条理を発見し、それを技に取り入れていく稽古をしていけば、その目標に近づけることができるだろう。

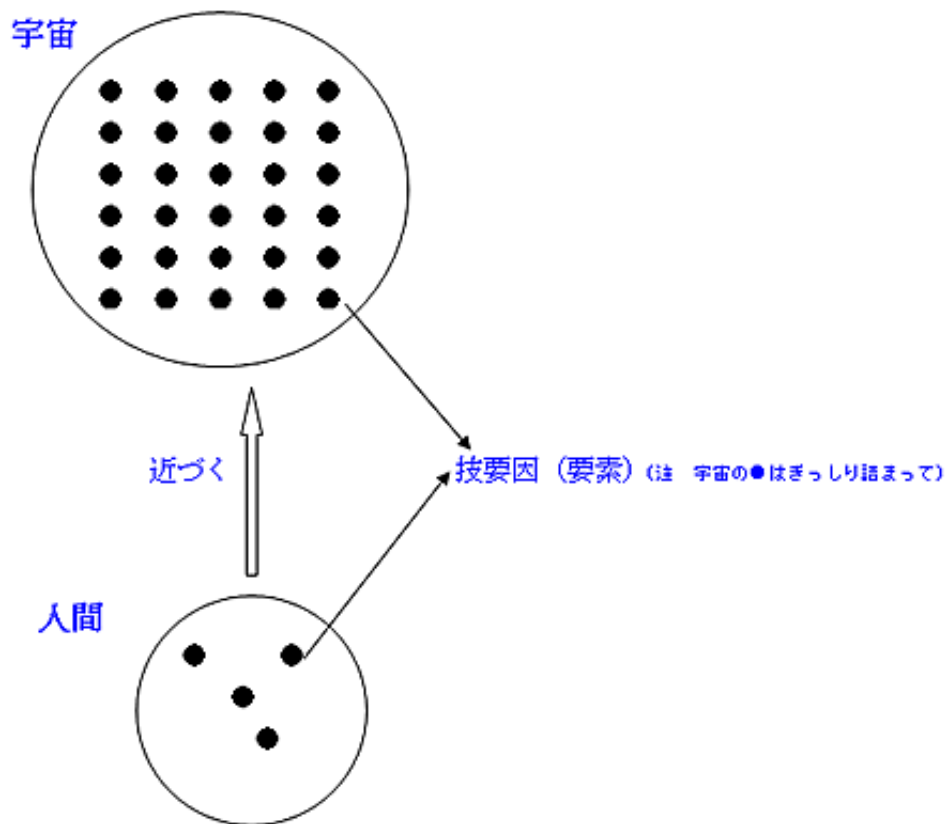
その道にのって技の練磨をしていくと、何かが引っぱってくれたり、アドバイスしてくれたり、助けてくれるように感じるものが度々あるようになる。自分はなんでも一人でやってきた、自分はなんでもできる、などと思っていたが、どうも傲慢だったようだ。人は何かに支えられ、何かに生かされているのかも知れない。それが、宇宙なのかも知れない。

【第240回】 技と宇宙

合気道は技の練磨を通して精進し、宇宙と一体化する道であると教わっている。また、合気道の技は宇宙の営みを形にしたものであり、宇宙の条理、宇宙の法則に則っているといわれる。宇宙は137億年という歴史と無限の空間をもつ想像もできない規模を有しているから、この宇宙の営みも想像を超えるものであろう。

合気道的に宇宙を考えてみると、宇宙は宇宙の営みでつまっているとも言えるだろう。

う。つまり、宇宙は技でつまっているわけである。ここでの技とは、いわゆる私が言うところの技要因であり技要素である。陰陽、十字、螺旋、引力などなどである。宇宙は限界がないので無限であるから、この技要因も無限にあることになる。無数の技要因がぎっしりつまっているのが宇宙ということもできるだろう。（図参照）



合気道は、技要因（要素）を会得していく道である。心身に技要因を入れていくというより、その技要因に心身をはめ込んでいくのである。無限にあると思われる技要因に、自分の心体をはめ込んでいくのである。具体的には技要因の形にはめ込んでいくことになるだろう。

技要因に心身をはめ込まれていけばいくほど、その人は宇宙に近づくことになるはずである。心身が技要因にひとつでもはめ込まれれば、その人はひとつの技要因の分だけ宇宙に近づいたことになる。だから、少しでも多くの技要因に心身をはめ込めば、それだけ宇宙に近づくことになるはずだ。合気道の稽古の最終段階はこれではなかろうか。

開祖が「われは宇宙である」といわれたのは、宇宙にある技要因が自分の心身の中にもあり、宇宙とわれは同じ技要因を有し、同じであるという意味ではないかと考える。「われは宇宙なり」といつの日か言えるようになりたいものである。

【第241回】 技と人格

合気道とは何かという問いに対する回答はいくつもあるが、そのひとつを開祖は「気育、知育、徳育、常識、（後に体育を追加）」の涵養、つまり「真善美」の探求と言われていた。

多くの人は若い時に、「人生とは何か」を考えたであろう。これも合気道と同様に多くの答えがあるようだが、私が学生時代にいろいろな本を読んだり、人の話から得たこととして、「人生とは真善美の探求」ではなかろうかという答であった。とりあえずは自分なりに解答を見つけたわけである。

この少し後で、何か体を動かすことをしたいと思った。それまではハイジャンプ（走り高跳び）や軟式テニスなどに精を出していたが、スポーツでは自分自身の能力や活動年齢に限界があると感じていたので、一生続けてできるものを探すことにした。それは日本伝来の武道であろうと考えたが、偶然にも合気道に出会いそれをはじめることになった。

合気道を始めて間もなく、ハワイから戻られた開祖のお話を聞くことになるが、その時、開祖は「合気道とは真善美の探求である」と言われたのである。これは、まさしく前述の自分が得た人生観と同じであった。ということで、合気道と自分の人生の目標は真善美の探究になり、合気道が自分の人生観と合体したことになったわけである。

開祖が言われた真善美だが、これまではただ漠然と捉えていたように思う。最近、真善美の探究には、もう少し深い意味があるのではないかと考えるようになった。合気道は技の練磨を通して精進していくわけであるが、正面打ち一教でも片手取り四方投げでも、同じ技をやっているはずなのに、やる人によって少しずつ違うし、自分自身でも去年と今年は違っているのである。稽古を続ければ多少はうまくなるはずで、その前と違って不思議はないだろうが、どうもそれだけではないようだ。

その違いは「人格」に関係があるといえるようである。人格者といわれるような人はそのような技を遣うし、未熟な人格の人はそれ相応の技しか使えない。また、人格が変われば技も変わるように思えるからである。そこで人格とは何かということになるわけだが、合気道的に解釈すれば、これが開祖がいわれている「真善美」ということになるのではないか。

開祖が、合気道は「真善美の探求」であるといわれたわけだが、合気道は技の練磨であるということと併せて考えれば、技イコール真善美ということになるだろう。つまり、合気道は技を練磨し、真善美を探求するのであり、技を精進するために

は、真善美を精進しなければならないことになる。

簡単に言えば、技がうまくなるためには、真善美を磨いて、人格者にならないといけないということである。従って、合気道の技の練磨も大事であるが、真善美を磨くことも大事であり、真や善や美の追究が必要になる。人の話を聞いたり、本を読んだり、絵を見たり、音楽を聞いたり、自然に接したりすることが必要になってくる。というより、世の中にあるすべてのものから、真善美を学んでいかなければならない、ということであろう。

自分の不完全さを悟り、周りのものからいろいろ教えてもらい、少しでも真善美を身に取り入れていき、人格を磨く努力をしていけば、技も変わっていくはずである。人格を高めて技を高め、技を高めて人格を高める。これが真善美の探求をする合気道ということではなかろうか。

【第242回】 円と合気技

合気技は円である、といわれる。以前に書いたように、合気技は「縦の円」と「横の円」との組み合わせでできているはずである。また、「縦の円」と「横の円」は関節の数だけあるだろうから、これらの円の組み合わせはけっこう多く複雑である。開祖は、合気技は「円の動きのめぐり合わせ」である、と言われていた。（合気道新聞『円の本義』） この円の動きの組み合わせで技ができていることもあるが、円には大事なことがあるようである。

円とは、分かっているようで、よくよく考えてみると分かりにくいものである。目に見えるものもあるが、見えないものもあるようだし、合気道での円はまたちょっと違った概念があるようだからである。

合気道の稽古中に、円を説明するのに紙に○を書いて、これが円ですなどと説明しなくとも、円とは○であると誰でもわかるものだが、合気道での円は、日常的な意味での円とはいささか異なるようである。

まず合気道での円とは十字ということであろう。以前書いたように、手先でも、例えば手の平を縦（垂直）と横（水平）に反（かえ）していけば円になる。完全に○でなくて、十字に反しての○であり、多くの場合はその○の一部であったり、一見すると直線に見えるような○である。これが⊕であろう。

次に、紙に書いた円（○）は有限であるが、合気道の円は無限と考えなければならぬようだ。無限であるため、何も制限がないから自由自在ということになる。そ

うすると、円の動きの技も自由自在ということになるので、技は自由に無制限にできようになるということのも理解できる。

また、円の動きのめぐり合わせによる技の動きを体で感応すれば、そこから技を生み出す仕組みの要素が生じてくるという。これは、私がいう技要因とか技要素というものであるはずであり、技の構成要因ということであろう。つまり、縦横の円の動きの組み合わせがうまくできてはじめて、技要因があらわれてくるということである。

最後に、円は宇宙の万物を結びつけ、生成化育するという。従って、相対する相手も円によって自分の円に取り込み、吸収してしまうことができるのである。例えば、両手取りからの小手返し（内回り）を掛けるとき、まず、相手の肩を中心にした、相手と自分と共通する円で相手の手を導き、そして相手の手を手鏡の要領で取った時点から、今度は自分の腰腹を支点とした自分の円に相手を取り込んでしまう。

どの技を掛ける場合にも、初め自分と相手の共通の円を描くように動き、そして自分の円に相手を吸収するのが、合気道の鉄則であると思う。つまり、円ではじまり、円で収めるのである。

この他にも、合気道では息を円くつかうとか、心を円く体三面にするなど、息も心も円く遣わなければならないとされているし、円は非常に重要であるようだ。

参考文献 合気道新聞第4号『円の本義』

【第243回】 技の技

合気道は技の練磨をしながら精進していくが、練磨する技とは何かを把握していないと、練磨もできないし、合気道の精進もないことになろう。技とは何か、開祖は技をどのように捉えられていたのかを研究してみたいと思う。

入門したころから、技とは「正面打ち一教」や「片手取り四方投げ」であると教えられ、それに何の疑問も持たないでやっていた。技を少しでも沢山覚え、技が少しでも効くように稽古し、技と心身を鍛練してきた。長年稽古を続ければ、技も覚え、心身も鍛えられることになる。

しかし、時間が経つと、体力があったり、力の強い相手には、技が通じないということが分かってくる。技というのは、体力や腕力を制することができるテクニック

（術）であるはずなのに、それまで稽古をしてきた技では、相手を制することができないのである。

そうすると、何とか相手を倒そうと力んだり、力ずくになったりするが、これまでの技が通じなくなる。そうすると、力をつければよいと思って筋トレをするとか、また人によっては、合気道の技は力がなければ駄目だと思ったりしてしまう。人によっては、それで合気道を止めていくこともあるだろう。修練してきたはずの技が効かないというのは、何か訳があるはずである。

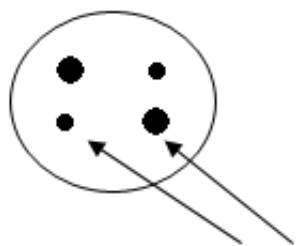
それはここまでの技は技の型（形）を覚え、その型をなぞっているだけだったからだともいえるだろう。型だけでは、相手を制することはできないだろう。技には、もっと奥深いものであるはずである。技の型なら2，3年あれば誰でも覚えることができる。合気道の修行には終わりが無いと言われるのだから、そんな2，3年で身に着くことなどを目的にやっているはずがない。練磨を続けるべき技は、技の型とは違うはずである。

以前にも書いたが、練磨すべき技は技を構成する技要素（要因）であると考え。合気道の技は宇宙の営み、宇宙の条理を形に表したものであるといわれるから、合気道の技、例えば、「片手取り四方投げ」は宇宙の営みである多くの技要素で構成されているということになる。技要素には、陰陽、むすび、螺旋、中心、十字、干満等などがあるが、ひとつの技には無数の技要素があるはずである。

技は、技要素、それも無数の技要素で構成されていといえよう。技の練磨とは、技要素を見つけて、身につけ、そして技（技の型）に取り入れ、自分の技の完成を図っていくことではないかと考える。

私が言うこの「技要素（要因）」は、開祖が言われている「技を生み出す仕組みの要素」（合気道新聞『円の本義』）であろうと思う。つまり、技要素は技の技ということになろう。

技



技の技：技要素＝技を生み出す仕組みの要素

【第244回】 神業を生ずる

合気道は技の練磨を通して、宇宙と一体化すべく精進するものであると教わっている。そして以前にも書いているように、「技」とは技の型だけではなく、宇宙の法則や条理に則った技要素であり、開祖がいわれているところの「技を生み出す仕組みの要素」ということになるだろう。つまり、「技」は多くの技要素で構成されているということになる。

技要素は宇宙の営みであるわけだから、そのひとつひとつの技要素は宇宙の営みと一致していることになる。合気道は宇宙の営みを身につける道ということでもある。つまり合気の道は「宇宙の道」であるとも言われるのである。（『合気真髓』）

この宇宙の営みを開祖は神業といわれているようだ。そして合気の鍛錬は神業の鍛錬であるともいわれている。神業の鍛錬をし、それを実践していけば宇宙の力が加わり、宇宙そのものに一致するといわれるのである。（同上）

神業とは超人間的な技であり、業ということにもなる。人間を相手にしていたり、人間がつくったものを相手にしていたのでは、人間わざを超越した「神業」は身につかないはずである。

人間が考える技や術ではなく、天地の教えに則って鍛錬しなければ、「神技」にはなるかもしれないが「神業」にはならない。神様はテクニックや術などの小賢しいことなどやらないだろう。

神業は宇宙完成を目指し、生成化育するところの真理に満ちた働きの「業」であるはずである。

合気の道も真理の道であり、合気道の鍛錬は真理の鍛錬であり、真理の鍛錬によって神業が生じると、開祖は言われている。（同上） 真理とは、宇宙の営み、宇宙の法則、宇宙の条理ということだろう。

合気道の技の練磨では、「神業」を生じるように真理の鍛錬をしていかなければならないということになるだろう。

【第245回】 合気道と絶対

学生でヒマだった時期に、「絶対とはなにか」ということを考えていた。なぜな

ら、もし絶対というものがあれば、その絶対に照らし合わせれば、すべての物事のよし悪し、善悪が容易に判断できることになるので、自分の悩みも世の中の問題も簡単に解決することになると思ったからだ。

よく友人たちと人生についてとか、芸術など議論をして、自分の考えこそ絶対正しいと思うのだが、相手もそう思って主張してくるので、いつも議論は堂々巡りであった。そういう時に、なにか判断基準があればいいのにと考えた。

芸術作品の評価でも、裁判での判決でも、人間や物事の評価でも、そういうものがあればもっと容易に、そして正確に判断出来るのではないかと思ったりした。しかし結局、「絶対」を見つけることはできなかったわけだが、今もしつこく絶対探しを続けている。

西洋や諸外国では、「神」こそ絶対であるという。だから物事はこの絶対の神に照らし合わせて判断されることになる。キリスト教、イスラム教、ヒンズー教などの神を絶対としている国では、巨大な教会があるし、生活も神中心で動くことになる。

しかし、日本の場合は、神様も絶対の神様はおられず、八百万の神がおられるだけで、判断を仰ぐ神様は人によって、また場合によって変わってしまうという、絶対不在の国といえるようだ。

合気道では「絶対」ということは言われないうだが、あるといってもいいだろう。もしそういう芯がなければ、これだけ多くのひとが一つの方向に向かって稽古を続けることはできないはずであるから、なにか「絶対」なるものがあるはずである。

合気道で「絶対」があるとしたら、それは合気道だけに通用するものだけでなく、一般的な科学的な説明もつくだろうし、西洋の「神」という「絶対」と比較しても遜色ないものでなくてはならないはずである。

なによりも、合気道での「絶対」は、それが理解出来ないと合気道の理解も精進も難しいということになるはずだ。従って、それは最も川上にある「絶対」でなければならないだろう。

私は、開祖がよく言われていた「一元の元」こそが合気道の絶対といえるのではないかと考えている。「一元の元」とは、宇宙にまだ何もないところに忽然と現れたといわれるポチである。人類は宇宙のことをまだまだほとんどわかっていないが、何もないところから何かが出現して、生長し、ビッグバンで星が誕生し、地球ができ、生物が生まれ、人類が誕生し、そして今の自分に至っているわけで、この世に

存在するすべてのものはこのポチに繋がっているわけである。これは科学的にも解明されている。

開祖は、この一元の元を大神様といわれ、この神様を西洋では「神」（ゴット）と名付けていると、次のように言われている。「この神のみ働きを御名として、大国常立命、天之御中主之神、阿弥陀仏、ゴット、大極、天帝とか名をつけている」。一元の元は大神であり、西洋の「絶対」である神ということになる。

キリスト教では、宇宙ができる最初に「はじめに言葉ありき」と、音が宇宙のはじめであるというが、開祖も、「一元のスは生長してウ声と充たし、ウ声は遂にみたまを両分して物のもとと、霊のもとが生まれた。これが科学のはじまりなのです。」と、スという声から宇宙が創造されたといわれているのである。

一元の元、大神が合気道での「絶対」とすれば、合気道はこの「絶対」に照らし合わせて修行していかなければならないだろう。つまり、修行する合気道はこの一元の元の大神様と繋がっていなければならないし、その道を外れてはいけないことになる。

また、世界のすべての人は一元の下に繋がっている兄弟ということになるわけだから、稽古はもちろんのこと、道場外でも喧嘩や争いをなくし、少しでも和合するように導かなくてはならないということだろう。「合気道は世界を和合させ、人類を一元の下に一家たらしめる道である。」と開祖は言われている。

一元の元とは真理である。真理を神ということが出来るだろう。神は絶対とすれば、一元の元の大神様も「絶対」ということになる。これを信じて修行を続けるのが、今のところ最良の修行の道であろう。

【第246回】 武産合気（たけむすあいき）

開祖のお言葉によれば、合気道は時代に即して、というより、時代を先取りして時代を先導するものでなければならないので、どんどん変わっていかなければならないことになる。合気道は宇宙の法則を技にしているわけだが、その宇宙が生成化育しているから、合気道も変わらなければならないということであろう。この点は、技は変えてはいけないという他の武道や柔術などと、大きく異なっている。

合気道は、開祖がつくられたときから、どんどん考え方も技も変わってきている。それは、写真や映像を見ればよく分かるし、名称が変わってきたことでも分かる。

つまり、合気柔術、合気武術、合気武道、合気道と名称が変わってきたのである。この名称からでも分かるように、当初は柔術で敵を制する術を合気柔術や合気武術として、次には、柔剣道と同じように一般的な武道としての合気武道、そして、神ながらの道として合気道と、考え方や技が変わってきたのではないかと思う。

しかし、開祖は晩年、よく武産合気という言葉が使われていた。合気道もよくわからないのに、武産合気など更に分からないまま、ただ稽古を続けていた。

今でもよく分からないことであるが、ある時、稽古時間中に大先生が道場に入っ
こられて、例によってちょっと技を示されたが、その時「もし、ちょっとでも力が
はいったなら、わしは合気道をやめる」と言われたのである。一瞬、稽古人達はポ
カンとしてみんな顔を見合わせ、そして大先生（開祖）がどうされているのか、
力が入っているのかどうか、技を見ていたが、別段いつもと変わったことがないよ
うに思われた。力が入っていたのか、いなかったのか、稽古人の誰にもわからなか
った。もちろん大先生はその後も合気道を続けておられたから、そのとき力が入っ
ていなかったのだろう。

当時よく分らなかったのは、「合気道をやめる」というお言葉である。当時は、
大先生はもしかするともう道場にもお見えにならず、本当に合気道修行を引退され
るおつもりだろうかとも考えた。しかし、大先生はそんな悲痛なご様子ではなかつ
たし、その後も以前とお変わりなく我々にご指導して下さいました。それで、何か
違った意味で言われていたのではないかと思うようになったが、それがどういう意
味だったのかは、最近まで分らなかった。

今では、「合気道をやめる」はもしかすると「合気道はやめる」の聞き違いか、ま
たは大先生は「これまでの合気道はやめる」という意味で言われたのではないだろ
うかと考える。なぜなら、大先生はこの頃すでに次の段階に入られておられたはず
だからである。つまり、合気道のさらなる段階、いわゆる「武産合気」の次元であ
る。

合気道と武産合気はどこが違うかを、独善的に一言で言ってしまうと、合気道はま
だ人間を対象にし、武産合気は人ではなく宇宙を対象にしたものということができ
るのではないかと思う。その理由の一つは、私が入門した昭和37、8年頃まで
は、開祖は杖や剣を2、3人に押させて合気の力を示されていたが、その後（「合
気道はやめる」と言われた頃）は、杖や剣を持たれても、人に押させることはせず
に神楽を舞うようになられて、神様との交流を楽しまれているようであったからで
ある。

また開祖は、合気道の技は大東流柔術からのものではないともいわれていたが、こ
の時点で合気道はすでに武産の合気道になっていたと言えよう。武産合気とは、こ

とごとく神代からのみそぎの技を集めたものであり、宇宙の法則に則った宇宙と結んだ武道になっていたのである。

「「ウ」は浮にして縦をなし、「ハ」は橋にして横にして横をなし、二つ結んで十字、ウキハシで縦横をなす。その浮橋にたたなして合気を産み出す。これを武産合気といいます。」（合気真髓）

最早、これまでの相手を倒すとか制するという次元は超えて、合気道は次の次元の武産を包含したものになっていたのである。

このように、開祖が居られた時でさえ、合気道は大きく変わったし、さらに変わろうとしていた。宇宙が完成に向かい生成化育するかぎり、合気道も変わっていかなければならないのかも知れない。

参考文献 『合気真髓』

【第247回】 空の気・真空の気の考察

第65回「真空の気、空の気」、第222回で「真空と真空の気」などで、空の気と真空の気について書いたが、まだまだ満足できるものではない。合気道ではどんなに理論が立派でも、その理論を技で表すことができなければ、不完全であるし、できたことにはならない。

しかしながら、開祖は道歌で、「真空と空のむすびのなかりせば合気の道は知るよしもなし」と言われているわけだから、この「真空の気と空の気」がわからなければ合気道にならないことになり、絶対に避けて通れない課題ということになる。それ故、この課題は引き続き研究しているものの、まだまだその途中であるが、今回は「空の気・真空の気の考察」という課題のその後の研究成果をまとめてみることにする。

合気道は神業を身につける道であるが、神業の重要な要素のひとつは早業であろう。時空を超越した速さであり、相手がどうして倒れたのかが分からないような摩訶不思議な早技である。

「真空の気、空の気」が技、とりわけ早技で使えるためには、まず、真空の気と空の気とはどういうものなのか知らなければならないが、有難いことに開祖はその説明を『合気道新聞』や『合気真髓』にして下さっているのでそれをまとめるのがいいだろう。

空の気とは、

- 物であり、それがあから五体は崩れず保っている
- 重い力を持ち、本体は物の気で働く
- 引力を与える縄である

真空の気とは、

- 真空の気は宇宙に充満している。これは宇宙の万物を生み出す根源である。
- 身の軽さ、早業は真空の気をもってせねばならない

次に、この「真空の気、空の気」をどう使えば早技に結びつけることができるのかということになるが、それも開祖は言っておき下している。つまり、この重い空の気を解脱し、真空の気に結べば技がでるといわれているのである。

究極的には重い空の気を解脱し、真空の気に結ぶわけだが、技とりわけ早技がでるためには、解脱するところの空の気を養成し、身につけ、それで体を遣う修練をしなければならないだろう。その修練によって引力が身に着き、引力の縄ができることになる。そしてこの引力を与える縄によって相手と結ぶことができるようになる。

相手と結び、相手を絡め取ったり、倒したりして技を掛けるわけだが、ここで重い空の気（引力）を解脱して、真空の気に結びつけてやれば、早技や軽快な技が遣えることになる。つまり、技を掛ける場合、真空の気ではなく、空の気でやればお互いが重く、くっついたまま固まってしまうことになる。

例えば、二教裏の小手回しで空の気だけでやれば、相手は痛いだろうが、真から参ったとは思わないはずである。これを空の気から真空の気に変えてやると、相手が痛くもないのにどうして倒されたのかわからないような早技になる。木剣や正面打ちで打ってくるのを、空の気で結んで相手を絡めてから、その空の気を消滅させ、真空の気を体に入れて入り身で入ったり、体を捌けば、早く動ける。

この時、相手は本当に打ったと思って、体勢が崩れるので、技が自由に遣えるようになる。かつて本部の有川師範は、「気を消す」ということを言われていたが、これに関係があると思う。

また、当て身や突きの場合、空の気でやれば拳に伸びはないが、真空の気と結ぶことによって、伸びのある当身や突きになる。剣を振るのも同じだろう。

空の気の重さや引力を感じるのは、それほど難しくないが、真空の気を感じるのは難しいようだ。しかし、二教裏や太刀捌きなどを稽古していくうちに、それを感じることができるようになるように思う。

真空の気を感じるためには、心身を空っぽにする（気を消す）ことかもしれない。そうすると、まず技は空の気の引力で相手と結び、結んだら今度はその空の気を忘れて、心身を空っぽにすれば、真空の気と結び、技になるのではないだろうか。更なる研究が必要である。

参考文献：

『合気道新聞 3 号』

『合気真髓』

【第248回】 大先生のお言葉

私が合気道に入門したのは昭和 36、7 年だったが、大先生（開祖）もお元気でご活躍されていた。大先生はときどき道場に顔をお出しになり、技を示されたり、神楽舞をされたりされたが、合気道のお話もされた。しかし、技の説明をされたことはなかった。

お話に興がのると長くなり、正座している足がよく痺れたものだ。痺れに気がいつていたからではないが、大先生のお話は古事記にある神様の名前が頻繁にでてきたり、別次元での神秘的なお話で、ほとんど理解することができなかった。同輩はもちろん、先輩も理解出来なかったのは、お互いに見合わせる顔で明らかだった。

ありがたいことに、大先生がお話し下さったことの多くが、『武産合気』や『合気真髓』に書かれて残っている。これを読んでいると、部分々々ではあるが、当時ほとんど分からないままに聞き流していた大先生のお話が蘇ってきて、大先生の声と重なってくる。そして、大先生がお話になっているように聞こえてくる。

かつての大先生のお話と同じように、『武産合気』や『合気真髓』など以前はほとんど理解できなかったものが、半世紀近く稽古を続けて来ると少しずつ解読できるようになってくるものだ。無論まだまだ分からないことだらけである。

先述通り、これまで大先生のお話は理解はできなかったわけだが、不思議なことに多くの言葉が頭と耳に残っている。記憶力が弱い私が 40 年以前のことを覚えているのであるから、不思議である。

学校にも長年通って教師や教授の話を沢山きいたが、頭に残っている話や言葉は皆無である。なぜ、学校の先生の話は忘れて、大先生のお話や言葉は頭に残っているのだろうか。

一つは、『武産合気』や『合気真髓』を読んで、当時の大先生のお話とオーバーラップし、シンクロナイズし、自然に思い出されてくるのかもしれない。文字を見てみると、それを話された開祖の声まで聞こえて来るのである。

二つ目は、大先生の言葉が頭に刷り込まれたということである。常人とは異なる大先生の発する波動によるお話が、こちらの体に浸透したのではないだろうかと考える。特に極端な波動は、大先生の雷であった。道場中が震え、誰も顔を上げられないような強烈な波動で、忘れようにも忘れることができず、心体共に覚えている。

三つ目は、一般的に言われているように、一度、見たもの、聞いたものは体にインプットされてしまい、なくなることはないはずだからである。人は忘れたと思っているようだが、ただ、必要な時にそれを取り出せないで、忘れてしまったように思うのである。わたしの30歳頃の体験を通して、それまで経験したすべての事柄は、すべて頭の中のテープに録画されていて、命に関わる際などにそのテープが猛スピードで逆回転し、命を助けるべくデータを見つけようとするのではないかと確信している。

また、人が見聞きしたことのすべてはインプットされているという証拠は、催眠術にかけられると、自分の意識しないデータでもすべて記録保存されているということでもわかることである。（だから、学校の先生や教授のことばも、頭のどこかに保存されているのだろう。）

大先生のお言葉は体に入っているはずである。大先生の言葉を思い出し、『武産合気』や『合気真髓』の言葉とシンクロナイズさせながら、合気道をますます研究していきたいと思っている。

【第249回】 天の村雲九鬼さむはら竜王

記憶に残る大先生の言葉を自分なりに解釈してきたが、まだまだ難解で理解できないものが沢山ある。

その中で今、気になり、興味があるもののひとつが「天の村雲九鬼さむはら竜王」である。開祖は、「天の村雲九鬼さむはら竜王」とは血脈を結んでおり、故に合気の使命があると、常々話されていた。

そして、「天の村雲」とは、「宇宙の気」「オノコロ島の気」「森羅万象の気」を貫いて息吹くことをいい、「九鬼」とは、オノコロ島に発生したすべての物の気、九星

の気。 "さむはら"は、宇宙の森羅万象の気を整えて、世の歪みを正道にもどすことをいい、正しい意味での武の道と説明されている。そしてこのお話をされたときは、杖や扇子などで神楽舞をされたが、天を突き、そして地を突いて両足で地（床）を踏みしめたのが印象的であった。

しかし、「天の村雲九鬼さむはら竜王」とはなにか、なぜ重要なのかなど、全然分からずにきていたが、この「天の村雲九鬼さむはら竜王」という言葉が耳に残っているし、何とか分かりたいと、無意識のうちに探求はしていたようだ。

これも不思議なのだが、意識しても無意識でも何かを探していると、何かが声をかけてくれるようだ。もしかすると、いつも声を掛けてくれているのに、こちらが気がついてないのかもしれない。

今年で101歳になる詩人のまど・みちおさん（写真）が、詩集を出版した。まど・みちおさんは誰でも知っている童謡『ぞうさん』の作詞者である。その新聞広告が偶然目について、その日に書店に行って購入した。

興味をもったのは、作者の名前ではなく、本のタイトルと著者の年齢であった。タイトルは、「詩人まど・みちお100歳の言葉 『どんな小さなものでも みつめていると 宇宙につながっている』」（新潮社 2010年12月刊行）で、100歳の人が書いているということと、宇宙を感じているということが気に入ったわけである。



まど・みちお

自分はやっと70歳になろうとして、ようやく自分のことや宇宙のことに関心が向いてきたところだが、それがどういうものなのか、まだまだわからない。100歳ぐらいになるとそれは分かるようになるものなのか、そしてそれがどのぐらいわかるものなのか、大変興味があるところである。

開祖は、合気道は宇宙の道であるとか、合気の技は宇宙の法則、宇宙の営みを形にしたものであるとかいわれているので、宇宙が分からなければ合気道の精進はないことになり、宇宙の探求は避けられない。しかし、容易ではない。ひとりでどんなに考えても、答えは出ないだろう。何かの助けが必要だ。だがそれが何なのか、いつ現れてくるのかわからないし、現れてくるかどうかとも分からないのである。

先に、「天の村雲九鬼さむはら竜王」を潜在的に考えていたと書いたが、この解明のためのヒントがまど・みちおさんの詩集にあるような気がする。彼は詩人であって武道家ではないが、それを体で感じていて、素直に詩にしていると思う。これは若い内は、なかなか出来ないと思う。80歳以下の人がこれを書いたとしたら、き

っと興味をもたず、購入することも立ち読みすることもなかっただろう。一つのことに没頭し、100歳になって書くから、信用できるし、安心して読めるのだと思う。

詩集の中では次の詩が、「天の村雲九鬼さむはら竜王」を説明しているように思える。

私にとってのふるさは、はるかな地球の中心の方、
引力の方向なんですね。
空の雲も、アイスクリームも、人間の作った建物も、樹も、
みんなと一緒に地球の中心をさし、
ありえないことですが、
それを突き抜けて太陽の中心、
おおげさなことになるが、
銀河宇宙の中心を、通り抜けていく感じがするんです。

（まど・みちお『どんな小さなものでも みつめていると 宇宙につながっている』（新潮社）

この感じは、「天の村雲九鬼さむはら竜王」になられた大先生のものと同じではないかと思うのである。我々は「天の村雲九鬼さむはら竜王」にはなれないだろうが、宇宙の中心に立って仕事をしなければならないといわれているし、宇宙と一体化することが修行の目標ともいわれている。

合気道の修行者もこのような感じを持つように修行をすれば、宇宙の中心に立てるようになるし、宇宙との一体化ができるようになるのではないだろうか。

「天の村雲九鬼さむはら竜王」の入口の扉をやっとこじ開けることが出来たかも知れないが、この銀河宇宙の中心を通り抜けていく感じを実感でき、これを技に表せなければ、分かったことにはならないから、分かるまでにはこの道はまだまだ遠く、時間がかかりそうだ。

参考文献

まど・みちお『どんな小さなものでも みつめていると 宇宙につながっている』（新潮社、2010年12月20日刊）

前回の『天の村雲九鬼さむはら竜王』の論文で、武道家の大先生も詩人のまど・みちおさんも、宇宙を貫く感じを持たれていたと書いた。

開祖が常々言われていた、合気道は宇宙との一体化をすべく修行しなければならないということは、この心境に至ることなのかもしれない。合気道だけではなく、詩人、芸術家の理想も同じであるようだから、煎じつめれば、人間の理想とするところはこの心境なのかもしれない。

合気道は、合気の道とか宇宙の道などと言われるように、一つの"道"である。"道"というのは、今いるところから目標に向かって進むための、まど・みちおさんに言わせれば「引力の方向」ともいえるだろう。人はある方向に向かって進もうとしているし、その方向に向かわなければならないという。この引力の方向を、開祖は、地上完成や宇宙生成化育の方向といわれているのであろう。

合気道の修行に終わりはない。大先生も晩年までそう言われていた。これまでに、「修行が完璧に終了した」などといった武道家や芸術家は聞いたことがないし、また決して言えることではないと考える。なぜならば、"道"は宇宙的な距離があるし、また宇宙が拡大していることもあるだろうが、目標がそこで待っていてくれるのではないようであるからである。しかし、それには偉大な引力があるようで、人が進む方向を示してくれるようである。

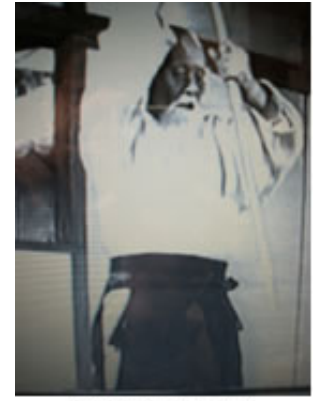
詩を書くのもそうだろうが、合気道もその偉大な引力に従って稽古を積み重ねていかなければならないはずだ。引力に従っていれば、"道"を行くことができる。この"道"の中で、発見・試行・反省・再試行を繰り返していけば"道"をどんどん進み、目標に少しずつ近づくことになる。

"道"を目標に向かって先に進むということは、より深く分かったということになるが、また、マイナス（反対側）のことが分かることにもなるから、マイナスの方向にも進むことにもなる。例えば、物事をよりマクロに捉えることができれば、必ずその分ミクロで捉える事ができるようになるということである。例えば、マクロの宇宙が分かる程度に、ミクロの宇宙である人体がわかるはずである。わからなければ、バランスが取れるようにやることである。それが自然であり、多分、宇宙の意志ではないだろうか。

"道"を進むと、前と後ろに「自分の道」ができることになる。修行はその道をどんどん長く伸ばしていくこととも言えよう。この道を、大先生やまど・みちおさんのように80年、100年とつくり続けていくと、オノコロ島（地球）の中心を貫き、宇宙の中心を貫き、銀河宇宙の中心を通り抜けていく感じを得るようになるのだろう。

前回、開祖は「天の村雲九鬼さむはら竜王」のお話の後、よく杖や扇子などで神楽舞をされたが、天を突き、そして地を突いて両足で地（床）を踏みしめたと書いた。この動作によって、宇宙の中心を貫かれた感じを持たれたのか、貫こうとされたのではないかと思う。

われわれ凡人はそのような境地に辿りつけないかもしれないが、夢と希望だけは持てる。時間もまだ20、30年はある。けっして出来ないと諦めることもないだろう。



開祖の杖の舞い

参考文献 まど・みちお『どんな小さなものでも みつめていると 宇宙につながっている』（新潮社、2010年12月20日刊）

【第251回】 宇宙の法則

合気道は技を練磨して精進していくわけだが、「技は、すべて宇宙の法則に合していなければならない。」と言われるように、合気道の精進には「宇宙の法則」ということがポイントになるようだ。この「宇宙の法則」は、宇宙の条理とか宇宙の営み、また自然の法則ともいわれているようだ。

これまでも「宇宙の法則」とはなんだろうと考えてきたが、まだよく分からない。ただ自分としては、漠然と技を通して感じたものが「宇宙の法則」ではないかと思っている。例えば、十字、陰陽、裏表、表裏一体、引力などなどである。

前回、前々回と、101歳になる詩人のまど・みちおさんの詩集『どんな小さなものでも みつめていると 宇宙につながっている』（新潮社、2010年12月20日刊）で、宇宙と合気道を考えてみたが、引き続きそのまど・みちおさんの詩を通して「宇宙の法則」を考えてみたいと思う。

前にも書いたように、まど・みちおさんは宇宙を感じておられるようであり、われわれ若輩は大いに学ぶものがあると思う。大先生の言われているこの「宇宙の法則」についても、われわれに分かりやすく詩に詠われていると思う。

大先生の言われていることは、非常に難解でまだまだ分からないが、それを理解するために、この詩が大きな助けになるようだ。

私は私という人間ですけど、

こういう人間になってここにいようと思って
ここにいるわけではないんです。
私だけでなくあらゆる生き物がそうなんです。
気がついたら、そういう生き物としてそこにいる。
ということは、やっぱり
生かされてるっちゅうことじゃないでしょうか。
人間を越えた、ある大きな力———、
「宇宙の意志」のようなものを感じずにはおれない。
それは「自然の法則」といってもいいかもしれません。

（まど・みちお『どんな小さなものでも みつめてみると 宇宙につながっている』（新潮社、2010年12月20日刊）

「宇宙の法則」とは「自然の法則」であり、「宇宙の意志」ということになるのだろう。宇宙がこうありたいとする意志である。多分、大先生が言われるように、宇宙完成、生成化育のために万有万物に期待される、つまりわれわれにとって使命とも言うべきものかもしれない。

宇宙の意志に即するものこそ「宇宙の法則」ということで、「宇宙の法則」に則った合気道の技も宇宙の意志に即さなければならないことになる。

参考文献 まど・みちお『どんな小さなものでも みつめてみると 宇宙につながっている』（新潮社、2010年12月20日刊）

【第252回】 ひびき

合気道の修行の最終的な目標は、宇宙との一体化といわれる。開祖が到達された、宇宙の中心に立つという心境、釈迦の天上天下唯我独尊などの境地になることなのだろう。われわれ凡人には、宇宙との一体化ができるかどうか分からないが、合気道を修行するものは、少なくとも努力だけはしなければならないだろう。

宇宙と一体化するためには、五体と宇宙の響きと同調し、相互に交流し、五体の響きが宇宙の響きとこだまする「山彦の道」を進まなければならないという。人の体は天地の真理が宿っており、天地万有につながっているから、己の心のひびきを天地に響かせ、つらぬくようにしなければならないと教えられている。（「合気神髄」）

名人、達人でもないし、漫画のヒーローでもない凡人は、一挙に宇宙と一体化など

できるはずがない。「山彦の道」を一步一步進んでいくしかないだろう。合気道の場合は、宇宙とのひびきの同調、こだまの前に、まず相対稽古の相手との同調、つまり共鳴ができなければはじまらない。それができてから、その後、すべての稽古人、武道家、一般人、動物、自然（山川草木）、天地、宇宙などと順次、共鳴できるようにしていけばいいのでないかと考えている。

前にも他で書いたが、99歳になる詩人、柴田トヨさんが詩集『くじけないで』を出版した。90歳から詩を書き始めたということなので、詩人のキャリアは10年にもならない。処女作であるが90万部売れたという。90万部というのは、詩集としてはベストセラーである。驚きである。テレビ（NHK）で紹介されたのを見て知ったわけだが、見ているうちに涙が出るほど感動した。早速、翌日『くじけないで』を購入して読んだ。42作品にはすべて感動したが、その内、最も感動したものの一つを紹介する。

貯金

私ね 人から やさしさを貰ったら 心に貯金しておくの
さびしくなった時は それを引き出して 元気になる
あなたも 今から 積んでおきなさい
年金より いいわよ

この詩には、気負いが無い。偉そうにするとか、自慢をするところがない。しかし、愛がある。またちょっとした、ほのぼのとするユーモアもあり、ひとの心を癒してくれる。

合気道では、「心と心が振動し共鳴し合う世界が山彦の道の発現たる世界である。」（合気神髄）というが、この詩を作った柴田トヨさんは、私を含む100万人以上の人達の心に共鳴したわけである。彼女の詩は、恐らく世界中の人達にも共鳴させることだろうから、合気道における山彦の道で考えれば、相当な次元に到達されておられるとってよいだろう。

武道だけでなく他の道からも、山彦の道を達成して宇宙と一体となることができるということである。われわれ合気道家も、合気道のさらなる精進が必要なようだ。

参考文献：

『くじけないで』（柴田トヨ、飛鳥新社）

『合気神髄』

【第253回】 宇宙を腹中に胎蔵する

合気道は奥が深く終わりが無いと言われるだけあって、殊更に大きい。対象相手が、宇宙なのである。「合気道の極意を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、『我はすなわち宇宙』なのである」と開祖はよく言われていたわけだから、宇宙が腹の中に収まるように修行しなければならないのである。

かつて大先生（開祖）がよく「宇宙が腹中にある」などとお話しされていた頃には理解できてなかったし、またそんな出来そうもないことは我々には関係がないと聞き流してしまっていた。今では、大変ご無礼してしまったと反省すると同時に、大事なお話を聞き流してしまったことが残念であると悔やまれる。

大きな仕事をする人は、常人には気がつかないような繊細で小さなことも疎かにしないし、またとてつもなく大きなことも考えているようだ。つまり両極端の幅が大きいのである。

合気道開祖の植芝盛平翁も、常人にはない超繊細な面、例えば、感覚や思いやり等、と宇宙を腹中にいれるとか、宇宙と一体化する等と、宇宙規模の心を持たれていた。だからこの繊細で宇宙規模の膨大な合気道をつくれ、残すことができたのであろう。

天下をとった豊臣秀吉も、織田信長に認められるような繊細な心の持ち主であったが、天下を取れるような大きな心ももっていたようだ。秀吉がどのくらい大きな心をもっていたかが分かるものがある。それは秀吉が天正18年（1590年）、小田原城にある北条父子を兵糧攻めにしていた際、退屈しのぎに歌合戦をしたときの歌である。一番大きな歌を詠ったものに褒美をやるというものである。

徳川家康、福島正則、前田利家、上杉景勝、蒲生氏郷と次々と詠っていき、だんだん歌が大きくなってきて、そして加藤清正が次のように詠んだ。

須弥山※に 腰打ちかけて おお空を
ぐっと呑めども 喉に触らず
（※しゅみせん。世界の中心にそびえる高山）

一同感心し、これ以上に大きい歌はないでしょうと言うと、秀吉は自分のはもっと大きいと言って次の歌を詠んだ。

東西の地球を小脇に抱えつつ
月をば呑んで 太陽を吹く

これで秀吉が優勝かと思われたが、秀吉のお伽衆であった曾呂利新左衛門が手を上げて詠んだ。

地球をば ちょっと丸めて 手に載せて
つまんで吹けば あとかたもなし

曾呂利新左衛門が一番おおきいということで、秀吉は負けてしまったわけだが、秀吉や武将たちはこのように大きな心ももっていたわけである。

当時は今の宇宙という考えはまだなかったわけだから、地球とか月星とか太陽のレベルが当時の宇宙のだろう。従って、彼らは宇宙を腹中に収めていたということができるのではないだろうか。

地球や太陽、宇宙は腹に収まらないが、入らないこともない。心は自由であり、無限であるからである。合気道の修行、技の練磨において、開祖に近づくべく、昔の武将のように、宇宙を腹中に胎蔵するようにしていきたいものである。

【第254回】魂（こん）が魄（はく）のうえに

合気道の精進は、技の練磨を通していく。はじめは容易であるが、後からはどんどん難しくなってくる。少し強く抑えられたりすると、技がかからなくなる。それまでは相手は素直に受身を取ってくれたものが、ある程度年数を重ねて稽古をしてみると、相手もそれ相応に対処するようになるので、技が思うように掛からなくなってくるのである。

この難しさを乗り越えていくためには、自己流でがむしゃらにやっても、問題を解決することはできない。筋トレをやってパワーをつけるだけでは駄目なのである。その解決法は、開祖が示唆されている。

技がかからない理由は沢山あるが、今回は魂魄を視点にして、技がどうしてかからないのか、又かかりにくいのか、どうすればうまく掛かるようになるのかを、開祖の遺訓「魂が魄のうえになる」を解釈しながら考えて見たいと思う。

技をうまく遣うために、初めは合気道の体をつくらなければならない。体のカスを取って柔軟で強靱な肉体をつくり、力をつけていくわけである。合気道は力が要らないなどという迷信に惑わされないで、肉体（魄）の鍛錬をすべきであろう。ある程度の力がなければ、よい技を遣うことはできないし、次の段階にも進めない。開祖も、「肉体すなわち魄がなければ魂が座らぬし、人のつとめが出来ない。」と言

われている。（「武産合気」）まずは、体（魄）を鍛えることである。

体をつくることは大事だが、体の遣い方も大事である。初心者が技をかけると、手をむやみに振り回す傾向にあるものだ。手を振り回すということは、まず自分の気持や意志が、手とその動きに入っていないということであり、次に手の動きに息と気持が合っていないということである。さらに、手先と腰腹が結んでおらず、腰腹を遣って手を動かさなければならないのに、手を動かしているということでもあろう。

この時期は、まず体（魄）が動いてしまい、その後に気持（魂）と息が体についてくる。つまり、魄が主体となり、魄が魂の上にある時期ということになろう。このような時期はパワーの稽古であるので、相手と争ったり、相手に怪我をさせる危険性が高い。このような魄の稽古も大事であるが、いつまでも魄の稽古をしているわけにはいかず、次の段階に進まなければならない。

体がある程度できて、手足もしっかりしてきたなら、今度は体をいかに生かして遣うかということになる。そのためには、気持や意志や心や魂に活躍してもらわなければならない。特に、手の遣い方に注意するのがよいだろう。つまり、末端にある手と体の中心にある腰腹を結び、そして技を遣う手先に気持をつぎ込み、息に合わせて腰腹を操作して、技を掛けていくのである。

相手と接している手に、十分気持を入れていくのである。初めのうちはその部位を見て、気持を入れるのもいいが、その接点を見ないで、腰腹から気持が出るようになればよい。

そのためには、自分の動きが意識できなければならないので、初めはゆっくり動くべきである。しかし、ゆっくり動くのも容易ではないものだ。よほど注意しないと、以前のようにばらばらでめちゃくちゃな動きになってしまう。意識を入れてゆっくりやるためには、息遣いが大事である。いわゆる生産び（いくむすび）の呼吸である。

この段階で、体（魄）に気持（魂）が満ちて、体と気持は一緒に動くことになる。気持（魂）と体（魄）の調和がとれて、魂魄同等ということになるだろう。

魂と魄が同等の段階では、がっしりした動きの稽古はできるが、勝速日等と言われる電光石火の早技や、摩訶不思議な動きの技は難しい。開祖も常々いわれていたが、合気の技は摩訶不思議にならないといけないのである。

この摩訶不思議な技が遣えるためには、魂が魄の上にくるようにならないといけないだろう。まず気持、心（魂）が動き、それに体（魄）がついてくるのである。言ってみれば、自由自在に進めるレーザー光線に従って、弾丸のように体がついて

いくようなものである。開祖の言葉によれば、「魄の世界を魂の世界にふりかえるのである。魄が下になり、魂が上、表になる。」ということである。

つまり、体力やパワー中心の魄の世界を否定するのではなく、それを土台にして、心、精神、気持の魂の世界にふりかえる、つまりチェンジするということである。

「魂が上、表になる」のが最終的な目標であるが、すぐにはできないだろう。何事にも順序がある。やるべきことをひとつひとつ片づけていかなければならない。まずは、魂を迎える魄を鍛え、次に気（持ち）と息を入れて体を遣い、調和の取れた魂魄をつくるのが肝要だろう。

参考文献 「武産合気」

【第255回】合気之道

長年、合気道を稽古してくると、これまでいかに地に着いた稽古をしてこなかったかに気付いてくる。そのひとつが、合気道というものをやっているのに、よく考えてみると、「合気道」とは何か、また「合気」とは何か、「道」とは何かなどがよく分かっていないばかりか、真剣に研究したこともないことに気付く。

これまで真剣に「合気道」、「合気」、「道」を考えなかったのは、はじめはなんとなく分かったつもりでいたし、分かってないと気付いてから分かってとしても、今度は難しそうなので後回しにしてきたのだろう。半世紀近くも稽古をしているのだから、そろそろこの辺で考えてみる必要があるだろう。しかし、「合気」と「合気道」はまだまだ分かりそうにないので、今回はとりあえず「道」に絞って、「道」から考えてみたいと思う。

「道」という語は、柔道、剣道、弓道、古武道などなど、武道の世界では頻繁につかわれているから、「道」には武道としての一般的な定義があるはずだ。例えば、「一つの物事を通じて、生き様や真理の追究を体現することや自己の精神の修練を行う事である」などと辞書には書かれている。武道には柔道、剣道、弓道などいろいろな武道があるが、武道には武道としての共通の目標があって、武道家は誰もが意識または無意識でそのような事を追求しているように思われる。

「道」を説いた中国の思想家である老子は、宇宙の原則を道といっている。また、中国の道教では、道とは宇宙と人生の根元的な不滅の真理を指すという。このようなことから、道は自然とか、老子がいう無為と同義であり、道は真理ということになるだろう。とすると、武道家の道も、この自然、真理の道ということにもなるだ

ろう。

合気道も武道であるが、合気道をつくられた開祖の植芝盛平翁は、この宇宙の原則、原理の道を次のように説明されている。「道というのは、丁度、体内に血が巡っているように、神の大御心と全く一つになって離れず、大御心を実際に行じていくことをいうのである。神の大御心から少しでも離れたら、それは道にならない。」（合気真髓）

合気道は、道である。道は、宇宙の原則・原理の道である。宇宙の真理を見つけ、宇宙の法則に則って、進んでいかなければならないことになる。合気道の技は宇宙の法則に則っているので、技を真の技としてつかうためには、法則に則った体の遣い方からなる動きにならなければならない。

宇宙の法則に則らず、道にのらなかったり、道から外れたりすれば、行き詰ったり、違う方向に行ってしまい、真の追及が出来なくなる。道にのって行けば、少しづつであろうが徐々に目標に近づくし、新しい発見と感動が連続的にあるはずである。

【第256回】精神と肉体が一つになる

バランスが崩れたものは美しくないし、本当の力を発することもできないし、多過ぎるものと欠けたものがせめぎ合い争いを誘発する。

世界は依然として争いが絶えない。たかだか数百万年の人類の歴史では、争いを地上からなくすのは難しいのだろう。国や民族や宗教などの争いには関係ないから、自分は争いなどしていないと思うかもしれないが、社会や家族との争いは多かれ少なかれ誰でもやっていることだろう。

合気道の稽古でも、争うことがないということはないだろう。人は、まだまだ争いの世界から抜けてないといえる。

開祖は「世界が依然として争い憎しみ合っているのは、物質科学と精神科学とが調和していないからだ」といわれている。つまり、世界がいまだに物にこだわっており、そこに精神が伴っていないというアンバランスから、争いや憎しみがあるというのである。それだけの精神を持ち合わせていない金持ちが、あり余るお金をさらに増やそうと、他人の迷惑も顧みずマネーロンダリー、利殖、投機などで金集めをますますエスカレートさせている姿などはその典型といえよう。

技を練磨していく合気道の稽古でも、世間と同じように、体力や腕力に頼ってしまう物質科学でやってしまいがちだ。もちろん、それは体力、腕力のせいではない。体力も腕力も技を掛けるのに必要であるし、あればあるほどいい。一般的に体力や腕力で技を掛けるのはよくないといわれるが、体力や腕力が悪いのではなく、悪いのは精神との調和が欠けていることである。つまり、遣う体力や腕力に魂が十分に入っていないことにある。魂とは、精神、心、気持、霊ということだろう。因みに、魄とは、肉体、物質であり、体力や腕力も魄である。

技の稽古で争うとは、相手が倒れない場合などに、なんとか倒そうと力づくでやるのだが、相手がさらに頑張れば、取っ組み合いの争いになる。

しかし、取っ組み合いの争いだけが争いではない。相手の手や体をくっつけないで弾いてしまうのも、ミクロの世界ではあるが、争いといえるだろう。

それでは、争わないために魄をどうすればよいのかということになるが、それを開祖は「魄と魂とが一つにならなければならない」といわれている。つまり、りっぱな肉体（魄）ができたなら、それに魂を入れていくのである。

そして、魂によって肉体が動くようにしていくのである。

技を掛ける際も、まず魂（精神、気持）を働かせ、それに従って体が動くようにする。魂は緩急、強弱、自由自在であるはずなので、この魂に従うように肉体を鍛える。これによって、魂（精神）が肉体を育てることになり、そして肉体が精神を守ることにになる。

これが合気道で、精神（魂）と肉体（魄）がひとつになるということのようである。開祖は「霊は肉体を育て上げなければなりません。体はまた精神に従って、すべて精神によって動き、精神にまかせてゆかなければなりません。精神を守るための肉体となつてはじめて道が成り立つ」（「武産合気」）といわれている。

参考文献 「武産合気」

【第257回】自分の動きの中に相手を巻き込む

合気道は相対稽古の相手と技を掛け合って精進していくが、どうしても相手を倒すことが目的になってしまう。そして、相手が倒れれば技が効いたと満足するようだが、倒された受け側は多くの場合、満足して倒れていないようである。効いていないけれど受けだから倒れたとか、引っ掛かって痛いから倒れたとか、先輩だから倒れてやったなど、倒れても真から満足はしていないのである。

合気道では相手の体を倒すだけでなく、相手の気持も真から参ったと思わせなければ、技が本当に効いたことにはならない。これを開祖は「真の合気道は、相手を倒すだけでなく、その相対するところの精神を、相手自らなくすようになさなければならないのである」（武産合気）と言われている。

それでは、相手が真から参ったと思うためには、どのような「わざ」（業と技）を遣わなければならないのか。一言でいえば、自然であるということだろう。相手を投げようとか、きめようとかしたり、力んだり、意気込んだりして遣う「わざ」には、受けの相手は真から納得してくれないはずである。

なぜならば、合気道の技は宇宙の法則に則っているわけだから、そのような不自然な「わざ」は宇宙の法則に逆らっている訳で、受け側はその不自然さを意識または無意識に感じるのである。手先などの末端部位を攻めたり、受けの相手と向かい合う体勢になったり、両足が揃って居着いたりすると、真の技は掛からない。無駄があって美しくないし、不自然で、宇宙の法則に合っていないからである。

技を掛けてうまくいかない原因にはいろいろあるが、そのひとつに相手を倒そうとするあまり、力で押ししたり引っ張ったりする他に、相手の周りを回ってしてしまうことがある。これでは、相手に翻弄され、自分の中心を失ってしまう。

技を掛けるときは、相手に捉われず、まず自分自身が宇宙（自然）の法則に則って動かなければならない。体と息を拍子に合わせ、水火、十字、陰陽等に遣うのである。例えば、自分と相手の共通の円の接線から自分の円をつくり、その円に相手を引き込むのである。四方投げ、入り身投げ、回転投げ（抑え）などはその典型的な技である。

この円に陰陽の動きを加え、相手の腕を抑えている手と体を右・左・右下（又は左・右・左下）に振れば、相手の手は、自然と腹の下に巻き込まれるはずである。二教裏はこの典型的な円の動きであろう。

法則に則って体を遣えば、受けの相手はこちらの動きの中に巻き込まれるはずであるし、巻き込むようにならないといけないだろう。

受けの手首や相手の部位を攻めるのではなく、自分の動きの中に相手を巻き込んでいけるようにしなければならない。法則に則った動きには、相手の体だけではなく気持もついてくるものである。そうすれば、相手は相対するところの精神を自らなくして、真から納得してくれるだろう。

【第258回】円のめぐり合わせ

合気道は技を練磨して精進していくものだが、技とは何か、技はどのように練磨していかなければならないのかを、よく考えなければならない。

入門したての頃の初心者は、技とは一教とか入り身投げとか小手返しであるだろうから、こんな質問をする方がおかしいと思うだろう。しかし、それが技だとしたら、その程度のことは数年で覚えてしまうことであり、際限なく追求する対象であろうはずはない。

技は決して完璧に遣えるようにはならないといわれるのだから、技は想像を絶する深遠なものであるはずであり、ただ安易に稽古を続けていけばいいようなものではないはずである。技にはもっと深い意味があるはずである。

合気道の技は宇宙の営みを形にしたもので、宇宙の法則に則っていなければならないという。宇宙の法則に則った技を遣うには、技を遣う体遣いも宇宙の法則に則ったものでなくてはならないだろう。

開祖は、人の体は宇宙と同じであるといわれている。体そのものには問題がないが、問題は、体が宇宙の法則に従って動かず、そして、法則に従って遣われないことなのである。体が宇宙と同じように動けば、宇宙と一体化できることになるといわれる。そこを、われわれ合気道同人は求めていかなければならないことになるだろう。

まず、宇宙の法則に従った動きのできる体をつくらなければならない。人は本来、宇宙からその体をもらっている。だが、年と共にカスが溜まってしまい、うまく動けなくなってくる。だから、合気の技の練磨を通して、カスを取らなければならないのである。とりわけ、一教、二教、三教はカス取りの技と言われるから、これらの基本技および呼吸法や受身などでカスを取らなければならない。

カスが取れ、体がある程度できたら、その体を法則に従って遣わなければならないことになる。

法則にはいろいろあるだろうが、そのひとつに「円」がある。開祖は、「円の動きのめぐり合わせが、合気の技であります」（「合気神髄」）と言われている。つまり、合気の技は、複数の円の動きが連動したものであるということになるだろう。

円というのは、380度を一周する線であるが、その何分の1でも円は円である。例えば、手先を縦から横に反せば90度ぐらいの円になる。合気道では十字に反すことによって、円の動きをすることになる。

体がどれだけの円運動をするかを、例えば、「片手取り四方投げ」で見ると、相手に持たせた手首と小手と上腕が反転々々して円く動き、手先から肩までの手が自分の肩を中心に円を描き、腰腹・体幹、顔、肩、股関節、ハムストリング、足のあおりによって足底と膝も円く動き、また左右の足に重心が移動する軸が円く動く。一つの合気の技は、このような円の動きの連動から成っているのである。

従って、この内の一つでも円い動きでないとしたら、合気の技にならないことになるだろう。

円い動き、円く動くことが合気の動きであり、宇宙の営みであるが、合気の技を掛けている人は地球の上で動いているので、大きな意味では円く動いていることになる。なぜなら、地球は円いからである。また、その地球は太陽の周りを円く動いているのである。

また、技を遣っている体を構成している原子は、やはり円く動いているようである。合気の技は、技を掛ける際の体の動きだけでなく、ミクロの世界とマクロの世界とも連動した、円のめぐり合わせでできていることになろう。

【第259回】体（からだ）

だれでも自分の体のことをじっくり考えることなど、あまりないのではないだろうか。生まれてからずっと一緒であるし、自分の思う通り働いてくれているので、自分が所有する"自分"であると、当然のように思っているか、気にもとめないのだろうか。

通常の生活では思うとおりに働いてくれる体だが、合気道の稽古では思うように動いてくれないということを、嫌というほど知らされることになる。師範や先輩に指摘されたり、直されることだけではなく、自分でやろうとしたことさえも思うように出来ないのである。自分の体なのに、思うように動かないのは、まどろっこしいし腹立たしいはずである。

という訳で、体は自分のものではなく、借りモノであると思うようになった。だから、自分の思うように動いてくれないこともあるだろうと、納得できる。また、借りモノの体だから、大事に扱わなければならないし、貸主さんの意志に逆らわない遣い方をしなければならないことになる。そして、最後はその貸主さんにお返しするわけである。体は自分のモノと思っていた人も、またどんなに所有欲の強い人でも、あの世までその体をもっていくことは出来ないことになっている。

体の貸主さんは、人が生まれ出て、そして去っていくところの宇宙と考える。今のところ、最も知能の高いといわれる人類でも、人どころか、蠅一匹つくることはできないのである。天体や星や鉱物や動植物、それに原子や中性子や電子などをつくった宇宙が、人をつくり管理していると考えるのが適当だろう。

だから、体は宇宙の意思に沿って使っていかなければならないことになる。宇宙の意思とは、宇宙の法則であり、宇宙の条理ということになるだろう。

人の体はミクロの宇宙ともいわれるし、開祖もいろいろと言われているように、人の体は「宇宙」と大いに関係があるようだ。両手、両足、頭、胴体で精妙に構成され、手足の関節は十字で機能するようにつくられているし、手や足が折れ曲がらないよう、又十分に力が出るよう、筋肉は螺旋についていたりする。観察していけばいくほど、宇宙と同じように無限の摩訶不思議の世界である。

体そのものが宇宙であるとしたら、その体を貸主さんである宇宙の意思に従って遣わせて貰わなければならないだろう。その遣い方を、合気道では技の練磨を通して学んでいるはずである。

宇宙の意思とは、宇宙の営みでもある。合気道では、開祖が言われている「技を生み出す仕組みの要素」を身につけることによって、宇宙の営みに同化しようとしているはずである。つまり、合気道の技の練磨を通し、「技を生み出す仕組みの要素」を身につけ、宇宙と体を一体化していくのである。

従って、合気道の修練は、宇宙と一体化する体をつくることが、大事な目標ということになるだろう。

【第260回】日月の呼吸と潮の干満の呼吸

技の練磨は通常、相対稽古で相手に技を掛けて稽古しているが、技は自分が思うようにうまく掛かるものではない。自分はいまうまく掛かっているのに、問題がないと思うのは、問題に気がついていないだけと言えよう。

技を掛ければ、多かれ少なかれ、必ずといっていいほどぶつかるはずである。ぶつかるというのは、真の技ではないか、技が未熟であるか、未熟さをカバーするために力でやっていると言えるだろう。

技を掛けて相手にぶつかる原因として、二つあげられよう。一つは体であるが、自分の体や手足が相手にぶつかって、相手の動きを止めたり邪魔するのである。例え

ば、天地投げで向き合ったまま、技をかけようとしたり、押さえられている手を上げようとしたり、また四方投げで相手の脇を締めるように腕を遣うこと等である。

もう一つは、気持（霊）である。自分の気持を相手の気持にぶつけてしまうと、相手の防御本能を目覚めさせたり、反抗心を起こさせ、それによって技を止めてしまい、反されたりするのである。

ぶつからないようにするためには、身体各部を十分に反していくことと、自分の気持を相手の気持にぶつからないようにすることである。気持がぶつからないためには、体と同じように、自分の気持と相手の気持を結んでしまわなければならない。入り身や転換では、まず相手と気持を結んでから、体と一緒に気持もしっかり入り身、転換をすとか、相手に持たせた手を相手が弾いて離れないように気持でくっつけたら、相手を感じながら、相手の気持を引き出し、制御するように遣う等である。

気持が相手にぶつからないようにするためのもうひとつの方法は、宇宙の法則に従った気持（霊）の遣い方をすることであろう。言うならば、宇宙の呼吸、自然の呼吸に合わせて、自分の気持（霊）を遣っていくということである。

宇宙の呼吸というのは、言霊（ことだま）であり、宇宙の響きという。呼吸も十字であるが、十字の縦の呼吸を、開祖は「日月の呼吸」、十字の横の呼吸を「潮の干満の呼吸」といわれているようである。また、開祖は「日月の呼吸」を「天の呼吸」、「潮の干満の呼吸」を「地の呼吸」ともいわれており、この天と地の呼吸を合わせて技を生み出す、といわれているのである。

合気道は、再三書いてきたように、十字道ともいわれるように十字が基本となっている。技は、この「日月の呼吸と潮の干満の呼吸」の十字の呼吸をつかってやるのである。宇宙の法則に則っているから、相手は違和感を持たないだろう。たとえ相手が意識で反抗しようとしたとしても、無意識がもっと強く働き、相手の体と気持（霊）が無意識のうちに自然と従ってしまうようになる。

「日月の呼吸」を遣うと、「天地投げ」で天へあがる自分と相手の手、「呼吸法」であがる手、「入り身投げ」での天側の手と体、「二教裏」で抑えている相手の手とこちらの肩や胸などが、相手の抵抗なく、しかも相手が自ら進んでやっているかのように、自然と上へあがるものである。

「日月の呼吸」を技で遣うために大事なことは、力（体）主体でやるのではなく、気持（霊）と呼吸（息遣い）主体でやることだ。力（体）主体でやれば、「日月の呼吸」は遣えないし、必ずぶつかることになるだろう。

この「日月の呼吸」で上がったものを技とするには、今度は縦から横の「潮の干満の呼吸」を遣わなければならない。こちらと相手の間（ま）は、潮の干満のように密になったり疎になったりするが、相手はくっついてしまい、こちらの体の一部と化したようになる。こうなると相手は反抗する気持も無くなるようで、気持よさようについてくるだけである。あとは、地へと縦に落とせば、技となるだろう。

人の体はけっこう重いものであり、手で上げようとしたり動かそうとしても、容易にはできないものであるから、体だけに技を掛けても、相手はうまく動いてくれないはずである。やはり、もう一つの霊（気持）に働きかけなければならないことになる。

極端な例であるが、死体は想像以上に重いし動かしにくい、生きている人は死体に比べると軽いし動かしやすい。生きている人は一人でも運べるが、お棺は一人では担げない。

かつて開祖は手に木刀を持たれて、「この木刀の方がお前たち（前に控えていた内弟子）より重い」と時々いわれていたものだが、当時はみんなチンプンカンプンであった。しかし、この霊を考えれば分かるような気がする。おそらく木刀には人のような霊（気持）はないだろうから、死体と同じような意味で重いし、霊的に動かしにくいということではないだろうか。

技は体にかけていくだけでなく、日月の呼吸と潮の干満の呼吸に合わせ、相手の霊（気持）にもかけるようにしていかなければならないだろう。

【第261回】合気道の禊（みそぎ）

合気道は技を練磨して精進していくが、技の練磨は勝負をしたり、相手に勝つためにやっているのではない。スポーツは勝つため、武術でも相手を制するためという目標があって修練をしているが、合気道は何を目標に技の練磨をしていけばよいのだろう。

有難いことに、かつて開祖からこの件に関しても、耳にタコができるほどにお聞きしている。書物にも、師のお言葉が残されている。

開祖は、合気道は「禊（みそぎ）」である、と言われている。まず、合気道は、体のカスを取る禊（みそぎ）であるという。合気道の技を練り合うことによって、体の節々の関節と筋肉のカスを取り除き、柔軟にする。特に、一教、二教、三教はカス取りの技とも言われているほどである。

また、体を動かすことによって、深呼吸をし、血行がよくなるので、血液のカスが
取れ、これも禊になると言う。それに、稽古に集中すれば、雑念が払われ、精神
(心) が禊がれ、さわやかな気分になる。

ここまでは、合気道は自分の心身のカスを取る禊ということになり、誰にでも理解
でき実行できるだろう。だが、開祖は、合気道にはさらなる禊の役割があると言わ
れているのである。

曰く、「合気は地上の禊（みそぎ）、祓（はら）いです」。つまり、合気道は、地
上にあるものを禊ぎ、邪気を祓い、地上樂園を完成するためのものであるというこ
とである。さらに、「合気道とは、宇宙みそぎの大道」であるといわれ、宇宙建国
完成のお手伝いをすることであると言われている。

この「地上の禊」と「宇宙の禊」があるので、合気道の道はまだまだ先があるよう
だ。そこまで行けるかどうか、誰にも分からないだろうが、合気道同人は少なくと
も挑戦すべきであろう。そんなことは出来ないとみんなが諦めたならば、きっと開
祖は悲しまれることだろう。一步ずつ近づいて行くしかない。そこから、また次の
誰かが引き継いで進んで行けばよい。

心身の禊から「地上の禊」と「宇宙の禊」へ進むキーワードは、「言霊（ことだ
ま）にあるように思う。開祖は「合気は言霊の響きによる禊の業をいう」（「武産
合気」）と言われているし、また、「合気道とは、言霊の妙用であり、宇宙みそぎ
の大道」（同上）とも言われているのである。

言霊とは宇宙の響きであるから、この宇宙の響きを感応できなければ先に進めない
ことになる。だが、合気道を精進していけば、「地上の禊」と「宇宙の禊」につな
がるとも言われているわけだから、技の練磨を続けていけばよいのではないだろう
か。そうすれば、言霊の響きに感応して、宇宙みそぎの大道を進むことになってい
くのではないだろうか。

【第262回】天地の力、宇宙の力、神の力

科学が発達し、物質文明が進むにつれて、人は傲慢になるようだ。自然を征服した
とか、克服したとか、災害を予想できるとか、災害を防げるなどと思うようになって
来る。そして、金力や物力の力で何でもできるなどと思うようになって来る。

合気道の稽古でも、技をつかう場合、力を遣えば技が効くものと思って力んでしま
う人が多いようである。技を遣う場合、ある程度の力は要るし、力はあった方がよ

い。しかし、力が強いだけでは、上手く技を遣うことはできないものである。

開祖は、よく「合気道は摩訶不思議でなければならない」と言われていた。人がものごとを言ったり、書いたり、やったりするのは、人に納得してもらうためだが、合気道の技を掛けても、その技が相手にも第三者にも納得してもらうには、摩訶不思議でなければいけないということだろう。

摩訶不思議な技であるためには、通常の技では駄目である。通常の技というのは、人為的であるということだろう。それぐらいなら稽古したら自分にでもできてしまうだろうという気にさせるのは、摩訶不思議ではなくなってしまう。開祖の技は、当時、拝見していてもそうだったが、今、ビデオやDVDを見ても、とても自分にはできそうにない摩訶不思議なものである。

開祖の摩訶不思議な技は、どこからくるのだろうか。考えるに、開祖は、鍛えに鍛えた心身で技を遣われただけではなく、ご自身以外の力を遣われていたのではないだろうか。それは、天地の力、宇宙の力、神の力である。

どんなに力があっても、人の力には限界があり、天地や宇宙や神の力には適わないはずである。また天地の力、宇宙の力、神の力は、無限で無尽蔵にあるだろうし、人知の及ぶものではない。

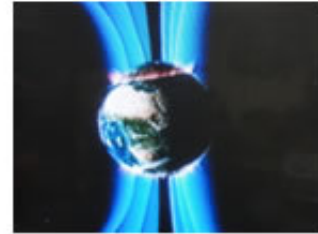
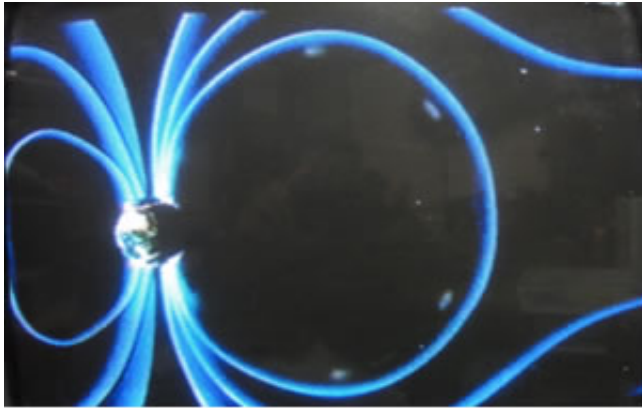
自分の心身を鍛えるのも必要であるが、天地の力、宇宙の力、神の力を遣うような稽古をしていかなければならないはずである。合気道の技は宇宙の営みを形にしたものと言われるから、技を正しく練磨していけば、天地の力、宇宙の力、神の力がつくはずである。正しい練磨をしているかどうか、天地の力、宇宙の力、神の力がついてきているかどうかで、すぐにわかるはずだ。人為的な力だけで天地の力、宇宙の力、神の力がついていなければ、その練磨は正しくないことになるだろう。

どうすればそれらの超人的な力を得ることができるようになり、摩訶不思議な技がつかえるようになるのか、開祖は『武産合気』や『合気真髓』などに書き残されている。難解ではあるが、熟読玩味して技に取り入れていかなければならないだろう。

【第263回】 天の呼吸と技

合気道の技は宇宙の営みを形にしたものなので、宇宙の法則性を有しているはずで、技がよいか悪いかは、この宇宙の法則性にどれだけ則っているかということになるだろう。

よい技を掛けたいのならば、宇宙の法則に則った、それに逆らわないものにしなければならないだろう。さらに、宇宙の支援を受けることができるような技遣いや体遣いできれば、よいはずである。



天の呼吸

開祖は、「技は天地の呼吸の交流から生まれる」と『武産合気』に書かれている。天の呼吸（写真）は縦、地の呼吸は横と考えていいだろう。従って、技はこの縦横十字の天地の呼吸によって生み出されるもので、この呼吸に合わせて息と体を遣っていかなければならないことになる。

さらに、開祖は「天の呼吸との交流なくして地動かず、ものを生み出すのも天地の呼吸によるものである。」「天の呼吸により地も呼吸するのであります。」（『武産合気』）と言われている。天の呼吸により地も呼吸するといわれるのだから、まずは、縦に天からエネルギーを得なければならないことになる。

そのためには、手を動かす以前に、足を大地にしっかりつけ、体を一軸にして、天から垂直にエネルギーを取り入れなければならないことになる。その後、今度は、横の地の呼吸に合わせた動きをすればよいのである。これを逆にやってはいけない。

ひとつの技には、この縦横の十字の動きが複数回あるはずであるが、常に縦の天の呼吸を主体にしなければならない。例えば分りやすいと思われるのは、「坐技呼吸法」である。手を振り回すのではなく、持たせた手で相手と結んでくっつけてしまったら、手は動かさずに息を入れながら、自分の重心を真下に落とすと、相手は真上に浮き上がってくる。

「天地投げ」では、天側の手を上げるときも、天の呼吸をしっかりすれば、相手は自然に浮き上がってくるので、後は相手をどうにでも制することができるようになる。

「呼吸法」でも、まずは天との縦軸の呼吸で体を沈めて、床からの縦の力（パワー）を横の腕に伝えてから動かないと、腕や体が横の地の呼吸で働かないし、力が

集中して遣えないはずである。

自主稽古で、天の呼吸の重要さがわかる稽古法がある。

- 。四股：地につけた足に全体重を掛け、息を出しながら沈み、沈みきったところから息を下腹に入れていくと、反対側の足が上げようとしなくとも自然と上がっていく。足を上げようとする、うまく上がらないものである。これは、横の地の呼吸からやっているからである。
- 。剣の切り下ろし：切り下ろすまえに、まず、真っ直ぐ立ち、気持ちと力を足底から体の中、剣を通して天にむすび、息を吸いながら天の呼吸をする。その後、天の息を吐きながら切り下ろす。切るというのは、縦から横への動きである。
これを素手でやる場合も同じであるから、例えば正面打ちでも「天の呼吸」を注意してやらなければならない。

技は、天の呼吸を意識し、天の呼吸優先で遣うように、また、天の呼吸により地の呼吸が呼び起こされるように、練磨しなければならないだろう。

【第264回】赤玉白玉と技

合気は十字であるという。だから、合気道を十字道ともいうという。十字とは、「武産合気」によれば、縦の天の呼吸、即ち日月の呼吸と、横の地の呼吸、即ち潮の干満の呼吸であり、合気道の技はこの日月の息と地の息を合わせて、生み出していかなければならないのだ。

前回の「天の呼吸と技」で、「天の呼吸との交流なくして地動かず」「天の呼吸により地も呼吸する」ということを取り上げ、まず「天の呼吸」について書いたが、今回は「地の呼吸」について書いてみる。

地の呼吸を、開祖は潮の干満といわれ、それを塩盈珠（しおみつのたま）、塩涸珠（しおひるのたま）、又は赤玉、白玉と言われている。そしてこの赤玉、白玉を腹中に胎蔵して技を鍛錬していかなければならないという。では、この潮の干満、赤玉、白玉をどう捉え、どのように技で扱っていけばよいのか、考えなければならぬことになる。

重心を地に落とすと、自分の体重を感じると同時に、体が水で満ちているように重く感じる。武術では、人の体とは革袋に水がつまった水袋であるとも言われている。そうだから、そう感じるのも不思議ではないだろう。この水袋の体を十字々々で反（かえ）したり、入り身や転換などすると、まさしく自分の体が水で満ちていると

感じると同時に、自分の体が恰も水の中で遊泳しているかのように、空気と結びついて粘っこくて重い感覚になる。

この粘っこく重く、あたかも水の中にいるような感覚をなんとか身に着けたいと思うなら、自主稽古で杖を振るのがよいだろう。突いたり打ったりを陰陽、十字に反しながら、赤玉、白玉を腹中に胎蔵していると思いながら、練習するのである。手足と体が連動して動くようにするのである。水袋の勢いで、体が陰陽に動き、あたかも潮が満ちたり干いたりする感覚が得られるはずである。毎日、少しずつでも稽古すれば、その内に感覚が掴めるだろう。

また、転換、入り身転換の一人稽古もよい。水袋が左右陰陽に動く感覚を掴むことができるだろう。

技は潮が満ちたり干くように掛けなければならないが、そのためには赤玉、白玉を胎蔵する体をつくらなければならないし、そして、その体を潮の干満の息に合わせてつかうようにしなければならない。体のカスを取って柔軟な体にし、その体を自分の呼吸によって、潮の干満（赤玉と白玉）の拍子に合わせて遣うのである。

天の呼吸の縦に対して、地の呼吸と動きとは横である。技は縦だけでは成立せず、横があってはじめて技になるはずである。もちろん、横だけでもだめである。しかし、初心者はまず横の動作からはじめてしまう傾向にある。典型的なのは、足が居着いたまま手をつかうことである。縦がしっかりしていないので、横の手も弱く、技が効かないことになる。

例えば、「二教裏」の小手回しが効かない理由のひとつは、肩や胸を通して腹や腰から来る横の力をつかわず、決めようとばかりに手で下に落としてしまうからである。「二教裏」も天の呼吸に合わせ、体と息を縦につかったら、次に塩盈珠、塩涸珠になったつもりで体と気持を左右につかい、相手を自分の中に取り込み、そこで今度は下に落として決めるのである。これは相手を二教で決めるということではなく、天の息と潮の干満に自分の息と体を合わせて動いた結果、相手が倒れているということにならなければならない。

【第265回】合気は万有万真の定理を明らかにする

合気道は技を練磨しながら精進していく武の道である。初めは技の形をなぞって、技の形を覚えて、これが技だと思えるものだが、だんだんこれが真の技でないことが分かってくる。合気道の技は、宇宙の営みを形にしたという深遠なものである。5年や10年で身につけられるようなものではない。

開祖が苦心されてつくられた合気道の技の形も、宇宙の営みに則ったものであるから、宇宙の営みに合わせてやらなければならない。そのためには、宇宙の営みとは何かを考えなければならない。

宇宙の営みとは、宇宙の条理とか宇宙の真理とも言えるだろう。真理であるから、誰でもどこでも、というより万有万物が納得できる定理や法則であるはずである。

合気での技の鍛錬は、この定理や法則を見つけ、体で試し、試行錯誤して身につけ、そして定理を明らかにしていくことだろう。これを開祖は、「武産合気は宇宙の営みのご神意に神習い、万有万真の定理を明らかにする祭政一致の本義であります」（「武産合気」）といわれている。

しかしながら、合気道の形をなぞっただけの稽古をいくらやっても、万有万真の定理を明らかにすることは難しいだろう。もう一段深く掘り下げ、次元を替えて技の鍛錬をしなければならない。そのためには、「技」とは何かをもう一度考える必要があろう。

開祖は、技とは「技を生み出す仕組みの要素」と言われているようである。この技要素は、技を生み出す仕組みを有しており、万有万真の宇宙の法則を有しているはずである。相手が誰であろうが、技（の形）が変わろうが、技を生み出すシステムが働き、技が生きて来るはずである。力がない相手や初心者には効くが、ちょっと力を入れて持たれたり、体力のある相手に効かないようなら、万有万真の定理ではなく限定的定理ということになる。

合気の稽古とは技の練磨であるが、技の練磨とは技要素を会得し、万有万真の定理を明らかにし、それを身につけていくことのようなものである。その定理に則って技をつかえば、その技の形には法則性があるはずなので、無駄なく美しく、説得力があるはずである。

その結果、相手は喜んで倒れてくれることになり、その定理は正しいことになる。そうでなければ正しくないわけだから、次の定理を見つけなければならない。この試行錯誤を繰り返すことが技の練磨ということになるだろう。

技の練磨に終わりが無い。宇宙の法則、万有万真の定理は無限にあり、人智の及ばないものだからである。

合気道は争いのための武道ではなく、和合の武の道である。しかし、今の世界はまだ争いの文明から離れることができないでいる。民族と民族の争い、宗教間の争い、貧富間の争いが地球上で頻繁に起こっている。

合気道の稽古でも、ともすれば勝ち負けや優劣の争いに陥りやすいといえるだろう。自分は素直に受けを取っているし、相手を痛めないように投げているから争っていない等と思っているだろうが、よく観察してみると、手を出すのにも必要以上に力を入れて押したり、引っ張ったりしている。これは、ミクロの範囲で争っているといえるだろう。それは、例えば相手の手をはっきり持つかわりに軽く手を掴んで受けをとると、その手が離れてしまうので、争っているのがよく分かるのである。

相手の手が離れてしまうというのは、二つにわかれてしまうのだから、和合ではなくなり、争いということになる。

合気道の相対稽古では、少なくとも相手と接した時点から、技（の形）の終局で投げたり押さえるまで、一つに和合していなければならない。つまり、相対する二人は、初めから最後までひとつにむすんでいなければならない。二人がむすんでいなければ、一人一人がばらばらに考え、動くわけだから、（確率的にも、全く同じ考えと動きになる割合は皆無であろうから）結局は争いになることになる。

何ごとも最初が肝心である。最初に相手と接した瞬間に、相手と結んでひとつにならないといけないが、それはとりわけ難しい。なんと言っても武道であるから、受けの方も取り（仕手）を打ち込んだり、押さえ込むつもりでくるはずである。その厳しく攻撃してくる相手とむすぶのは、容易ではないのである。

開祖は「どうしても、天の浮き橋に立たなければなりません」と言われている。技をつかうときは、まずは「天の浮き橋に立つ」ことである。

「天の浮き橋」とは、簡単に注釈してみると、体（魄）と心（魂）の縦横十字の姿であり、魂魄のバランスがとれて、0（ゼロ）状態であるといえるだろう。まず、体は力まず、雲の上にいるように立ち、相手に対しても余計な力を加えず、あたかも水の中を遊泳するような感覚で体をつかうことになる。

次に、「天の浮き橋」の心（魂）であるが、0（ゼロ）になるというのは「自己を無にする」といえよう。相手を投げようとか、やっつけようとか、格好よくやろう等とは考えず、心の響き、つまり宇宙の響き（言霊）を感じるようにつとめ、それに従って技をつかっていかなければならないのである。

開祖は『武産合気』で、「天の浮き橋に立つ」とは「自己を無にする」ことであ

り、そして「自己を無にする」ことは「真空の空のむすび」といわれていると考える。

道歌に「真空の空のむすびのなかりせば 合気の道は知るよしもない」と詠われている通り、合気之道は、天の浮き橋に立たないでも、自己を無にしないでも、つまり真空の空のむすびがなくても、その道を進むことができない、つまりは、技も効かないということになるだろう。

【第267回】念彼観音力

合気道では相対稽古で技を掛けあって精進していくが、お互いが何年も稽古をしていると、思うようには技が掛からないものである。相手が素直に倒れてくれれば問題ないのだが、ちょっと力を入れて頑張られたりすると、ぶつかったり、動かなくなってしまうたりする。

思うように技が掛からないのは気持のよいものではないが、よく考えてみると、技が思うように掛かるなどというのは、そう簡単なことではないはずである。本来ならば、武道である以上は、極端に言えば相手は殺すために、または殺されないために、攻撃してくるのである。相手が持てる力を出し切ってかかってくれば、その力を制するのはそう簡単ではない。

初心者の内は、相手の力に負けないように、力も技の内とばかり、力主体で稽古するものだ。これは、いわゆる魄の稽古ということになる。しかし、段々と相手が頑張ると技がなかなか掛からないことに気がついてくる。それで更に稽古して力をつけるのだが、やはり力には限界があることを思い知らされることになる。

そこで、技の重要性を認識しなければならなくなる。それまでの稽古は、技の形をなぞっていただけだったことに気がつくだろう。そして、宇宙の法則に則った技を生み出す仕組みの技要素を身に着け、その技で掛けていかなければならないと分かり、陰陽、十字、円、螺旋等などで技をつかうようになるのである。

技をつかえば、多少の力で頑張られても制することができるようになるし、以前の力に頼っていたときよりも、容易にできるようになるはずだ。

しかしながら、技がある程度つかえるようになって、力一杯かかって来る相手を自由に制するのは、なお容易ではない。相手の力の抵抗感があったり、相手を重く感じたりするし、場合によっては、相手の力に押さえられてしまったりもする。この段階の技遣いはまだ魄の技であり、その魄の技で相手の魄を攻撃しているので

ある。この段階を抜け出さなければならない。

それは、魄から魂への切り替えである。魄の体で技をつかうのではなく、「念」の魂でやるのである。これまでは魄が表にあったのを、魂を表に出すのである。

この「念」で自分の五体を動かし技を遣い、「念」を相手の体ではなく相手の「念」に働きかければ、相手は自分の「念」によって、自らこちらの「念」通り動いてくれるようになるのである。例えば、入り身投げ、天地投げ、二教裏などで、天地の呼吸に合わせて念で技をつかうと、相手は自分から浮き上がってくるから、力をそれほど使う必要はないので、大いに楽になる。

この「念」の力である念力を開祖は、「念彼観音力」と言われているようである。そして、合気道は、愛をもって、この「念力」（「念彼観音力」）をもって相手を全部からみ結んでしまえ、といわれている。従って、魄の体を鍛えたら、次は「念力」で魂の技を生み出す道を歩まなければならないのである。

【第268回】 宇宙の法則「真理」

合気道は技を練磨して精進する武道であるが、合気道で鍛錬している技は宇宙の法則に則ったもので、宇宙の営みを形したものといわれている。

開祖は「技はすべて宇宙の法則に合わしていなければならない」とも言われているのであるから、技を極めていくためには、この「宇宙の法則」とは何か、どういうものであるのかを知らなければならないだろう。

合気道とは何か、とかどうあるべきものなのかは、種々多様に定義されているが、合気道はそれだけ多種多様な面をもった底深いということである。その一つに、「合気道は真理の道」である、と開祖は言われている。

そしてまた、「合気道の鍛錬は真理の鍛錬であって、神業を生じるのである」とも言われる。つまり、「あらゆる真理を悉く身に行じてゆくのが合気道である」（「武産合気」）のである。

従って、「宇宙の法則」とは、一言でいえば「真理」ということになるだろうし、又は「条理」とも言えよう。つまり、「宇宙の法則」とは、宇宙万有の真理であり、条理ということになるだろう。

宇宙万有の真理を、人は神とも呼んでいると思うが、真理の鍛錬をする合気道は神

業の鍛錬ということになり、これを実践していくことによって、宇宙の力が加わり、そして終には、宇宙そのものと一致することになるだろうと修業しているのが、合気道ということになるだろう。

合気道は「宇宙の営みの御姿、御振舞いの万有万神の条理を明示する大律法であり、己の心と肉体を宇宙万有の活動と調和させて鍛錬していくもの」であり、合気道を体得したならば、宇宙の条理がわかり、また、自己を知り、分かってくるところになるのである。

【第269回】 宇宙の法則 螺旋

合気道の最終的な目的は、宇宙と一体化することだという。そのためには、宇宙を知っていかなければならない。しかし、宇宙は大きすぎて知りようがない、というのが現状である。誰も宇宙はこれだと示してくれたり、宇宙の意志や営みはこうだとは教えてくれない。そうすると、自分で一体化すべき宇宙を知っていかなければならないだろう。

ありがたいことに、合気道の技は宇宙の営みを形にしたものであると言われるわけだから、技を練磨していけば、宇宙の営みが分かるはずである。そして、それが分かれば、宇宙の法則が分かり、宇宙が分かるのではないかと考える。

それ故、宇宙の法則にはどんなものがあるのか、研究すべきであろう。技を通してその法則を見つけ、その法則が他の技や他の稽古相手にも有効で、他の動物や植物、自然など考えられる万有万物に適合するならば、それは宇宙の法則といえるのではないだろうか。

宇宙の法則は無限にあるだろうが、今回は「螺旋」という宇宙の営みが宇宙の法則の一つであろうとの考えを書いてみる。

万有万物の多くが円の営みをしているといえるだろう。星は自転したり、他の星の周りをぐるぐると円く動いている。地球は自転しながら太陽を365日で一回りし、月は地球の周りを27.32日で自転し公転している。

地球上の人や動植物は、一年365日を繰り返しながら生存している。人は朝起きて、昼間は活動して、夜は寝るの一日24時間を繰り返している。

しかし、宇宙の営みは、円だけではないはずである。なぜならば、円ははじめのスタート時点から出発して終点にくると、はじめのスタート時点に戻ってしまい、何

度ぐるぐる回っても変化も進歩もないからである。

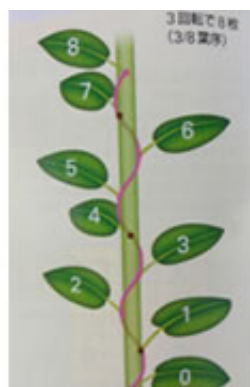
万有万物はあるものに向かって生存しているように見える。人は毎日24時間、一年365日を繰り返し生きているが、誰でも例外なく、少しでもより満足できるようにしたいと思っているし、今より少しでも良くなるだろうと期待している。それが証拠に、誰もが殺されることを否定する。もし、円の営みをしているなら、今日も明日も10年後も同じことの繰り返しだから、死んでもいいと思う人が沢山いてもいいのだが、誰もが死を避けようとする。人だけではなく、犬や猫や猛獣でも殺そうとすれば、生きようと反撃してくる。

これは円ではなく、螺旋で生きているからといえるだろう。螺旋なので、同じ一日でも昨日の一日とは違うし、来年、10年後はどんなに違うのか楽しみで生きているのである。今殺されてはその楽しみや希望が消えるので、死を拒否するし、死を怖がり、死を悲しむのであろう。

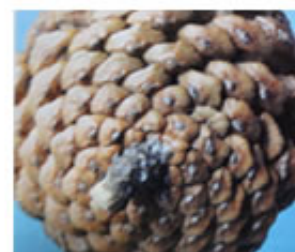
植物でも、葉は、茎にそって螺旋階段をのぼるように生えていくし、松ぼっくりやパイナップルやイチゴなどの集合果の小さな果実一つ一つは、表面に螺旋を描くように配列している。（「ニュートン」2010.3）



螺旋状の集合果



螺旋状の生える葉と茎



螺旋状の松ぼっくり

合気道でも、技は「円のめぐりあわせ」であるが、この円を螺旋でつかっていかなければならない。手を螺旋でつかわなければ、折れ曲がってしまうし、体幹からの力も出せない。体も横と縦の円の組み合わせで、螺旋でつかわないとうまく技が効かない。

また、稽古も螺旋の稽古をしていかなければならない。合気道はそれほど多くない基本技（形）を繰り返し稽古するが、円の稽古の繰り返しでは進歩がない。同じ技や稽古の繰り返しでも、昨日より今日、今日より明日が少しでも上達するように、螺旋の稽古をしていかなければならない。

人も万有万物、すべて螺旋の営みをしていると見る。これが宇宙の営みであり、宇宙の法則の一つと言えるのではないだろうか。

【第270回】 宇宙は自己の内にあるとは

開祖は「この私の中に宇宙があるのであります。すべてがあるのであります。宇宙が自分なのであります。」（『武産合気』と言われている。また、タカアマハラとは全大宇宙のことであるが、「タカアマハラも自分にあるのであります。天や地をさがしてもタカアマハラはありません。タカアマハラを天や地に尋ね求めるより、まず自己に尋ね求めることです。」と言われている。

つまり、宇宙を知るためには自分を知る事である、と開祖は言われているのである。

宇宙が自己の内にあることが分かれば、宇宙との一体化ができたことになるから、合気道の目標が達成されることになるはずである。宇宙を知るのにロケットで飛び回るのもよいだろうが、自分の中のタカアマハラを尋ねるほうがよいだろう。何とか宇宙が自己の内にあることを実感したいものである。

唯識理論では、阿頼耶識（あらやしき）という無意識の世界があるという。阿頼耶識とは、「底無しの底」というような、どろどろしたカオスの世界で、無ではなくて有ではあるが、何ひとつ「もの」が形をなしていないと言われる。

このようにカオスの状態では、「もの」はわからないが、幸いなことに「もの」がわかるようになるための「種子」（しゅうじ）がそのカオスには含まれており、その「種子」をうまく引き出せば、「悟り」の境地が開けるというのである。インドのヨガの行者は、この「種子」を引き出すために、厳しい行をしているらしい。

阿頼耶識を大宇宙と対比してみると、宇宙は無限であるし、阿頼耶識は「底無しの底」であり、宇宙は暗黒物質のような、無ではなくて有ではあるが、形を有していないカオスであり、阿頼耶識も上述したようなカオスである。

また、大宇宙は万物を無から生み出しているように、阿頼耶識もなにかものを生み出しているようである。

言語学者であり哲学者である井筒俊彦氏は、「阿頼耶識とは、第一義的には、意味が生まれて来る世界なんです。意味というのは、存在じゃない。存在じゃなくて、『記号』なんです。つまり、記号が生まれて来る場所。それが言葉と結びつくと言語阿頼耶識になる。」と言っている。

つまり、「阿頼耶識は言語を志向している浮動的流動的な意味単位の群れが自己顕

現しようとして、いつも動いている内的場所であり、自己顕現して、たまたま因縁が合えば経験的な存在の世界になってあらわれてくる世界」ということのようなのだ。

開祖は、よく古事記の文章を引用されたり、△○□という言葉遣われり、神様の名前を使われて合気道のご説明をされたが、我々には理解できなかった。もっと平易な言葉で説明して下さったらよかったのにと考えたものだが、これで、どうして開祖はあのように話されたのかが、分かるのではないだろうか。

それは開祖は、底無しの底の阿頼耶識から湧き上がってきた記号を言葉に結びつけて、お話しされたのだろうと考えられるからである。

そして、開祖の言葉は、また宇宙からの言葉ということになり、言霊ということになるのだろう。そこで「この私の中に宇宙があるのであります。すべてがあるのであります。宇宙が自分なのであります。」となるわけである。

参考文献

『武産合気』植芝盛平

『二十世紀末の闇と光—司馬遼太郎と井筒俊彦との対談—』

※井筒俊彦（1914-93 言語学者、哲学者、慶応大学教授、イラン王立哲学研究所教授 他大学教授）

【第271回】 宇宙の法則 「陰陽」

世の中のものは、互いに対立し依存し合いながら存在し、生成消滅しているという。それは見えるモノと見えないモノ、働いているモノと待機しているモノ、能動的なモノと受動的なモノ、表と裏などなどである。これを、陰陽というのだろう。具体的な例として、昔から、日・春・南・男などは陽、月・秋・北・女などは陰と、易ではされている。

世の中のもので、陰陽で構成され、表裏一体になっている例を考えると、人は起きていると寝たいと思い、寝ていれば起きたいと思い、働いていると休みたい、仕事がないと働きたい、暑いと寒いのを恋しがり、寒くなれば暑いのを恋しがる。満腹になるとお腹を空かせたいと思うし、お腹が空くと満腹に食べたい等、誰もが常に経験していることである。考えてみれば、矛盾しているし、ばかばかしいと思うが、事実だから仕方がない。

そもそも人は、生まれたときから死に近づいていくのである。生きていながら死を背負っているわけだから、表の生と裏の死が表裏一体になって生きているのである。もちろん人だけでなく、すべての生物はいうに及ばず、万有万物は形を現すと

同時に消えていく運命にあるわけだから、陰陽表裏一体にあるということになる。

地球にも昼があれば、反対側は夜であり、やがてこちらにも夜がくる。春が来れば反対側には秋が来て、こちら側にもやがて秋がくる。地球だって、春夏秋冬などちょこちょこ変わらず、春なら春、秋なら秋のままの方が楽ちんだろうと思うが、そうしないのは陰陽の対立と依存が必要だからだろう。

雨が降ればそれが水蒸気になって天に昇ろうとし、天に昇った水蒸気は降りようとする。上にあるならそのまま居着いた方がいいだろうし、下にあるならそのままの方が楽だと思うが、天も地も依存し合い、対立しながら活動している。天地にも陰陽があるということだろう。

ミクロの世界では、電子（マイナス・陰）と陽子（陽）で原子が構成され、モノができているから、宇宙にある物質も陰陽一体ということになろう。

仏典には、「煩惱即菩提（ぼんのうそくぼだい）。生死即涅槃（せいしそくねはん）。娑婆即浄土（しゃばそくじょうど）。仏凡本来不二（ぶつぼんほんらいふじ）」とあり、神の道では、「神俗本来不二」が真理であるという。また、宇宙の一切は、顕幽一致、善悪一如にして、絶対の善もなければ、絶対の悪もないという。（「霊界物語 第一巻」出口王仁三郎）ここでも対立する陰陽が一体となっている。

このように、宇宙にある万有万物は、陰陽で互いに対立し依存し合いながら存在し、生成消滅していると考え、と、「陰陽」は宇宙の法則の一つということができるのではないだろうか。

そうだと仮定すれば、合気道は宇宙の法則に則って修練していかなければならないわけだから、「陰陽」の法則に則った稽古をしていかなければならないことになる。開祖も、「合気道は、地球修理固成を顕現する息陰陽水火の結びを実行するものだ」と言われている。

合気道での「陰陽」とは、見える方、働いている方、出る方を「陽」、見えない方、待機している方、引き込む方を「陰」としていると考え。しかもこの陰陽がバラバラでなく、表裏一体で働かなければならない。

技を遣う場合は、「陽」をしっかり働かせることも大事だが、待機している「陰」には、「陽」として働くための十分な準備をさせ、「陽」が「陰」に変わると同時に「陽」として働いてもらわなければならない。「陽」には「陰」が待機し、「陰」が「陽」になるとまた「陰」に変わるので、「陽」と「陰」は表裏一体で機能することになる。

さらに、見える体を「陽」とし、見えない心を「陰」とすれば、「陰陽」を表裏一体にし、強弱変えて、この陰陽も陰陽として、対立と依存で遣うようにしなければならないことにもなるだろう。

参考資料

「霊界物語第一巻」 出口王仁三郎著

「武産合気」 植芝盛平口実

【第272回】 二重螺旋と技のずれ

技を練磨して上達していく合気道は、体の遣い方が重要である。体の遣い方をうまくしないと、宇宙の法則に則っているとされる技が身につかないからである。体は骨格や筋肉など、多くの部位から構成されているが、すべての部位を上手に働かせなければ、よい仕事はできないはずである。

まずは、手足がうまく働いてくれないといけない。手がうまく動くだけでなく、足にもうまく動いてもらわなければならないし、その上、足と手が連動して動かなければならない。

しかし、手と足が連動して動くというのは、まず、いわゆるナンバで同じ側の手と足を同時に上げたり、下ろすことであるが、これだけではロボットのような動きとなってしまう、力も出ないし、微妙な動きもできないし、また相手に動きを察知され頑張られてしまうなど、技として効かないものである。

世の中の多くのものは、何か出力したり、動作をする場合、2つ、3つのものを組み合わせて使うことが多いが、それらを少しづつずらせて使っていると思える。例えば、自転車のペダルは上下180度に分けてついており、ペダルを踏む時はそれを90度ずれ落ちた時に力が出るようにできている。また、スキーも直滑降は難しいのでジグザグに降りるが、重心はスキーに対して左か右へずらし、そのずれをスキーの回転運動で補いながら滑るという。アイススケートも同じである。このずらしでよく知られているのが、バレーボールでの時間差攻撃であろう。

合気道の相対稽古で技を掛ける場合、手と足を同時に使っても思うような結果は出ないので、そこにはやはりずれが必要であるようだ。

どの技にも手と足のずれが必要であるが、それが一番わかりやすい技に「二教裏」がある。誰もが経験するように、最後の決めで、前の足と同じ側の手と一緒に力を

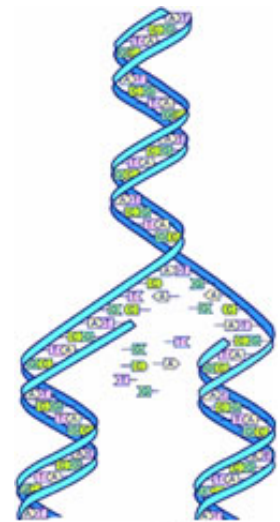
込めて落とそうとしても、なかなか決まらないものである。これは、手と足をバラバラか同時に使っているからと言ってもいいだろう。

手と足はナンバで使うものの、ほとんど同時ではあるがずらして使わなければならない。「諸手取り二教（交叉取り）」で説明してみると、まず、腹と手足をしっかり結び、弛まないようにしてから、腰腹で足を進めて着地し、少しずつ手が足の側に振られ、その手の一瞬前に足が反対側に進んでおり、その足の後に手が続く。

ここで後ろ足に重心が移ると、相手を抑えている手が上がってくるので、その手で切り落とすのである。つまり、腰腹、足、手の動きに時間のずれが生じるのである。

この腰腹と結んだ手と足が螺旋で絡み合っている動きは、二本のひもが絡み合い、しかもずれながら動くDNA（遺伝子）の二重螺旋のイメージと一致するように思える。

二重螺旋と同様、合気道の技のずれも宇宙の営みに合致しているはずである。



DNAの二重螺旋

【第273回】 技の法則

宇宙には、法則があるようだ。合気道の技は宇宙の営みを形にしたものだといわれるので、合気道の技には、宇宙の法則という法則性がなければいけないことになるだろう。

科学とは法則性を見つけていく学問という事ができよう。そして、法則性があるものは、科学的といわれて評価される。従って、評価されるということは、法則性があるということができるかもしれない。

例えば、科学と、対象にされる芸術分野での絵画にさえ、法則性があるようである。時代を先取りしている芸術は、往々にしてその時の人には評価できないものであるが、時間が経つと評価されるということがよくある。それは、当時、その絵画に何かあると思われながら、その中に法則性、合気道的に言えば、「宇宙の法則」を見つけないことができなかったが、後年それを見つけたことによって、評価されたということだろう。

合気道も、科学しながら精進していかなければならないと言われる。従って、まず合気道の技の中に、法則を見つけていかなければならない。技を発明するのではな

い。既にあるはずの法則を見つけるのである。例えば、十字、螺旋、陰陽表裏一体等などであろう。

ある技から法則を見つけたら、更なる法則を見つけていくと同時に、その見つけた法則を他の技や他の稽古相手に試し、自分の技に取り入れていくのである。例えば「足は、右左を陰陽で規則正しく遣う」という法則を一教で見つけたとすれば、これを入り身投げ等で試していくのである。それができれば、それは正しい法則となるはずだから、今度は自分のすべての技にそれを法則として取り入れていくのである。

そうやって、合気道の技の法則をどんどん取り入れていくのである。法則性があるということは、同じ条件下では誰がどこでやっても同じ結果を出すということである。

合気道同人は、合気道の技から法則を見つけ合い、ひとつでも多くの法則を身に着けるようにしていきたいものである。これを、技の練磨というはずである。

宇宙の営み、つまり宇宙の法則が、自己のうちにあるのを感じ得るのが、真の武道であるからである。もし、宇宙との一体化を夢みたいなら、このような技の練磨は不可欠と考える。

【第274回】 見えないものを見る

開祖は「相手を見てはいけない。手を見てはいけない」といわれていた。しかし、入門したてとか、初心者頃は、この教えに背き、技を掛ける際はどうしても相手を見、自分の手を見てしまうものだ。見ないと不安であるということもあるし、目で確認しないと安心できないということもあるのだろう。

しかしながら、逆に、初心者内、技の形がまだよく飲み込めない内は、相手の動きや反応、自分の手の動きや形をしっかり見た方が、がむしゃらで無頓着にやるよりいいのかも知れない。

開祖が相手や手を見てはいけないといわれたのは、本格的な稽古に入った段階でのことであって、上級者向けに語られていたと考える。

また、開祖は「目に見えざるところの世界の上に見えるように行うのが合気道である。目に見えざるところの仕事を目に見えるように仕事をする。目に見えなかったら、見えるように心を引き出す。」（合気道新聞 No.35）と言われている。またま

た禅問答のような矛盾の教えである。

それでは、この開祖の教えを、上級者としてどのようにすれば身につけることができるのか、考えてみたいと思う。

合気道は一般的に、相対で技を掛け合って稽古をする。片手取り、諸手取り、胸取り、正面打ちなどで相手と接するが、その接点での自分の手や相手の手を目で見ても、力が出ないばかりか、相手の心を感じることは難しい。相手が争おうとしているのか、ぶつかってしまっているのか、結んだのか、相手は満足しているのか等などである。相手の心を感じるということは、相手をみるということであるが、目で見てもみえないものである。

開祖が相手を見るな、見る必要はないと言われるのは、見るとそれを感じ難くなるということでもあると考える。

はじめの、相手を見ないで相手を見る段階では、相手と接してから相手を感じ、相手を見るわけだが、次の段階では、相手と接する前に相手の心を知り、相手を見ることができるようにならなければならないだろう。例えば、相手が手刀や剣を構えて立ったときや、技を掛けようとしてまだ間合（まあい）の外にある場合などである。

対峙して相手の心を見るために大切なことは、相手と結ぶことである。やっつけようとか逃げようとかする心を持つのではなく、無害である心を相手に伝えて、相手の心を出させ、そして相手がやりたいようにできるよう、少し手助けをしてあげるのである。

つまり、相手を自分の心で包み込み、結んでしまうのである。結んでしまえば、相手の心が見えるだけでなく、相手の心を自由にすることもできるはずである。相手がやりたいようにするのをお手伝いするのだから、争いどころか、感謝されることになる。

合気道で修業していけば、道場の外でも、人の心が見えるようになると考える。また、さらに精進すれば、人以外の動物、植物などの生物、日月星の心も見えるようになるかも知れない。

万有万物には何か共通した、見えなくともお互い分かり合えるものがあるようだ。見えてきたならば、その心の望むように手助けしていけばよいのだろう。それを、開祖は「愛」と言われていたのだと思う。「愛」とは、相手の立場に立って、ものを見、考え、そして実行することであろう。「愛」があるから、相手の心を引き出すことができるのだろう。

このように修行していく道が、開祖が言われる「目に見えざるところの世界の上に見えるように行うのが合気道である。目に見えざるところの仕事を目に見えるように仕事をする。目に見えなかったら、見えるように心を引き出す。」ということではないかと解釈している。

開祖はまた、相手を見るのではなく、ひびきによって全部読みとってしまうとも、また、山彦の道がわかれば合気道は卒業であるとも、いわれている。この宇宙のひびき、言霊が、見えないものが見え、聞こえないものが聞こえるということと関係があるのかもしれない。

ひびき、言霊の研究もしなければならない。道はまだまだ遠い。

【第275回】 合気道の修行

合気道は技を練磨しながら精進していく武道であるが、練磨すべき「技」がどういうものなのかをしっかりと把握していないと、練磨もできなければ精進もできないことになる。

合気道には100にも満たない基本技があるが、初めにやらなければならない練磨は、この基本技の形を身につけることである。その基本技の名前を聞いたり、技を見ただけで、その基本技の形を自分でもできるようにしなければならない。そして、この基本技の形を「取り」と「受け」で覚えながら、合気の体をつくっていくことになる。

これは誰もが通らなければならない関門であるが、あくまで入門編である。本当の技の練磨は、ここから始まるのである。

合気道の技の練磨は、技を新しくつくることでもないし、改変することでもない。合気道の技は、宇宙ができる前から存在しているといわれている。技の練磨とは、宇宙の法則に則っている技を見つけ、技にある真理を見つけ出し、それを自分の体をつかって、自分の技に取り込んでいくということだろう。そして最後は、技に自分をはめ込んでいかなければならない。

しかしながら、一つの技の形（例えば、正面打ち一教）にさえ無限と思われる真理（技要素）があるわけだから、たとえ100にも満たない基本技とはいえ、取り（攻撃法）と掛け（攻撃人数）との組み合わせで、相当の技数になるはずだ。これをひと技ひと技、個々につぶしていくのは大変なことであるし、不可能に思える。

技の練磨は、真理（技要素）を会得することと考える。この真理（技要素）を会得するという事は、その真理を見つけるということと、それを自分の体で表現できるようにするという事である。

一つの技の形の中で発見し、会得した技要因が真理であれば、それは他の技の形でも遣えるはずであるだけでなく、恐らくすべての技の形で有効であるはずである。例えば、円、螺旋、陰陽等などである。つまり、合気道の修行法というのは、このすべての技の形に適用する真理を、一つ一つ会得していくことであろう。

たかだか一つの小さな真理の発見や会得をしたところで、無限にあるだろう真理からすれば、微々たるものだと思うかもしれないが、大いに意味があるはずである。なぜならば、一つの発見でも会得でも、それはすべての技の形に有効であるわけだから、無限（ ∞ ）のものを発見、会得したことになり、他のすべての技の形でも活用することが出来るようになるはずだからである。

開祖は「修行方法を一言すれば、武は体の変化の極まりなき栄えの道ならば、一を以って万にあたる道、一より万法を生み開くクサナギの剣を練り、その責を完遂・達成せしむるにある。」といわれている。つまり、この万法を生む一が、クサナギの剣ということになるのだろう。

合気道の修行とは、万に通ずる一を見つけ、このクサナギの剣を練り、宇宙生成化育完成のお手伝いをする、ということのようだ。

参考文献 「合気道新聞 No.57」

【第276回】 息

技の練磨をして精進していく合気道において、息の遣い方は非常に大事である。息の遣い方がまずければ、技がうまくいかないだけでなく、力も出ないし、息も上がり、最悪の場合は体を壊してしまうことになるだろう。

もちろん、他の武道やスポーツ、又は踊りや演奏でも、息遣いは大事であるが、合気道の息遣いは、宇宙の営みに合わせなければならない、という教えに従わなければならないほど、精妙なものである。つまり、開祖は「水火のむすび、つまり天の呼吸と地の呼吸とを合し、一つの息として産み出してゆくのを武産合気というのであります。」といわれているのである。

それでは、天地の呼吸に自分の息をどのように合わせていけばいいのかということになる。

技を掛ける場合、息は吐いたり吸ったりするわけだが、それは日常生活の間でもやっていることである。しかし、日常生活での息遣いを、技を掛けるときにもやっていたのでは、よい技はできないので、技は効かないはずである。

しかしながら、有難いことに、開祖が息遣いをどうすればよいのか言い残されているから、その開祖の言葉から理を究め、技で試し、会得していくのが最善の道と考える。

開祖は、まず、天の呼吸と息を合わせなければならないと言われている。それから天（日月）の呼吸と地の呼吸（潮の満干）との交流をせよという。曰く「天地の呼吸は、赤玉も白玉も日月の合気によって、生命を現すのです。日月の呼吸と潮の満干の交流で、生命を造るのです。」

従って、技を掛ける際は、相手に触れるまでは息を吐く。静かに円く、ごつごつしたり、殺伐としないように吐く。これが、天（日月）の気（息）との合気ということになる。これで、相手と結んでしまうことになる。

次に、相手と接したところから、下腹に息を入れていく（開祖はこれを息をひくと言われている）。息を入れることによって、相手をくっつけてしまう引力ができるので、相手と一体化することができるようになる。

最後に、投げたり抑える際に、息を吐く。そして、この吐いた息は下腹（地）に収めるのである。

これを開祖は、「はく息は⊗である。ひく息は⊠である。腹中に⊠を収め、自己の呼吸によって⊗を⊠の上に収めるのです。」と言われている。なお、はく息⊗の米とひく息⊠の米は、引力（八大力）だと考える。

これが宇宙の営み、つまり自然な理の呼吸であり、この呼吸を身につけることによって技ができていくことになる、といわれていると考える。

参考文献 『武産合気』 植芝盛平翁口述

開祖は、天之浮橋に立たなければ武は生まれない、といわれる。天の浮橋に立たなければ、合気道の技も生まれないわけだから、何としても天之浮橋に立たなければならない。しかし、この天の浮橋がどこにあるのか、なにものなのか分からない。分からないから、立つこともできないわけだが、現実では分からなくても分からないまま、喜々として技を掛け合っている。しかし、天之浮橋に立たないでやる技は、真の技ではないということだろうから、なんとか天之浮橋を知り、天之浮橋に立って稽古するようにしなければならないだろう。

いずれにしても天之浮橋の正体を見つけなければならない。天之浮橋という言葉は開祖の時代以前からつかわれており、神道では重要な意味を持つものだったようである。例えば、垂加神道（「神は垂るるに祈祷をもって先となす。冥は加うるに正直をもって本となす」から採られた、吉川惟足が山崎闇斎に贈った名号。――に基づく神道流派）を創始した江戸時代の儒学者・山崎闇斎は「天浮橋之伝」を書いたが、それによれば「天浮橋とは、不通を通ずる義、陰陽感通の処をいう、橋箸端よみ通ず、上に立つとは、陰陽共にきつと立て感通するを云うなり」（「合気道マガジン」）とあるという。ということは、天之浮橋に立つということは、本来対照的で相容れない縦横、陰陽などの要素をひとつに結んで立つことのようなのだ。

合気道では、天之浮橋に立たされる姿は、魂魄の正しく整った十字の姿、火と水の調和のとれた世界であるという。まずは、この天之浮橋に立たなければならない。火と水とはイザナギとイザナミ、魂（心）と魄（体）、縦と横が調和のとれた十字になる、ということであろう。立った際には、心のバランスを取り、また体のバランスを取り、さらに心と体のバランスを取るということになるだろう。

開祖は「祈りも天之浮橋である」と言われているが、祈ることによって肉体と心の魂魄が正しく整いやすいことと、また、祈りの言葉を口から横に発し、鼻から縦に息の出し入れをすることで、口と鼻のところで十字になり、ここが天之浮橋になるということと解釈している。

開祖は、天之浮橋は「火と水が和合して活動する姿、火と水の相和している姿ともいう」といわれるから、天之浮橋は、相對するものが和合、相和、調和し、そして整っていることであるので、心と体が和合、調和することだろう。

また、天之浮橋は火と水のような対照力によって現れるという。だから、天之浮橋に立つ折は、火（心）と水（体）、陰と陽、上と下、前と後、強と弱、出すと引くなど、対照力を持たなければならない。対照力の片方しかないのも、対照力のバランスが崩れても、天之浮橋には立てないことになるはずである。

例えば、対照力のひとつに遠心力と求心力があるが、技をつかったり、鍛錬棒などの得物で体を鍛える場合、この対照力のバランスが重要である。よほど注意しない

と求心力でやってしまうので、天之浮橋に立てないどころか、体を痛めてしまう。特に、重いものを扱う場合は、大きな求心力（腰腹に引きつける力）が必要だが、それと同等の遠心力をつかわなければならない。求心力と遠心力の対照力のバランスがとれ、体の各部位（腰腹、肩甲骨、肘、手首等）が0（ゼロ）になれば、そこが天之浮橋ということになると考える。

そして「身と心に、食い入り、食い込み、喰いとめて、各自自分の体全体が、天之浮橋の実在であらねばならない」（開祖）といわれるから、体全体が天之浮橋になって使われなければならないということである。鍛錬棒を振って遠心力と求心力のバランスが取れて、0（ゼロ）の天之浮橋が腰腹、肩甲骨、肘、手首等にもできるということであろう。

人間の体は、十字に機能するように創られているといえよう。足底と脚、胴体と腕、手首と小手、小手と高手（上腕）、高手と鎖骨、鼻と口（縦の息、横の息）などである。「十字が天之浮橋である」と開祖は言われているから、これらの十字になっている部位は、本来、天之浮橋にあるはずである。これらは通常意識しなくとも、天之浮橋に立っているのでもうまく働いてくれるはずであるし、また、天之浮橋として使うのはそう難しくないのかもしれない。機能しないのは、カスが溜まって邪魔をしているか、心とのバランスが悪いなどという理由があるのだろう。

十字の天之浮橋に立つから、人は倒れないで立っていられるのだろう。十字が人体のどこにあるのか見てみると、まず、足底と脚・胴体が横と縦の十字になっていて、地へ縦の力を落とすと横へ手や足が上がり、十字に力が作用する。息は、鼻による縦と口による横に出入りする。

気持（心、魂）が天の息に従い、日に向かって螺旋で舞い上がり、そして、立っている地を突き抜けて月に向かって舞い降りると、自分が日と月の間にいるように感じられ、これが天之浮橋に立っていることかと思える。そのためには、天にも地にも隔たらず、体と心のバランスがとれ、体のすべての箇所は、バランスよく対照・融合し合い、気を抜かず力まず、すべてのものを吸収し融合してしまうような状態になければならないだろう。

技を掛ける際も、天之浮橋に立たないと技は掛からないはずである。技が掛る際は、必ず空白の時間がある。対象力が一方だけに偏ることなく、すべての方向からのバランスが取れているため、そこが0（ゼロ）になっており、あたかもそこに何もないように思える所と瞬間である。二教裏でも入り身投げでも、決まる瞬間は天之浮橋にあるといえるだろう。

合気道の技は、宇宙の営みに則ったものであるから、宇宙の法則に従って遣っているかなければならない。相对稽古の相手の体も、やはり十字の天之浮橋に立っている

わけだから、技で自分の体をつかう場合も、自分だけではなく、自分と相手がひとつになり、天之浮橋に立って遣わなければならないことになる。

日月の気や呼吸や宇宙の営みに、自分の心と息を合わせて技を遣うようにしなければならない。日月の気や呼吸を感じるためには、天之浮橋に立たなければ感じないようであるから、更なる精進のためにも、天之浮橋に立つ研究をしていかなければならない。

参考・引用文献：

「武産合気」 植芝盛平翁口述

「合気道マガジン・合気道の神道原理」 清水 豊

【第278回】 正勝、吾勝、勝速日

入門したてで若かったころの最大の武器は、元氣とスピードであった。技が上手で力もある先輩達と稽古する場合、こちらにあるものは元氣とスピードしかない。体当たりでぶつかり、受けは素直にすばやく取り、すばやく戻って相手の前に立つ。いくら投げられてもすばやく戻ってくると、先輩の方が息が上がってきて、真剣に対応してくれるようになるので、これで何とか一緒に稽古ができているなと思えたものである。

そんな稽古をしていると、よく開祖がお見えになり、合気道には速いとか遅いとかいう時間の長さは存在しないといわれたものだ。そこには、時間を超越した速さがあり、それを正勝、吾勝、勝速日であるといわれた。

当時は、開祖のお話は難しすぎて理解できなかったし、理解しようと努力もしなかった。この時間を超越した正勝、吾勝、勝速日もそうである。しかし、不思議なことに、開祖の話されたことの多くが耳に残っており、近年になってその言葉の重要性に気がつき、何とか理解しようと改心したところである。

開祖の演武を思い返してみても、確かに開祖の動きは時間を超越するものがあった。すばやく振り下ろされる木刀の下にあるはずの体が、一瞬の間に相手の死角にあったり、四方から突き出された槍（杖）ぶすまから一瞬に消えてしまって、突き手の後ろに立ったりと、物理的な法則に反する速さであった。

開祖は、時間を超越した速さがあること、また、それを合気道の技で遣えることを示されたわけだから、我々修行者はこの正勝、吾勝、勝速日を研究し、身に着けていかなければならないだろう。

植芝盛平伝によれば、正勝、吾勝、勝速日の言葉の意味は、「勝とうと気を張っては何も視えんのじゃ。愛を持ってすべてをつつみ、気をもってすべてを流れにまかせるとき、はじめて自他一体の気、心、体の動きの世界の動きが展開し、より悟りを得た者がおのずから勝ちをおさめている。勝たずして勝ち — 正（まさ）しく勝ち、吾に勝ち、しかもそれは一瞬の機の中に速やかに勝つ」という。

相対稽古で技を練磨し合っていると、技が効くのは速さに関係ないことが分かってくる。速い技遣いもよいが、どんなにゆっくりした動きでも、効くものは効くのである。もうひとつ注目すべきことは、遅く動ければ遅いほど、それに反比例して速く動けることである。だから、速く動きたければ、少しでも速く動けるように修練するのもよいが、できる限りゆっくり遅く動く稽古をするのもよい。

初心者の動きはだいたいが単調で、相手が大きかろうが、先輩であろうが後輩であろうが、同じ速さでしか動けないものである。動きの速さを意識して速く、そして遅くと、自由自在に変えて稽古をすべきであろうが、これは口でいうほど容易ではない。特に、通常より遅く動くのは難しい。速ければなんとか速さでごまかせるが、遅いと、もしまちがった技遣いをすれば、相手の手が離れたり、相手に力が及ばず、技が効かないことになるからである。

速く動く、遅く動くの調節は、気持だけではうまくいかない。大事なものは、息遣いである。息の調節によって、心と体を結ぶとともに、スピードの調節ができるのである。

正勝、吾勝、勝速日で時間を超越した技を遣う条件としては、何をおいても相手と結ばなければならない。相手と結べば二人の人間が一人になるわけだから、一人の人間として自由自在に動けることになる。そこには、時間的な速い遅いはなくなることになるはずだ。

相手と結ぶには、初めは気持で結ぶ「気むすび」、そして体で接して結ぶ「生（いく）むすび」が必要である。

技の掛けはじめは、この「気むすび」から始めなければならないし、技の最後まで「気むすび」していなければならない。が、技によってはこの「気むすび」を瞬時に切ることが必要なものもある。

例えば、太刀取りや杖取りなどでの捌きである。相手と気で結び続けていると、切られたり突かれたりしてしまうので、結んでいる気を一瞬で完全に切ってしまうなければならない。開祖が剣や杖を自由自在に捌けたのは、結んでいた気を切ってしまったはずである。それを開祖は、「空の気は引力を与える縄。自由はこの重い空

の気を解脱せねばならない。これを解脱して真空の気に結べば技がでる。」といわれている。

はじめの「気むすび」は、相手を引力で捉えている空の気ということになるが、この空の気を解脱すれば自由になり、時間を超越した正勝、吾勝、勝速日の技を遣えるようになるということであろう。

しかし、自由に動くといってもめっちゃめっちゃに動くのでは、正勝、吾勝、勝速日にならないだろう。そこには、法則があるはずである。それは、宇宙の営みに合致して動くことである。開祖は、「正勝、吾勝、勝速日とは、宇宙の永遠の生命と同化することである。」ともいわれている。

【第279回】 直観力と想像力

合気道は、武道である。武道は、本来は命のやり取りを前提にしたものであるから、そのため、人間が備えているすべてのものを駆使し、それをより機能すべく磨き、鍛錬しなければならない。たとえ平和の時代にあっても、合気道は武道であるということを意識して稽古をしなければ、武道の意味はなくなるし、何を何のためにやっているのか分からなくなってしまうだろう。

合気道は武道であり、命のやり取りを前提とした厳しい稽古をしなければならない。しかし、それは相対稽古の相手を厳しく傷めつけたり、決めたりしなければならないということではない。今日のような平和な時代にあっては、それはできないし、時代にそぐわない。

それではどう厳しくすべきかというと、相手に対してではなく、自分自身に対して最大限に厳しくするのである。これが現代の武道であり、武道としての合気道のすばらしいところであろう。

合気道は宇宙の営みに則った技を練磨して、精進していく武道であるが、精進するのは容易ではないし、最終目標に到達し、自分が完全に満足するのも難しい。

合気道を創られた植芝盛平翁は、最後まで稽古を続けておられたわけだが、最後の最後まで「まだまだ修行じゃ」といわれていることから分かるだろう。ましてや、我々凡人はいわずもがなである。

合気道の入門したての段階や、初心者のうちでの稽古での上達は、容易である。誰でも、ある程度の段階までは到達できるものだ。しかし、次の段階からが容易では

ない。どれほど容易でないかという、その容易でないことに気がつかないほど、容易でないのである。問題に気がつかないことが、最大の問題なのである。

ここに問題があるとか、この問題が分からないというのは、問題に気づいていて救いがあるが、問題に気がつかないのは最悪である。

その他にも、合気道の稽古で容易でないことは、技の説明がないことである。指導者は基本的に技の形を示すのみで、技や技の遣い方は自分で見つけていかなければならないことになる。しかし、これがまた難しい。なにせ技の対象が宇宙なのである。

宇宙の営み、宇宙の法則は誰も教えてくれない。宇宙は見えているようで見えてないし、宇宙がこんな営みをしていると示すこともできない。しかし、それが分からなければ技も分からないし、遣えないのである。

見えないこと、分からないこと、誰も教えてくれないことを身につけるのは、直観力と想像力だろう。合気道の修練では、直観力と想像力が必要になる。ありがたいことに開祖は、宇宙の事、技のことを、抽象的ではあるが書籍やフィルムに残して下さっている。

この開祖の言葉と技の修練から、自分の直観力と想像力を駆使して、宇宙の法則を見つけ、技で試し、改善し、そして身につけていかなければならないだろう。例えば、合気道は○に十の十字道と言われるが、十字がなぜ○になるのかは、直観力と想像力で身につける他にないはずである。

自分の直観力と想像力を信じて、直観力と想像力を磨き、それを駆使していくことも、合気の精進の道ということであろう。

【第280回】 螺旋で舞い上がる

相対稽古で基本技を掛けあっても、簡単なようでなかなかうまくできないものがある。例えば、入り身投げや天地投げで、こちらの手が相手の首に引っかかって、相手を頑張らせてしまい、争ってしまうことである。この問題は、二教、三教、四教でも同じで、問題の原因と解決策はすべて同じであるといえる。

稽古で受けの相手が倒れたからといっても、遣った技がよいとかうまいとは限らない。相手が弱かったり、力がなかったり、また、受けを取ってくれれば、相手は倒れるものだ。

たいていの場合は、稽古人同士でかけた技のできがどのくらいか、分かるものだ。時として過大評価する人もいるが、かけた技が真に効けば、かけた本人だけでなく、受け側にもそれがわかるものだ。特に受け側には、よく分かるのである。

従って、技は自分だけ満足するのではなく、相手に納得してもらえよう、満足してもらえように、かけていかなければならないことになる。

それでは、相手が納得し、満足する技遣いはどうすればよいのかということになるが、先ほどの入り身投げや天地投げでは、こちらの手が相手の首にぶつからないようにしなければならない。しかし、首にぶつかるのは手であるが、実は気持（心）もぶつかっているのである。

ぶつかるのは、自分の力と気持が、相手の力と気持に正面衝突することである。なぜ正面衝突するかというと、十字道とも言われる合気道で、息と体を十字に遣っていないか、十字の順序を間違えるからだといえるだろう。

合気道の技は宇宙の営みに則っていると言われるわけだから、宇宙の息、天地の息に合わせて、体を遣い、技を遣っていかなければならないはずである。先述の入り身投げや天地投げ、また、二教、三教、四教でも、倒したり決めたりする前に、天の呼吸に合わせて舞い上げなければならない。天地の呼吸に合ってなかったり、逆らえば、もうそこからぶつかることになる。

うまくいかないのは、縦に舞い上げるところを、横に動かしてしまうからである。また、舞い上げるためには、足の重心は舞い上がる手の反対側に置き、そして螺旋で舞い上げなければならない。正しい足の重心により、螺旋で舞い上げると、力をそれほど使わなくとも相手は舞い上がってくれるし、その顔が納得した表情になるので、こちらも満足できることになる。

相手が納得し満足するのは、相手の心である。ということは、技は相手の体（魄）を攻めるのではなく、相手の心（魂）を納得・満足させるようにすればよいことになる。つまり、魂を魄の上に置くということである。

心が満足するのは、一言で言えば、宇宙の法則、宇宙の条理に逆らわないことであり、宇宙の営みと合っているということになるだろう。

そのためには、こちらの心が宇宙の営みに少しでも近づくようにしていかなければならない。今回の例では、螺旋で天へ舞い上がるということを書いたが、これは「タカアマハラ（宇宙）のラの一言霊が六言霊を悉くふくめて天低から地低へ、地低から天低へ、螺旋を描いて常に生命をたどっているのです」（武産合気）という

宇宙の営みに合わせるためである。

天低から地低へ、地低から天低へめぐっている宇宙の螺旋の息に合わせ、そしてその螺旋の助けを借りて、技を遣うようにしたいものである。人為的な行為には限界があるし、その力はたかが知れている。

【第281回】 過去、現在、未来を胎蔵

宇宙は137億年前の過去から始まり、今、現在に至り、そして未来に向かって進んでいる。人類にも過去があり、今、現在があり、そして未来がある。これが、宇宙生命の変化の道筋であり、進化といわれている。

人も誰でも赤ん坊、子供、学生、青年などの過去があり、今という現在を生き、未来に向かって進んでいる。

人は今より以前を過去、今の先を未来と考えている。しかし、よく考えてみると、今と思っている時空は、そう考えた瞬間に過去になっているし、未来と考えていた時空は今の現在になり、そして過去になっていく。だから、人は今だけに生きているのではなく、過去と未来にも生きているといってもよいだろう。

開祖は、宇宙も人類も過去、現在、未来を胎蔵しており、それは自己の体内にあると言われている。

宇宙にも人類にも、過去、現在、未来が同居しているということになると、それは具体的にどのようなことなのか、また、合気道ではどんな意味があり、どのように技の練磨に取り入れていかなければならないのか、考えなければならぬだろう。

過去、現在、未来を胎蔵していると思えるものとしては、絵画、書、音楽、詩歌などがあるだろう。よいものは世紀や時代が変わっても、また、国や人種にも関わりなく、高く評価され続ける。マネやモネの絵、モーツァルトの音楽など、過去と現代に評価されたように、未来にも評価されるはずだから、過去、現在、未来を胎蔵しているものと言えるのではないだろうか。

そうだとすると、けっこう多くの人達が過去、現在、未来を胎蔵した仕事をしている。それは、過去、現在、未来を超越して、永遠に生きているといえるだろう。そうだとすれば、過去、現在、未来を胎蔵し、永遠に生きるようにしたいものだし、合気道の稽古もそうありたいものだ。

合気道の技は宇宙の営みを形にしたものであり、宇宙のできる以前からあったと言われるほど、古い過去の歴史がある。また、合気道は宇宙天国を建設するための宇宙生成化育のお手伝いをするという、未来に向けての使命と目的をもつものでもあり、過去と現在と未来が繋がっているといえるだろう。

合気道に過去、現在、未来を胎蔵されているのであれば、自己の技にも過去、現在、未来が胎蔵されるような稽古をしなければならないだろう。

技の練磨をして精進する合気道での技は、今を一所懸命にやるわけだが、まず、その今に過去が胎蔵されていなければならない。これまで指導者に教わったこと、開祖の教え、そして開祖が修行されたであろう柔術、剣術、槍術などなどの要素が含まれていなければならない。つまり、過去のそれらの要素が土台になっていなければならない。

過去が土台になっていないもの、過去の教えを引き継いでいないもの、過去の遺産の入っていない我流の技遣いは、過去が欠けているだけでなく、現在もそして未来にも繋がらないはずである。過去を大事にしなければ、先に繋がらない。

次に、未来に繋がり、未来を胎蔵していなければならない。例えば、知育・気育・徳育・体育・常識の涵養の完成、真善美の探求、宇宙との一体化等などであろう。それは各自異なるかも知れないが、いずれにしても、胎蔵する未来のものは、宇宙が目指し、宇宙生成化育に則ったものでなければならぬはずである。

未来を胎蔵していない技は、相手が納得してくれないし、自分も納得できないはずである。開祖の合気の技が万人に受け入れられたのは、過去を胎蔵し、そして未来を胎蔵していたからだと考える。

このようなことが、合気道は過去、現在、未来を胎蔵しており、過去、現在、未来は自己の体内にあるということではないだろうか。

合気道の稽古は、過去も現在も未来も一体化して胎蔵し、時間を超越したものになるようにしなければならないだろう。

また、合気道の稽古で、過去も現在も未来も一体化した、時間を超越した稽古ができれば、生き方も時間を超越したものに変えることができるかも知れない。

「入身転換の法を会得すれば、どんな構えでも破っていける」と言われるように、入身と転換は合気道では重要である。

はじめて入身と転換が重要だと聞いた時は、「入身投げ」とか「転換法」等を数多く稽古すればよいのだろうと思ったものだ。しかし、「入身投げ」を初心者が稽古するのを開祖はあまり喜ばれなかったこともあり、入身とはどうも「入身投げ」の入身ではないということに気がついた。

入身とは、身を入れるということである。入り身の目的は、攻撃してくる相手と結び、和合することである。相手と和合するために、相手の死角に身を入れたり、相手の中心に身を入れるのである。

入身をしない場合、相手とは和合しないので、相手を弾いたり、引っ張ったり、押しつけたりすることになり、争いになってしまうはずである。

それ故、入身は「入身投げ」での入身だけではなく、すべての技で必要になる。片手取り、正面打ち、横面打ち、胸取りはもちろんのこと、坐技の呼吸法でも、入身がないと相手と和合もしないし、技にならない。だが、坐技呼吸法での入身は容易ではない。腰がかたければ、身が入らず、手先しか動かないので、入身にはならず、押しくら饅頭（おしくらまんじゅう）になってしまう。

転換は、入身で結んで和合した相手を、自分の円の中に取り込むことと言えるだろう。転換とは、方向を変えることである。相手と結んだら十字に方向を変え、まず相手と自分の共通の円（接線）を進み、そして自分の円に取り込んでいくのである。

ただし、転換するのは体だけでなく、気持（心）も一緒に転換しなければならないのだが、これが簡単ではない。気持が相手や相手が接している箇所に、居着いてしまいがちになるからである。意識して、繰り返し稽古をするほかはないだろう。

合気道の技の鍛錬は、相対稽古で攻撃をしてくる相手である他人と結び、二つの物体が一つに和合し、一体化して技を生成化育していくものであろう。そのためには、この「入身、転換」は合気の基本であり、不可欠である。

合気道は、△○□（三角、円、四角）とも言われるが、入身は△、転換は○、そして技に収まったところが□ということになるのではないかと考える。

開祖は「合気道は形はない。形はなく、すべて魂の学びである。」（「合気神髄」）といわれているが、これは確かに合気道の一面であろう。

開祖はまた、合気道を己の心を宇宙万有の活動と調和させる鍛錬、といわれている。あるいは、己の肉体そのものを宇宙万有の活動と調和させる鍛錬ともいわれ、魂だけの学びではなく、肉体（魄）の学びでもある、といわれている。

人は魂や心だけでは生きていけない。肉体が必要であり、重要である。魂を入れる器が必要なのである。

人が生きていくためには、この他にも、肉体のために衣食住が必要になる。そして、衣食住を確保するためには、お金が要る。従って、合気道で魂を学ぶにしても、経済も大事である。

開祖も、経済も大事であると常々いわれていた。合気道の稽古をしても、己の仕事を一生懸命にやり、社会のためにならなければならない、といわれていた。「世の中はすべて根本は経済であります。経済が安定して始めて、そこに道が開けるのであります。」（「合気道新聞」）といわれているのである。

確かに、経済的にうまくいっていなければ、生活もままならないだろうし、稽古に来ることもできない。経済が安定してこそ、稽古ができるのである。

経済は大事であるが、それが生きる目的になってしまうのはだめだし、また、金や物の物質を追い求めるだけの経済ではだめで、精神が伴わなければならない。金さえ獲得できればよいとばかりに、自分の真の気持ちを無視したり、他人を悲しませたり、不幸にするのはまずいだろう。他人を悲しませたり、迷惑をかけるだけではなく、自分自身もだめにしていく。

金を得るのは、相手や先方に喜んでもらった結果の報酬ということにならなければならないだろう。

開祖は、さらに「我が国の経済は精神と物質と一如であります」、つまり経済は精神と物質が一体でなければならない、といわれている。

金やモノを持つ者は、それに見合った豊かな精神を持って欲しいものだ。豪邸から貧相な顔立の住人が出て来るのを見かけたり、高価な衣装で着飾った人が陳腐な会話をしているのを聞くと、がっかりする。

確かに人も、また社会も、経済の上に成り立っている。しかし、経済の根本にあるのは、愛ということではないだろうか。愛とは、相手の事を考えることといえる。

愛の欠けた経済は、いずれ破綻することになるだろう。武道も同じで、愛が欠けた武道はいずれ滅びるはずである。

経済も武道も、精神と物質、心と肉体の一如であり、その根底には愛がなければならぬということだろう。

参考文献 合気道新聞 (昭和25年4月14日の例会での開祖のお話)

【第284回】 道 歌

わが国の武道の多くで、古来よりその奥儀や教えが三十一文字の道歌に伝えられている。奥儀であるから、難解ではあるが、その意味がわかった時は感銘を受ける。道歌だからこそその感銘であろう。いかに詳細に文章で説明しても、その感銘はないだろうし、またその真髄を把握するのも難しいだろう。簡潔な道歌という詩的表現だからこそ、直感的に道の奥儀を伝えやすいのだろう。

道歌は、道を究めた先人が、厳しい修行、貴重な経験、天才的な閃き、摩訶不思議な体験などを、簡潔に道歌に圧縮したものであるから、我々後進の心を打ち、その境地やレベルに近づくべく、さらなる修行の励みとなるのだろう。

武道の達人、名人は、多くの歌（道歌）を残している。合気道開祖植芝盛平翁も、道歌をたくさん残されている。しかし、その多くは難解である。

なぜ理解できないのかは、明白である。読み手の我々が、まだ未熟でありレベルが低いからである。一つでも多く分かるようにさらに修行して、レベルアップを図っていくしかないが、そのためにも、道歌にいられていることを目標にし、また守って稽古すべきだろう。

開祖の道歌のいわんとすることを目指して、稽古をすればよいわけだから、まずは道歌がいわんとすることを見つけなければならない。

合気道の最終目標は宇宙との一体化ということであるようだが、そこに到達するためには、合気道とは何かという思想面でのレベルアップ、練磨する技のレベルアップ、そして正しい修行が必要であり、それぞれの極意が欲しいところである。

そこで、開祖の道歌を、思想、技、修行法というテーマで分けて見たいと思う。テーマ毎で求める極意の意味は、次のように分けることもできるだろう：

1. 思想：合気道とは何か。合気道の目指す道はどこにあるのか。どうすればその道を進めるのか。
2. 技：どうすれば技がうまくなるのか、技をどうつかえばいいのか。
3. 修行法：どのように修行すればいいのか。

いくつかの道歌を独善的に選んで、上記のテーマで分類してみる。

1. 思想：

- ありがたや伊都とみづとの合気十ををしく進め瑞の御声に
 - 声も見ず心も聞かじつるぎわざ世を創めたる神に習ひて
 - 合気とは解けばむつかし道なれどありのままなる天のめぐりに
 - 武産は御親の火水（いき）に合気してその営は岐美の神業
- <解説>合気道は十字の道であり、宇宙の営みを形にしたものであるというのが、合気道の思想の根本であるということだろう。

2. 技：

- 太刀ふるひ前にあるかと襲ひ来る敵の後に吾は立ちけり
 - 右手をば陽にあらわし左手は陰にかえして敵をみちびけ
 - 教には打突拍子さとく聞け極意のけいこ表なりけり
 - 真空と空のむすびのなかりせば合気の道は知るよしもなし
- <解説>入身転換、陰陽、表技が重要、真空の気と空の気等が技の極意であるということであろう。

3. 修行法：

- 又しても行詰るたびに思ふかないづとみづとの有難き道
 - 世の中を眺めては泣きふがいなさ神の怒りに我は勇みつ
 - 合気とは筆や口にはつくされず言ふれせずに悟り行へ
 - つるぎ技筆や口にはつくされず言ふれせずに悟り行へ
- <解説>修行しているとくじけることもあるが、道はあるし、導きもある。迷わず淡々と目標に向かって修行しなさいということだろう。

道歌は極意を詠んでいるのだから、3つに分類したとしても、すべて極意である。それが証拠に、この道歌のひとつでもそれに反したことをやれば、うまくできないだろうし、合気之道は進めないはずである。

道歌は頭で理解しようとしても理解できないか、難しいはずだ。道歌は、感じなければならない。道歌を作った人の心に、感動し共鳴できなければならない。

【第285回】 技を出す

稽古を長年やっていると、誰でもかならず大きい壁にぶつかるはずである。長年と

は、稽古を始めたときから、やがて壁が立ちはだかり、どうしてよいか分からなくまでの年である。長年といっても、人によって異なるだろうが、一般的には20年、30年ぐらいだろう。

稽古を始めてから10年ぐらいは、技を覚え、合気の体をつくるので精一杯であろう。

体もでき、力もつき、技も覚えて、そして二段、三段になってくると、稽古相手を気持ちよく投げたり、抑えたりすることができるようになり、合気道の技はできたと思うようになってくる。

あとは、技を繰り返し稽古をすれば、いずれ名人・達人になれるのではないかと張り切って稽古に励むだろう。もちろん、うまくいかなかったり、相手が動かなかったりする場合もあるが、まだ稽古の年数が少ないから、もっと稽古を続ければうまくできるようになるはずだと自分を納得させる。

稽古を20年、30年と続けていると、たいていの稽古相手には技が掛るようになるだろう。しかし、時として相手がすこし頑張ったり、相手が大きかったり、力があったりすると、技が掛らないどころか、持たれた手を動かすこともできなくなってしまうことがある。

それが再三続くと、考え込んでしまうだろう。これまでの20年、30年の稽古は何だったのか、このままで今までと同じ稽古を繰り返し続けていったらいいのか、変えなければいけないとしても、どう変えればいいのか、等と考えるだろう。これが、大きな壁であり、ここで多くの人が挫折するようだ。

体力のある相手に、手を掴ませて技を掛けようとして、掴ませた手を力づくで動かしても、動くはずがない。片手で相手の体重60キロ、70キロを動かすことなどできないという事は、考えればわかることである。これまでの稽古でやってきたのは、そういう稽古であった。初心者や受けを素直に取ってくれる相手には通用するが、真剣に稽古している相手には通用しないはずである。

そんなに稽古をしてきたはずなのに、なぜしっかり掴まれた手を動かすことができないのか。理由は簡単である。合気道の「技」をつかっていないからである。というと、技はつかっていると反論するだろう。掴まれた手で片手取り四方投げや二教の技を形通りにやろうとしたが、駄目だったのだと。

つまり、「技」と技の形（通常の武道では「形」という）の違いがわかっていないのである。宇宙の法則に則った「技」をつかわなければ、力を制することも、体力のある相手を自由にすることも、できないものである。力には、それ以上の力か、

「技」で、対抗しなければならないものだ。

具体的に説明すると、手先が痺れるような腕力で手を抑える相手を自由に動かし、技を掛けるためには、先ずは、持たれた手を十字に、そして円く動かすことである。つまり、親指が上になっている手の平を横に90度（例、四方投げの場合は手の甲が上になるよう、呼吸法の場合は手の平が上になるよう）回すのである。この円の動き（縦の円とする）で相手がくっつき、相手の力みを取ってしまうのである。そして、この縦の円の動きの後に、肩や腰腹を支点にした円の動き（横の円）で手をつかえば、多少体力がある相手でも、自由に制し導くことができるはずである。

合気道は円の動きのめぐり合わせと言われる。この円の動きに気持を入れていくと、「技を生み出す仕組みの要素」（技要素）が生じ、「技」が出るのである。その上、「技」は無限に出るというのである。

これを開祖は「円の動きのめぐり合わせが、合気の技であります。技の動きが五体に感応して、おさまるのが円の魂であります。円を五体の魂におさめると、技を生み出す仕組みの要素を生じます。生むは無限であります。」（合気神髄）と言われている。

技を出すために最も大事なものは、「円の動き」であるようだ。まずは、力の強い相手にしっかり持たせて、円（縦の円）で試してみるとよいだろう。技を出すことができれば、次の技、技要素を見つける出発点にもなるはずである。

【第286回】 合気十（あいきどう） （道歌1）

第284回で道歌について書いたが、道歌とは言葉や文章では説明し難い極意や奥儀を、三十一文字（みそひともじ）で詠んだものである。簡潔ではあるが、一文字一文字に深い意味がり、そしてその難解の文字が組み合わせられているため、非常に難解である。難解なのは文字の意味だけではなく、そのレベルでなければ理解することが難しいということである。

さらに難しいのは、文字や言葉を追うだけではだめで、感じなければならないことである。道歌が詠われたのは、そこに感動があったからであろう。感じる、つまり感動するためには、道歌をつくられた方の心に共鳴しなければならないということであろう。

そのように道歌に感動し、道歌から奥儀や極意を得るのは難しいわけだが、開祖の

道歌が難しいからといって逃げていては、合気道の精神にも反するし、開祖も悲しまれるはずである。

合気道の奥儀と極意は、道歌にあるといってもよいだろう。まずは、技の練磨と同じように、正面から魂魄でぶつかることから始めなければならないと考える。解る解らない、失敗するしないは、ぶつかってやってみてからのことである。一つの解釈ができたなら、誰か（筆者も含む）が後でこれに足したり引いたり消したりして、完成に近づけていけばよいだろう。

とりあえず、開祖が詠まれた道歌に挑戦していってみることにしよう。取り上げる順序やタイミングには、意味も規則性もない。

まず今回は第一回目として、

ありがたや 伊都とみづとの合気十 ををしく進め 瑞の御声に
を取り上げて、解釈を試みてもう一度にしよう。

解釈に当たって、まず、文字の意味を調べなくてはならない。それを解釈してみる。

- 伊都とみづは、厳（いず）と瑞（みず）である。
- 厳（いず）は経（たて）、瑞（みず）は緯（よこ）で、厳と瑞で十字である。
- 合気十の十は、道（とう、どう）であり、合気十は合気道になる。開祖は、合気道を十字道とも言われているように、十字が根幹にある。
- ををしく（雄々しく）進めは、勇ましく進みなさい、専念して進みなさい
- 瑞の御声は、瑞の神様（豊雲野大神、イザナミ大神、建速須佐之男大神）の御霊

注：「瑞の御霊の神に、宇宙創造神の「スの大神様」が両手を降ろされ、エネルギーを注がれている」との教えが大本教にある。

従って道歌の大意は、

「厳と瑞の十字から成る合気道はありがたいものである。宇宙創造のエネルギーを受けている瑞の神様の声を感じつつ、合気の道に専念して進んでいきなさい」となるだろう。

開祖の道歌には、この歌の他に次の2つの歌に十字（十字道、合気十）が詠われている。合気道を修行する上でいかに十字が重要なのかを示されていると思うし、十字が分からなければ合気道も解らないということだろう。

天地の 精魂凝りて 十字道 世界和楽の むすぶ浮橋

（試解釈：天（縦）と地（横）の魂でできている十字の道は、世界を完成にむすぶ浮橋である）

千早ぶる 神の仕組みの 合気十（どう） 八大力の 神のさむはら

（試解釈：強大な神の仕組みである十字の合気の道は、大きな力（動、静、引、弛、凝、解、分、合などの引力である八大力）をもつ神様が、すべての邪気を一瞬にして浄めてしまう神業である。）

（注）：千早ぶるは、神にかかる枕詞

さむはらは、いかなる業をも、一瞬にして浄めてしまう神業

【第287回】 合 気 （道 歌 2）

道歌は極意や奥儀を詠っているわけだから、難解ではあるが、じっくりと詠み込んでいかなければならない。しかし、頭だけで理解しようとしても、恐らくギブアップということになるだろう。単語の一つ一つの意味などは知識として頭を使う事になるが、大事なことは体で感じる事、つまり作者の心と結ぶことではないだろうか。

合気道という名称にもなっている「合気」についての説明や解釈は、ないに等しい。「合気」とは何か、についての、誰もが納得できる明確な説明がないのである。

唯一、「合気」とはどういうものなのかを示されているのが、開祖の道歌であろう。従って、「合気」とはどういうものかを知るためには、開祖の道歌を研究するしかないだろう。

「合気」がどういうものなのか、最もわかりやすく詠われていると思われる歌は、次のものであろう。

合気とは 万和合の 力なり たゆまずみがけ 道の人々

この歌から、まず、「合気」は力であり、その力とは万（よろず）に和合する力である、ということが分かる。つまり、腕力や肉体的な力ではないということである。

合気道の修行の目標は、宇宙との一体化であるから、「合気」とは宇宙と和合する力ということにもなる。従って、万（よろず）とは、宇宙であり、万有万物である。また、宇宙とは時間と空間という意味であるから、「合気」は過去現在未来の宇宙、万有万物と和合する力ということになるだろう。

このほかに、開祖の道歌で「合気」とは何かを示されているものとして次の歌があるので、そこから「合気」の意味をさらに探してみよう。まだまだ自分のレベルが低いので、よく分からないところも多いが、敢えて挑戦してみる。

合気とは 神の御姿 御心ぞ いづとみづとの 御親とほとし

（試解釈：合気とは、神様の姿であり心である。縦横（厳・瑞）十字に働いて下さる神様は貴いものである）

合気とは 筆や口には つくされず 言ふれせずに 悟り行へ

（試解釈：合気とは、ものではないので形がなく、文章でも、言葉でも説明できない。悟っていくしかない）

合気とは 解けばむつかし 道なれど ありのままなる 天のめぐりに

（試解釈：合気とは、解釈しようとするれば難しいものだが、宇宙の営みのありのままの姿である）

合気とは 愛の力の 本にして 愛はますます 栄えゆくべし

（試解釈：合気の力のもととは愛であるから、合気によって愛がますます繁栄するようにしなければならない）

合気にて よろず力を 働かし 美しき世と 安く和すべし

（試解釈：合気の力を万有万物に働かして、美しい楽園をつくっていかなければならない）

いきいのち 廻り栄ゆる 世の仕組 たまの合気は 天の浮橋

（試解釈：生き死にを繰り返して、螺旋で完成を目指す世の仕組みを成すのは、天の浮橋に立つ魂の合気である）

天地（あめつち）は 汝れは合気と ひびけども 何も知らずに 神の手枕

（試解釈：これが合気だといっても、天地は何も知らないように横たわっている。または、天地は私に和合が大事といっているが、気付かないまま、神様のものである天地を手枕として安心して横たわっている）

武産は 御親の火水（いき）に 合気して その営は 岐美の神業

（試解釈：引力は、宇宙の縦と横（火と水）の息と和合し（合気して）、その働きはイザナギとイザナミの螺旋（十字）の神業となる）

天地人 合気になりし いづの道 守らせ給え 天地の神

（試解釈：天と地と人が（縦に）結び合った道を、天地の神よ守って下さい）

日地月 合気になりし 橋の上 大海原は やまびこの道

（試解釈：天地人が和合して結び合えば、そこは天の浮橋となり、宇宙のひびきが響き合うところである）

火と水の 合気にくみし 橋の上 大海原に いける山彦

（試解釈：火と水の相和している天の浮橋では、まわり中で宇宙の響き（山彦）が活きている）

ふとまにと 神習ひゆく みそぎ業 神の立てたる 合気なりけり

（試解釈：宇宙の法則を神に習っていくみそぎの業は、神様がつくられた合気なのである）

この他にも「合気」の道歌はあり、開祖は多くの「合気」に関する道歌を詠われている。開祖はこの難解で説明が難しい「合気」ということを大事に考えられ、何とか後進に伝えたいと思われていたことが伺える。

これらの道歌から、「合気」とは何かを抽出すると、「合気」とは次のようなものではないだろうか。

○過去現在未来の宇宙、万有万物と和合する力 ○神様の姿であり心であり、縦横（厳・瑞）十字に働く ○形がなく、文章でも、言葉でも説明できなく、悟っていくほかないもの ○宇宙の営みのありのままの道 ○もとには愛がある ○魂（たま）であって、天の浮橋に立たなければならない ○天地、宇宙から見ればごく当然のこと ○天知人を結びつける ○日地月を和合させる ○火と水を相和する ○神様がつくられたもの

確かにこのように「合気」とは何かということを見ていくと、「合気」を一言ではいい尽くせないものだし、身につけるのも容易ではないことがわかる。

しかし、これらの道歌から、「合気」とは何かを取えて言わせてもらうならば、万（よろず）和合の力、宇宙と一体化する力、ということであろう。従って、合気道は「合気」の道であるから、万に和合する道であり、宇宙と一体化するための道ということになるはずだ。

【第288回】 宇宙の法則

合気道の技は、宇宙の営みを形にしたものであるから、宇宙の条理、宇宙の法則に則っていなければならない。これを開祖は、「合気道は、宇宙の営みの御姿、御振舞いの万有万神の条理を明示する大律法であり、万有の条理を明示するものである」といわれている。

さらに、「技は、すべて宇宙の法則に合していなければならないが、宇宙の法則に合していない技は、すべて身を滅ぼすのである」と、宇宙の法則ということもいわれている。

また、開祖は、「合気道は、合気道は宇宙のいとなみが自己のうちにあるのを感じ得るものである。合気道を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、『我はすなわち宇宙』なのである」と、宇宙を説明されている。

宇宙は自分で感じ、宇宙と一致させることができるといわれているのである。とすると、宇宙や宇宙の法則とは、137億年の彼方にだけあるのではなく、もっと身近なもので、意外とわかりやすいものなのではないだろうか考えていた。

NHKのテレビ「コズミックフロント〜ホーキング博士の宇宙 時間旅行（タイムトラベル）は可能か？」を見ていたら、英語で「宇宙の法則」をRule of everythingと訳していたようだった。そこで、宇宙とはEverythingだと考えてみればよいのではないかと考えた。

Everythingとは、「すべて」「よろず（万）」であるが、それは例外がなく、まますばいもなく、平等に扱われる、時間も空間も超越した万有万物である。ここには、愛が感じられる。この愛が宇宙(Everything)の元であり、そして合気道の精神となっていると考えることができる。

従って、宇宙の法則、Rule of Everythingとは、例外なく万有万物に適用される法則ということになる。自分自身だけではなく、他人、周りの動植物、生物、無生物、それに今のものだけではなく、過去も未来も適用する法則である。

宇宙をEverythingとすれば、これまで開祖がご説明されてもよく解らなかったことが説明できるようである。

例えば、開祖の言葉、

- 「合気道は宇宙のいとなみが自己のうちにあるのを感じ得るものである」
- 「技は五体のひびきと宇宙のひびきと気結び、緒結びし、千変万化する」
- 「高天原（宇宙）は、天を探してもない。自分にある」
- 「人というのは、造化器官であることを知り、全大宇宙と己れとは同じということを知らなくてはいけない」
- 「この私の中に宇宙があるのであります。すべてがあるのであります。宇宙が自分なのであります」
- 「自分を知るということは宇宙を知ることになるのです」

等などである。

これらの宇宙にEverythingを入れかえてみると、とっつき難かった宇宙が身近でわかりやすくなるだろう。

合気道の修行の目標は、宇宙との一体化である。宇宙と一体化するということは、とどのつまりは、Everything（万有万物、万有万神）と一体化するということではないだろうか。逆に言えば、Everythingと一体化できれば、宇宙との一体化ができ合気道の卒業ということになるだろう。

しかし、これはそう簡単ではないし、できるという保証もない。宇宙の法則に合う技、Everythingに矛盾しない技を練磨して、精進するしかないだろう。

【第289回】 気 （道歌 3）

合気道という名前はすばらしいと思う。これは、気を合わせる道ということだろうが、よく考えてみると、合気道という語をよく解らないまま使っているのではないだろうか。別に意味がよく解らなくても、稽古をやっているのだからよいだろうが、合気道の意味が解って合気道の稽古をやっていた方が、より上達するはずだ。

しかし、「気」がどんなもので、どのような働きがあるのか、具体的な説明はないようで、理解が難しいかもしれない。今回は、この「気」について考察してみたいと思う。

「気」に関する具体的な説明はないようだが、次の開祖の道歌にそのヒントがあるように思われる。

こんげんの 気はみちみちて けんこんや 造化もここに はじめけるかな
(根元の 気は満ち満ちて 乾坤や 造化も ここに始めける哉)

この意味は、「物事の一番の元になっている気が充滿しているが、天地や神もここから出現されたのだなあ！」ということだろう。

この歌からは、「気」とは万有万神の元、万物が生じる根元であり、生命の原動力となる勢いがあり、見えないが宇宙に充滿しているもの、ということになるのだろう。一言でいえば、気とは宇宙生命力ということになるだろう。

「気」を宇宙生命力とすると、「合気」とは宇宙生命力と和合すること、一体化すること、ということになり、「合気道」とは開祖がいわれているところの、宇宙と一体化するための精進の道、ということになる。

開祖は「合気の稽古はその主なものは、気形の稽古と鍛錬法である。気形の真の大なるものが真剣勝負である」といわれているが、ここで気形というのは、宇宙の生命力、宇宙の営みを形にした技、ということになるだろう。

なお、「気の御わざ」を詠った歌は三首あるが、「気」を詠ったものはこれ一首だけである。

【第290回】 天之浮橋（道歌4）

開祖は、合気道の技の練磨をするためには、まず天之浮橋に立たなければならないといわれた。そして、その天之浮橋を「丁度魂魄の正しく整った上に立った姿です。これが十字なのです。」などといわれていたが、当時は天之浮橋とはどういうものなのか全然理解できなかった。

しかし、開祖が天の浮橋に立たなければ合気道の技を遣えないし、技の練磨もできないといわれているのだから、合気道を修業する者は何とか身につけなくてはならない。

最近、開祖がよくいわれていた天之浮橋が解らなければ、確かに技を身につけていくことはできないということが解ってきた。例えば、天之浮橋は十字であるといわれるように、手足の五体を十字につかっていたいかなければならないし、体力や魄力に頼んでやっても限界がきてしまう。やはり体と心の魂魄がバランスよくつかわれなければ、技も効かないし、日常生活にも問題を起こすことになるよさだということがはっきりしてきた。

開祖は、悟らなければならないことや奥義などの大事なことを道歌に歌われているので、この天の浮橋を道歌で探してみた。すると、五首の道歌に詠われていた。これでも天の浮橋は重要なことがわかるし、絶対に身につけなければならないこと、避けて通れないものだということがわかるだろう。

天の浮橋を読んだ道歌で、「天の浮橋」とは何かを研究してみることにする。

天地の 精魂凝りて 十字道 世界和楽の むすぶ浮橋

試訳：天地は精魂が十字に満ちており、十字道（合気道）は世界を和楽に結ぶ この十字の天之浮橋の上に立たなければならない

天の浮橋は、十字である

いきいのち 廻り栄ゆる 世の仕組 たまの合気は 天の浮橋

試訳：生き死にを繰り返して、螺旋で完成を目指す世の仕組みを成すのは、天の浮橋に立つ魂の合気である

天の浮橋で、魂の合気ができる

むらきもの 我れ鍛えんと 浮橋に むすぶ真空 神のめぐみに

試訳：懸命に鍛えようと天之浮橋に立ち、真空の気と結べば、神様が恵み（教え）を下さる

天の浮橋で、（空の気を離脱して）真空の気と結べる

世の仕組 国のみ親の 命もて 勝速日立つ 天の浮橋

試訳：世の仕組みを整えるために国づくりの神様のご命令を持って、時間を超越した速さ「勝速日」が立つのは天の浮橋である

天の浮橋には勝速日（時間を超越した速さ）がある

みちたりし 神の栄えの 大宇宙 二度の岩戸は 天の浮橋

試訳：神の栄で満ちている大宇宙は、天の浮橋で二度目の岩戸開きとなり、魂が表になる世になる

天の浮橋で、岩戸開きができる

これらのことから、天の浮橋とは、一言でいえば、「バランス」ということになる
と考える。上下、縦横、魂魄、八大力等などのバランスが取れていることや所とい
うことであろう。

バランスを取るために、天の浮橋に立って稽古をし、十字を身に着け、真空の気と
結び、勝速日を会得し、岩戸開きをして、魂を表に出す修練をしていくことであ
る。

【第291回】 山彦（道歌5）

開祖は、山彦の道がわかれば合気は卒業だ、といわれていた。従って、山彦の道
は、合気道にとって大事なことであるといえる。

以前にも書いたが、山彦の道とは宇宙と共鳴する道であり、合気の道ということに
なると考える。山彦の道をそう定義して、道歌を解釈してみると、山彦の道がさら
に解るのではないだろうか。

天地に 気結びなして 中に立ち 心構えは 山彦の道

試訳：天地と気結びして、天と地の間に立ち、宇宙のひびきを聞くのが、山彦の道
である（または、宇宙のひびきを聞こうとすることが、山彦の道である）

おのころに 気結びなして 中に立つ 心みがけ 山彦の道

試訳：大地に気結びして、天との間に立ち、（宇宙のひびきを聞く）山彦の道で心
をみがきなさい

ことだまの 宇内にたぎる さむはらの 大海原は 山彦の道

試訳：宇宙のひびきは天下（世界）に満ち、森羅万象の気を整えて世の歪みを正道
にもどす大海は（宇宙のひびきを聞くために最適な）山彦の道

火と水の 合氣にくみし 橋の上 大海原に いける山彦

試訳：火と水の相和している天の浮橋では、まわり中で宇宙の響き（山彦）が活きている

天地人 和楽の道の 合気道 大海原に 生ける山彦

試訳：天地人が和合し楽しむ道が合気道であり、大海に宇宙のひびきが響き合っている

日地月 合氣になりし 橋の上 大海原は やまびこの道

試訳：天地人が和合して結び合えば、そこは天の浮橋となり、宇宙のひびきが響き合うところである

山彦はいろいろなことを教えてくれるようである。これからも、宇宙の響きが聞けるように、山彦の道を目指さなければならない。

【第292回】極意の稽古は表（道歌6）

合気道の稽古は相対で、左と右、表と裏と技の形を4回繰り返して、取り側が技を掛け、受け側が受けを取っていく。表というのは、おおざっぱにいうと、自分の立ち位置から前へ前へ進み出て仕掛ける技法、裏は相手と接したところから相手の力を流し、転換して仕掛ける技法をいうことになろう。

技の表と裏の難しさは技により、また人により多少の違いはあるかも知れないが、一般的には表の方が難しいはずである。ふだんは表が難しいなどとは考えないで、何となくやり、はっきり区別していないようだが、意識してやってみると、表の難しさがわかるはずである。

基本技で表の難しさを見てみると、一教、二教、三教、入り身投げ、回転投げ、天地投げ等は、表をきっちりやるのが難しいものである。これらの技は、裏の方が断然やりやすいはずである。

表はなぜ難しいかと考えてみると、表は前に進んで行く技法なので、気持と肉体が相手とまともにぶつかってしまい、相手を頑張らせたり、自分の動きを止めてしまう危険性があるからである。

ちなみに裏は相手と接したところから転換し、相手の力を流すので、表ほど力をつかわなくてもよいだろう。そのためか、人は表ができないときや、好きに技をやる

場合には、裏をやりがちであるか、裏っぽい表をやるようである。

合気道の技は表と裏があるが、主(しゅ)になるのは表である。しかし、表は確かに難しいし、大変である。大変というのは、体を裏より多く動かしてつかわなければならないということである。重心は左右の足を規則的に移動しなければならないし、体を十分に面で左右に転換しなければならない。

裏の場合は、これが多少甘くても何とかできるようだが、表はそれが厳しい。例えば、その典型的な技として入り身投げがあるが、腰が十分切れて、腰が手と足と一緒に動かなければ難しい。一教の表、二教の表、三教の表も同じである。これらの技の表ができれば、裏もできるはずだが、裏ができて表ができるという保証はない。

表が主であり、大事であるというのは、私が独善的に言っているだけではない。開祖が言われているのである。

開祖は、

教には 打突拍子 さとく聞け 極意のけいこ 表なりけり

(試訳：教えには、打ったり突いたりしてくる拍子をよく聞きなさいとあり、それも大事だが、極意の稽古は表である)

と道歌で詠われている。極意の稽古は表なのである。難かしい表から逃げずに挑戦していくべきだろう。

【第293回】陰陽のめぐりあい（道歌7）

合気道の技の練磨では、手で相手をくっつけたり、崩したり、技を掛けたりするので、手は重要な働きをする。しかし、これらの手の働きのほかに、知らなければならない大事な手の働きがある。

合気道では本来どんな体勢でどこを掴まれても、技で制することができなければならないが、それでは説明が煩雑になるので、右半身での体勢とする。刀を差した武士の基本的な体勢で、手と足は右が前にあり、左手と左足は後にあることになる。

ここで前にある右手を、相手が右手でも左手でも掴んでくるとすると、掴まれた右手で動かそうとしても、相手がしっかり掴んでいればなかなか動かせないものだ。なぜ動かないのか、冷静に考えてみればすぐ分かるはずだが、人は考える代わりに、力をこめてがむしゃらに動く方を選択してしまうからのようだ。

相手の掴んでいる手と掴まれているこちらの手の力は、手と手の同質で拮抗した力であるから、お互いに頑張れば争いになってしまう。

それでは、どうすればよいのかということであるが、右手を取られたら、その掴まれている接点を支点にし、反対の左手（足、腰、肩と共）を動かして、技を掛けていくのである。片手取りの転換法、天地投げなどがうまくいかない原因は、ここにあるといえるだろう。

また、正面打ちの場合などでも、手刀が相手と接したところから、右手を押ししたり動かさないで、左手を動かすのである。

例えば、正面打ち入り身投げの場合に、右手で相手の打ってくる手刀を螺旋で受けてくっつけたら、右手はその接点から離れないようにしながら、後に控えている左手で、相手の横腹を打つようにしながら、襟首を掴むまでを一つの軌跡を描くようにする。次は左手が前になり、右手は後になる。右手の陽が陰にかわり、左手の陰が陽にかわるのである。

つまり、相手を導くためには、右の手は陽として前に出すが、実際には後にある陰の手を陽として働かせなければならないのである。

この奥義を開祖は道歌で、

右手をば 陽にあらはし 左手は 陰にかへして 相手みちびけ
と詠まれている。

相手を倒そうと思ったり、ぶつかって争いになると、陽だけに頼った陽・陽の手づかいになってしまい、相手を導くことはできない。陽の次は陰、その陰が陽になり、その陽が陰に変わるを繰り返す陰陽のめぐりあわせで、手をつかわなければならない。

また、別な見方をすると、陽には陰が内在し、陰には陽が内在し、いつでも陰陽にかわれる陰陽表裏一体であるということもできるだろう。

【第294回】宇宙との一体化、万(よろず)和合（道歌8）

合気道の最終目標は宇宙との一体化であるが、そのために、技の練磨を通して精進していかなければならない。しかし、技、そして技の練磨とはどういうことなのか

が分からなければ、精進のしようがないし、宇宙との一体化の可能性も消滅してしまうことになる。

技とは宇宙の営みを形にしたもので、そこには法則や条理がある。これを開祖は、宇宙の法則であるといわれている。宇宙の法則とは、時間と空間、つまり、すべてのものに受け入れられ、結びつくことであり、それを形にしたものが技ということになる。だから、宇宙に則った技は、国籍や人種が違った相手、時代が違う人にも、有効に働くはずである。

しかしながら、宇宙の営みなど人智では計り知れない。137億年かけて創られ、又この先、宇宙が完成するまで、まだどのくらいかかるかわからない。宇宙の法則は無限にあるだろうから、一人の人間がその法則を見つけ、身につけるのには限界があるだろう。

しかしながら、合気道の修行は、この技の練磨であるから、無限にあるだろう技を練磨していかなければならない。

そこで、宇宙の法則を形にした技を練磨するとはどういうことなのか、また、どのように練磨しなくてはならないかを考えなくてはならない。

練磨には幾つかの段階があるが、基本的には三つに分けられ、そしてそれが絡み合い、螺旋状で伸展していくものとする。一つ目の練磨は、技を見つけていくことである。宇宙が一つのポチから始まり、今日があり、我々がいるわけだが、これまでの宇宙ができるためには、いろいろな営みや法則・条理があったはずである。開祖は、その法則・条理の多くを『古事記』やご自身の中に見出されていたわけである。つまり、天の浮橋、十字、螺旋、円のめぐり合わせ、陰陽等などである。

二つ目の鍛錬は、この技を身につけていくことである。天の浮橋、十字、螺旋で技を使っていくことである。それまで魄でやっていたものを一度忘れ、見つけた技でやっていくのである。ゼロからの再出発であるから、一度は弱くなるはずであり、よほどの勇気と決心がいるであろう。

三つ目の鍛錬は、宇宙の営みであるこれらの技に、自分を入れ込んでいくのである。技を小手先で使うのではなく、その技の中に、自分を入れていくのである。技が主で、我は従となる。ちなみに、二つ目の鍛錬では、まだ我が主で技は従である。

自分を少しでも多くの技に入れ込んでいけば、宇宙の営みがどんどん身に入っていくことになり、ひいては宇宙と少しずつ一体化していくことになるはずである。

合気道の目標は、宇宙との一体化といわれる。開祖は、これを道歌で、
合気とは 万(よろず)和合の 力なり たゆまず磨け 道の人々
と詠われている。

「万」とは宇宙でありeverythingである。宇宙との和合、つまり一体化はそう容易なことではないが、気を抜かずに技を磨いていきなさい、ということであろう。

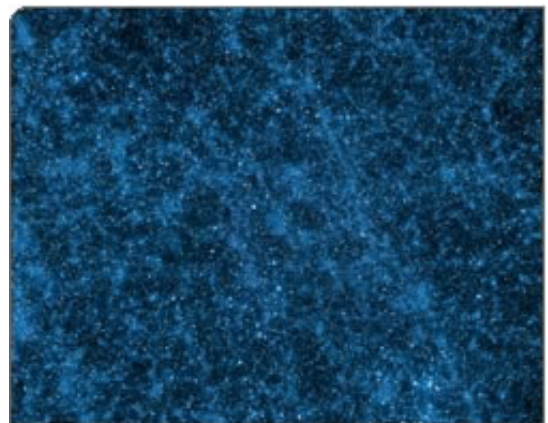
【第295回】「一を以って万に当たる」の道（道歌9）

合気道の最終目的は宇宙との一体化であり、そのために、宇宙の営みを形にした技の練磨をしていく。

しかし、技は無限にある。宇宙は有限ではないようだからである。ということは、技を一つ一つ会得したとしても、人の一生とか人類の生存期間中にできることなど、高が知れていることになる。宇宙と一体化できるほど、宇宙の営みを会得する可能性は、ほとんどないようにも思える。

万有万物はすべて、直接間接に繋がっていると考えられる。つまり、万（よろず）が網の目のように結び合っているのである。例えば、人はすべてアフリカの一女性から派生したと言われるから、人は自分の家族だけでなく、他人も外国人も、また時代が変わっても、みんな家族同士であり、誰もが網の目のように繋がり合っていることになる。

万有万物はすべて、137億年前に一つのポチから創造され、万（よろず）が網の目状でこのポチに繋がっているはずである。開祖は、このポチを一元の大神と言われ、この万を創造している大神様を忘れてはいけないと言われている。科学の世界でも、銀河が網の目状に分布していることは確認されている。



宇宙の網の目状構造 (国立天文台4D2Uプロジェクト)

また、「脳も網の目であり、進化するものは網の目であろう」（養老猛）と脳学者も言っている。

万（よろず）が網の目状で結び合っているとすると、一つの事を会得できれば、それが無限のものと関係し、結びつくことになる。ということは、一つの技を身につければ、無限の技に結びつくことになるだろう。

例えば、手を十字につかう技を会得すれば、陰陽、円、螺旋などと繋がっていく。また、手から足や体も十字につかい、十字に技を掛けていくようになるはずである。

もっと手近かな例を挙げれば、一教で折れないしっかりした腕ができれば、二教がうまくいくようになるし、小手返しもうまくできるようになり、他の技（形）もどんどんうまくできるようになる。

逆に言うと、一教がしっかりできないと、二教も小手返しもその他の技（形）もできないので、一教とすべての技（形）は繋がっていることになる。

つまり、一つがすべて（「万」）に繋がるということになる。一つというと、宇宙の無限と比べたら、ほんの微々たるものに思えるかも知れないが、実は、このたった一つでも万（よろず）ということになる。つまり、 $1 = \infty$ となる。

それゆえ、小さなように思えるたった一つの技でもよいから見つけ出し、それを身に着けることに、自信と希望をもって取り組まなければならない。それが、技の稽古である。開祖は、これを次のように道歌に詠われている。

日々(にちにち)の わざの稽古に 心せよ 一を以って 万(よろず)に当たるぞ 武夫(ますらを)の道

【第296回】 天地は主のつくりし一家（道歌10）

今回は、道歌「美しき この天地の御姿は 主のつくりし 一家なりけり」を研究してみたいと思う。

この歌は昔から目にしていたが、当時はこの意味することはただの空想であって現実ではないと思い、直接自分に関係づけては考えてなかった。しかし、合気道の修練を続けて来て、これは科学的事実であり、われわれは一家として仲よく美しく生きなければならない、ということがわかってきた。

これまでは知識としていろいろなことを学び、自分の一部として受け入れてきたし、合気道の技の稽古でも、技を自分の一部として身につけてきた。そしてこの道歌も、自分と対峙し、自分の知識の一部としての存在だった。

合気道は、知識を増やしたり、技の数を増やすことが重要なのではない。大事なの

は、いかに自分を技の中に入れこんでいくか、ということである。技や知識と対峙したり、自分の一部としてくっつけるのではなく、そこに入りこんで、成り切ることである。

この道歌も然りである。この天地にあるすべては、創造主につながる一つの家族なのである。だから、創造主である大神様に感謝し、その中でみんなで仲よくしなければならないし、また、各自が自分の使命を果たしていかなければならない、ということであると考えている。

主の大神様とは、何もないところからビッグバンを起こした万有万物の創造主であるポチである。この一つのポチから、いまの万有万物が創造されたわけである。宇宙、星、地球、生物、無生物、人間、動物等などすべて、このポチにつながっているのである。今の人類は、一アフリカの女性から派生していると言われるし、そのアフリカ女性は、動物や魚やバクテリア、そしてアミノ酸などの分子、原子、そしてポチに遡ってつながっているはずである。

進化するものは網目状に繋がりが合っている、ということである。宇宙は進化しているが、網の目状だという。「この宇宙には、星が数百億、数千億集まっている銀河や、銀河が数百個、数千個も集まっている銀河団、さらに何億光年にもまたがった銀河の網の目状の構造『大規模構造』など、多様な階層構造が存在していることもわかってきています」（ネット「宇宙図」）とある。

葉脈も網の目状の構造で、茎などと連結して水や養分を供給し、デンプン等の合成産物を運ぶ通路になっている。そしてこの葉脈は、茎、枝、幹、根につながり、他の葉ともつながっている。そしてまた、この葉も主の大神様につながっているのである。



葉脈（ネット）

生物の脳や神経や血管も網の目状に張り巡っているし、ソフトで見えない分野でも、物事は網の目上に発展、進化しているように思える。

例えば、商売は網の目状につながっており、東日本大震災で経験したように、その一つでも欠ければ商売に差しさわりが出る。逆に、新しい商売をする場合は、網の目の欠けているところを補うか、新しい網の目をつくれればよいことになる。学問の世界でも、すべての学問や研究が網の目上に絡み合っている。新発見とか発明をしたければ、既存の網の目を離れて、新しい網の目で研究していかなければならないということになる。

人も網の目状につながっているといえるだろう。ひとりの人は、どの人ともどこか

でつながっていることは間違いないから、やはり進化する人類も網の目状にあることになる。それも、現次元だけではなく、過去と未来の人達ともつながっているわけだから、三次元、四次元の網の目にあるといえるだろう。

人はみな家族である。われわれ人類や万有万物を創造された主は、一家としてつくられたはずである。周りの人を家族として見れば、争う事や殺し合う事や騙すことなど出来なくなるはずである。合気道の稽古でも、相手は家族であると思えば、愛の稽古ができるようになるだろう。

開祖は、合気道を通して、世界平和、地上樂園、宇宙完成を果たしていかなければならないと、いわれていた。その思いと思想がこの歌、

「美しき この天地の御姿は 主のつくりし 一家なりけり」
ににじみ出ていると思う。

この美しくあるべく天地が一家となり樂園となるには、まだまだ時間がかかりそうだが、少しでも早く、ひとりでも多くの人が、人も動物も植物もすべてが一家であることに気がついて欲しいものだ。が、それは先ずは合気道同人の使命だろう。開祖はそれに期待されているはずである。

【第297回】 合気道の公案

かつて開祖のお話をお聞きして、不謹慎にも時々、それは逆ではないか、矛盾しているのではないかと思い、頭が？※△＃？と混乱したことを覚えている。

その後、開祖がお亡くなりになり、開祖が話された内容をまとめた『武産合気』、『合気神髄』などを読むようになったが、それにも矛盾するように思える教えの文字を多々見かけた。

しかし最近では、これは禅でいう公案というものであらうと思うようになった。

公案とは、禅の祖師達の具体的な行為・言動を例に取りあげて、禅の精神を究明するための問題であり、禅の不立文字を表すものであるという。

不立文字というのは、文字では、本当のことは伝わらないという意味である。合気道の場合もまさしく、開祖の実際の修行と言動から出てきた実例であり、合気道を精進していくために解明していかなければならない問題であるが、文字だけではほんとうのことがわかりずらいので、まさに不立文字であると言えよう。

合気道は、陰陽、裏表、前後、上下、左右、強弱、呼吸、剛柔、魂魄、等など相反

するものを、表裏一体化したものを養成していくものであるが、技の稽古法においても相反し、矛盾し合うことを一体化して身につけていかなければならないようである。

これまでの論文で幾つか紹介したが、その合気道の公案と思われるものをここにまとめてみたいと思う。但し、一つの公案を、複数回書いているし、どこに書いたのか分からなくなったものもあるので、興味がある場合は、お手数でもお探し願いたい。

- 合気道は相手を倒すのではない。（しかし、武道であるから相手は倒れなければならない。）
- 相手はいるが、相手はいない（上達の秘訣・第254回・第281回）
- 争って、争わない（上達の秘訣・第282回）
- 目に見えないモノを見る（思想と技・第274回）
- 殺して生かす（思想と技・第231回）
- 相手を見てはいけないが、よく見なければならない（上達の秘訣・第231回）
- ぶつかって、ぶつからない（思想と技・第134回）
- 今日、教わった事は忘れろ
- 合気道は力は要らない
- 技は手で掛けるが、手をつかってはいけない

等など。

これまでのところ、公案に出会い、技の練磨を通して、自分なりに回答を出したつもりだが、公案をつくられた方が最早おられないし、周りにこの解答の良否を判断して下さる方もいないので、自分で判断するしかない。

判断の材料は、その回答で技が効くかどうかによると考える。技が効かなければ、どんなによい回答でも間違いのはずである。合気道の公案も、やはり不立文字ということになろう。

【第298回】 空の気と真空の気の結び（道歌11）

技を練磨して精進していく合気道の稽古は、一見自由で何でもありのようだが、これをやらないと技が生み出せないし、合気道を会得できないといわれるものがある。

例えば、何度も書いてきたが、技を生むにあたってはまず「天之浮橋に立たなければ

ばならない」のと同じように、空の氣と真空の氣を技に結びつけなければ、合気道は会得できないということである。

それを開祖は道歌で、
真空の 空のむすびの なかりせば 合氣の道は 知るよしもなし
と詠われている。

以前も「真空の氣」「空の氣」を7回も書いたが、まだまだ十分にわかっていなかったようだし、自分も満足できなかったのも、また、挑戦してみることにする。まだ会得したわけではないが、また少し感じるころがあったので書いてみよう。

最近では、「空の氣」と「真空の氣」はこのようなものかということ、技の稽古で実感している。

「空の氣」とは、それがあから五体は崩れずに保っていて、重い力をもっている。また、空の氣は引力を与える縄であり、自由はこの重い空の氣を解脱せねばならない。これを解脱して、「真空の氣」に結べば技がでる等と、開祖は言われている。

そして、「真空の氣」は、宇宙に充滿しており、宇宙の万物を生み出す根元。身の軽さ、早業は、真空の氣をもってせねばならない、と言われている。

合気道は引力の養成でもあるが、引力を与える縄であるから、相手をくっつけてしまうものが「空の氣」であろう。長年、合気道の稽古を積んでいくと、引力は強くなっていくようなので、空の氣も強まったり増大するといえるだろう。

また、この相手をくっつけてしまう空の氣は、重いといえるだろう。自分でも感じるが、相手の方がその重さをよく感じるようだ。開祖や有川師範のような名人や達人の傍にいと、重苦しい重圧を感じるのはそれだろう。

この重い「空の氣」で相手をくっつけたままでは、技を使ったり、技を生んだりすることはできないはずである。なぜならば、相手がくっついたまま離れないとか、相手が剣など振り下ろしてくれば、その剣までくっつけてしまい、切られてしまうことになるからである。

相手に掴ませた手で技をかける場合でも、相手がスキなく掴んでいる場合、つまりずっと手の平が張り付いている場合には、技は効かない。たとえ相手が手を掴んでいるとしても、強くつかませたり弱くつかませたり、または離させたりしなければ、技にならない。例えば、交叉取り二教をやってみればよい。しっかり抑えられた手をただ動かしても、動く事もできないし、技にもならないものだ。

これ（交叉取り二教）をうまくやるためには、空の氣と真空の氣を使わなければならない。まず、重い「空の氣」で相手をくっつけて、自分と一体化する。次に、左右に体と手を転換するが、くっついている相手の手にあった意識（念）をそこから消し去り、意識と体を宇宙の法則であろう陰陽、円の巡り合わせ、螺旋に切り替える。そして、また「空の氣」で相手を抑えたり、極めたりする。つまり、「空の氣」―「真空の氣」―「空の氣」と使うはずである。

早技になれば、重い「空の氣」を解脱し、「真空の氣」に結んでいることになったといえよう。身の軽さ、早業は、「真空の氣」をもってせねばならない。典型的な例として、「太刀取り」があるが、なかなかうまくいくものではない。大体は、不動金縛りにあったように動けなくなるか、逃げるかである。相手が打ってくる太刀の重い空の氣に縛られるので、うまくいかないものである。

「太刀取り」がどこまで上手くいくかいかないは別として、必須のポイントがある。まず、剣を振り上げた相手と対峙したら、重い「空の氣」の引力で相手と結ばなければならない。相手と結べば相手は自分と一体化し、自分の分身になるから、分身（相手）の動きや心が読みやすくなるわけである。

次に、相手に打たせたら、それまで相手と結んでいた「空の氣」から解脱し、心を無にし、念を消し、体は宇宙の営み、宇宙の条理に則った技（入り身・転換）の中に入れ込んでしまう。相手は打ったという手ごたえがあるはずだが、現実にはそこに何もないので、つんのめったり、たたらを踏むことになるはずである。

大事なことは、相手と対したらまず相手と結んで一体化することである。気持がぶつかったり、逃げれば、一体化はできない。

次に、この「空の氣」から解脱するのが難しい。どうしても相手の剣や体に気持が残ってしまうので、「空の氣」に捉まったままで、解脱ができないのである。この「空の氣」を解脱するには、自分の「空の氣」を完全に消し、真空となって身体を捌くことのように。つまり、真空とは心を空にする、念を消すということでもあるのだろう。

これができれば、「空の氣」は引力を与える縄である、自由はこの重い「空の氣」を解脱せねばならない、また、これを解脱して「真空の氣」に結べば技がでる、ということが理解できるだろう。

「空の氣と真空の氣の結び」は、合気道を修行していく上で、どうしても避けて通れない課題なので、まだまだ研究が必要のようだ。

真空の 空のむすびの なかりせば 合気の道は 知るよしもなし

を肝に銘じて稽古をしていかなければならない。

【第299回】 飽くなき探求と宇宙の営み

人類の歴史は4, 5百万年などといわれるが、人が生まれては死に、生まれては死にを繰り返しながら、何かに向かって、それも螺旋状に、突き進んでいるように思える。螺旋状という意味は、歴史を考えてみても、例えば戦争など同じ出来事でも、時が経つにつれて規模や影響がどんどん拡大している事でもわかるだろう。

我々人類の祖先も未来の人も同じだと思うが、現在地球上にいる人類は、みんな悲しい事には泣き、嬉しい時には笑い、腹が立つことには怒る。そして、少しでも楽しく、笑えるように生きたいと思っているはずだ。悲しいのに笑ったり、腹が立つべきなのに喜ぶ人はいないはずだし、楽しい事より悲しい方をよしと選択する人もいないはずだ。

人類は皆、喜怒哀楽も同じであるし、また、間違いなく、楽しい、嬉しい、幸せな方向に向かって進んでいるといえる。

芸術や科学の世界でも、飽くなき探求がなされてきているし、これからも続くはずである。芸術でも科学でも、また、芸術家にも科学者にも、これで完璧で打ち止めということはないはずだ。死ぬまで探求し続けても、それでも探求しきれなかったといって逝ってしまうのが、人の常であろう。芸術や科学などでは、飽くなき探求が人類に宿命づけられているようだ。

もっと身近にも、それが見られるだろう。人は誰でも、少しでも幸せになろうとしているし、少しでもモノを美しくしよう、美しいものを作ろうとする。そして、より美しいものに憧れる。人も学問も、そして世の中すべてのものは、ある方向に向かって進んでいるようである。

合気道は真善美の探求である、と開祖から教わっている。この合気道が目指している真善美こそが、その「ある方向」と考える。そしてこの真善美が「宇宙の営み」ということではないだろうか。

つまり、真善美の探求は、合気道の修行となると同時に、人の生きる方向であり、人類の目指す方向ということになる。

合気道の技は、宇宙の営みを形にしたものであるから、技を身につけることによって、宇宙に接近でき、宇宙の営みである真善美を身につけることができるようになる

るのだろう。それを証明して下さったのは、合気道の開祖である植芝盛平翁ご自身である。合気道の技は超人的であったし、その姿勢、動作、立ち振る舞い、言動、思想などなども、まさしく人として、真善美の極致ということができないのではないだろうか。

我々凡人が開祖のあの極致に行くことは、恐らく不可能だろう。できる事は、開祖に少しでも近づくように修行するだけである。それなら、誰でもできる。合気道の修行を通して、真善美を飽くことなく探求し続けることである。この飽くなき探求こそ、宇宙の営みであるから、その修行が宇宙の営みと一体化することになる。

これが、合気道は真善美の探求である、ということであり、合気道の目標は宇宙と一体化することである、ということであろう。

【第300回】 一霊の元の御親（道歌12）

合気道は「世界を和合させ、人類を一元(いちげん)の下に一家たらしめる道であり、神の「愛」の大精神、宇宙和合の御働きの分身・分業として、ご奉公する道である」と開祖はいわれている。また、「宇宙万有の世の進化は一元より発し、我らをして楽天に統一に和合へと進展させている」（「合気神髄」）ともいわれている。

現在過去未来の万有万物は、すべて一元よりできたもので、例外なくこの一元に繋がっている。この一元の本を親神様、大神様、天之御中主、ゴット等と呼んでいるのだろう。そして、一元は物体と精神などの二元を生み出していく。

開祖は、世の中が乱れたり、争いが起こるのは、人がこの一元の本を知らなかったり、忘れたり、または、この一元の本に繋がっていることを忘れていたためだといわれる。それ故、一元の本を忘れるのは罪であるともいわれている。

合気道の鍛錬でも、一元の本を忘れていれば精進は難しいだろう。開祖はよく、技の鍛錬をする際は、天之御中主の神にならないといけないといわれていたし、ご自身も神楽舞などを通して天之御中主の神になられていた。一元に繋がり、一元の本と一体化されていたのである。

それ故、合気道の道は宇宙の道であるともいわれている。合気の鍛錬は神業の鍛錬であり、これを実践することによって宇宙の力が加わり、宇宙と一体化できるという。それゆえ、一元の本を忘れれば、神業は難しいことになる。

一元の本の大神様を、開祖は道歌で下記のように詠われている：

一霊の 元の御親の 御姿は 響き光りてそ 生(な)りし言霊(ことだま)

（試解：神秘的な力をもつ一元の本の大神様のお姿は、言霊となって響き、光っておられる）

この歌から、一元の本の大神様に繋がるためにどうすればよいのかということが分かる。

つまり、一元の大神様は、響きと光の言霊になっているという。従って、この言霊が理解でき、感得することができれば、大神様と繋がることのできるはずである。従って、言霊とは言葉の霊力ということではなく、宇宙の響きであり光ということになる。

一元の大神様からの響き、宇宙の響きを感じ、一元の下で神業を練磨し、そして、開祖が目指された、「世界を和合させ、人類を一元の下に一家たらしめるために、そして宇宙和合の御働きの分身・分業として、ご奉公」したいものである。

参考文献 『合気神髄』
